THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年　第三號

第二百四十號

大隈伯爵、後藤男爵、有賀博士評序

英國牛津大學教授 エヂアトン原著

早稻田大學政學士 牛津大學殖民學專攻 永井柳太郎譯述

新刊

英國殖民發展史

洋裝背皮全一冊

正價金一圓二十錢

郵稅金十錢

英國民が眇たる北海の孤島に起りて現時の大帝國を建設するに至たる迄の歷史その者は殖民的膨張の必要に迫られつゝある我日本帝國民の取て以て研究すべき一大事實たり然るに我國民は殖民事業に就て何等の定見を有せず故に我國の將來に於ける殖民的膨張と重大の關係ある韓國及び滿洲の施設の如きも今尚模糊の間に在るを免れず世界列强が殖民的膨張の口實と手段とを發見するに其心肝を碎きつゝある現時に於て我朝野を擧げて殖民の事に疎きは危險の極と言はざるべからず此時に方りて本書の出づるもの豈偶然ならんや

發行所 東京牛込區早稻田 早稻田大學出版部

發賣所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大好評初版即日賣切れ再版出來

德富蘆花原作幷閲
柳川春葉脚色

脚本 不如歸

定價金三拾錢
郵稅金四錢

小說「不如歸」は蘆花先生の傑作として世に持て囃されて空前の發行高なる事は已に世人の知る處で今更喋々するの必要がないが此の脚本は其の小說の尤も面白き部分を取つて脚色したる者である由來「不如歸」は新派俳優の獨參湯と成つて居るのは幾度見ても飽無い位面白いからである。此の脚本は春葉先生が原著作者蘆花先生と合議して作られたものであるから「不如歸」の脚本としては完全なる者で卷中の人物は一々活躍して居る之を讀んで居ると恰も劇場に居る樣な心持がする切に讀者諸君に御勸め致すのである

柳川春葉作

脚本 雪子夫人

當一月本鄉座に於て伊井一座の上場せし脚本

定價二十五錢
郵稅金四錢

東京日本橋區馬喰町三丁目十四
今古堂
振替口座東京四九〇七

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達を致し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御滿顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一金七圓五拾錢也	同 徑三寸丸 同 目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也	同 徑三寸五分丸 同 目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也	同 徑四寸丸 同 目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也	同 徑四寸五分丸 同 目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也	同 徑五寸丸 同 目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也	純銀製徑二寸五分丸臺三ッ組無地盃 上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也	同 徑三寸丸 同 目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也	同 徑三寸五分丸 同 目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也	同 徑四寸丸 同 目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也	同 徑四寸五分丸 同 目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也	同 徑五寸丸 同 目方正味二百卅匁付

一定紋彫刻	一個	金壹圓五拾錢
一文字彫刻	一字	金拾錢
一大字彫刻	一字	金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

商 玉寶堂

電話下谷 特九六五 一二四四

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限内ニ死亡セバ)の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に渉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證券を擔保に貸金の便法もあり

眞宗信徒生命保險株式會社

京都市下京區油小路御前通角 (電話 七貳貳番) 京都本店

東京市京橋區南槇町壹番地 (電話本局五壹八番) 東京支店

大阪市東區大川町御靈筋角 (電話東壹貳五參番) 大阪出張所

長崎市榎津町六十五番地 (電話 七貳六番) 長崎出張所

廣島市紙屋町(秦 忠兵衛方) (電話 六〇八番) 廣島出張所

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

驚駭すべき大革新

議論公平

太陽

有益多趣

三月一日發行 第拾五卷第四號 正價三拾錢 郵税三錢 前金郵税共三冊九十六錢 十二冊三圓五十六錢

◉北米に於ける排日問題 法學博士 浮田和民氏

◉新財政計畫の內容……本多精一

◉三税廢止論の精神……島田三郎

▽をんな 草野柴二

▽銅山王 佐野天聲

▽怪力亂心 巖谷小波

◎文士の見たる政治家（內藤鳴雪氏 戸川秋骨氏 江見水蔭氏 小杉天外氏 德田秋聲氏 柳川春葉氏 廣津柳浪氏 德田秋江氏）

◉神道興隆 國粹發展論……遠藤博士

◉世界無比の帝國憲法……金子子爵

◎議院觀 鵜澤博士。長島鷲太郎君。福本日南君。加藤恒忠君。村松恒一郎君談。

◉文學の狂的分子……長谷川天溪

◎名士の北米觀（▽海軍大佐鳳生君談 ▽正義人道生君談 ▽安部磯雄君談 ▽安孫子久太郎君談）

◉宗敎と史傳 山口正一郎

◎大隈伯座談

● 本誌募集 新進理想的代表的名家投票 第二回發表

▽當選者 各方面を通じて廿五名（詳細は本誌を見よ）

東京本町 博文館發行（振替貯金 二四〇番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

▼全一冊　定價金五拾錢　郵税金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出て、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の内、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに試驗問題に擬し、別に詳密叮嚀なる解釋を附せられたるものにして、問題の數實に七百以上に及べり

されば、一般英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の内に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　**反省社出版部**　（電話下谷九百十九番）（振替東京三十四番）

發賣所　東京堂　上田屋　東海堂　北隆館　三共社等其他

懇切周到、歐米にも比類なき沙翁研究書出づ

早稻田大學講師 菅野德助先生著

新刊

對譯評註 悲劇オセロ

（見本八頁 郵税二錢）

各頁を原文、對譯、評註の三段に配列し、譯文は句々原文と對照して嚴正流麗直に舞台にも上ぼすを得べく、字義文法の解説は各行に亘り懇切を極め、又著者の評釋以外、泰西諸大家の批評、各優の型を數多引照し、且つ秀拔なる圖解ありて想像を助く、實に語學、文學、演藝の研究を兼ねたる大著述にして、我國沙翁文學研究に於ける未曾有の貢献たるべし。

菊判 總クロース
紙數 四百頁
正價 壹圓五十錢
郵税 十二錢

英文を解せざる人も、譯文に依りて最も正確に沙翁大悲劇の如何なるものかを知り得べし。

賣捌 東京堂、有明堂、至誠堂、上田屋、北隆館、東海堂、大阪杉本、久留米菊竹、

東京神田區雉子町 振替第七九九五番 玄黃社發行

○創立廿一年、新築校舎落成、寄宿舎設備アリ、

○本科選科一年級各五十名、各級若干名入學ヲ許ス、

生徒募集

女子文藝學校

東京麹町區中六番町六番地

○高等女學校程度ノ卒業生ハ本校研究科ヘ入學ヲ許ス

○入學申込期限　三月卅日

四月一日發行

中央公論

四月一日發行

春期大附錄號

本誌は例に依て四月一日を以て「春期大附錄號」を發行す。

附錄として掲載せらるべき

平穩 德田秋聲

枝 眞山青果

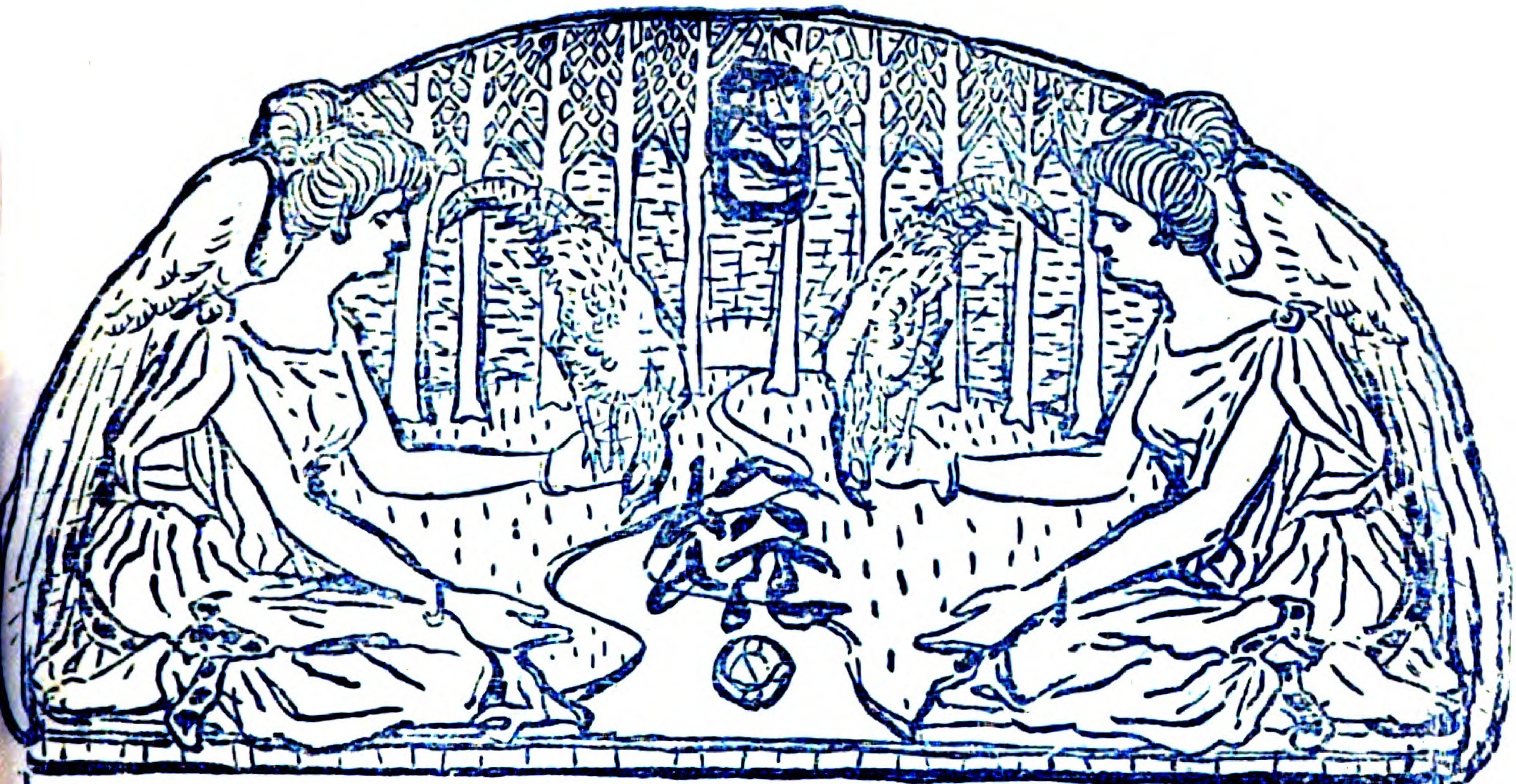
惡緣 正宗白鳥

の三篇は何れも百枚內外の長篇小說にして作者が從來と異りたる方面に材料を捉へ、若くは從來と異りたる描寫を試みんとする新努力によつて成れるもの、此三大雄篇が如何に我文壇に貢獻する所あるべきかは、吾人の多言を要せざる所と信ず。又脚本

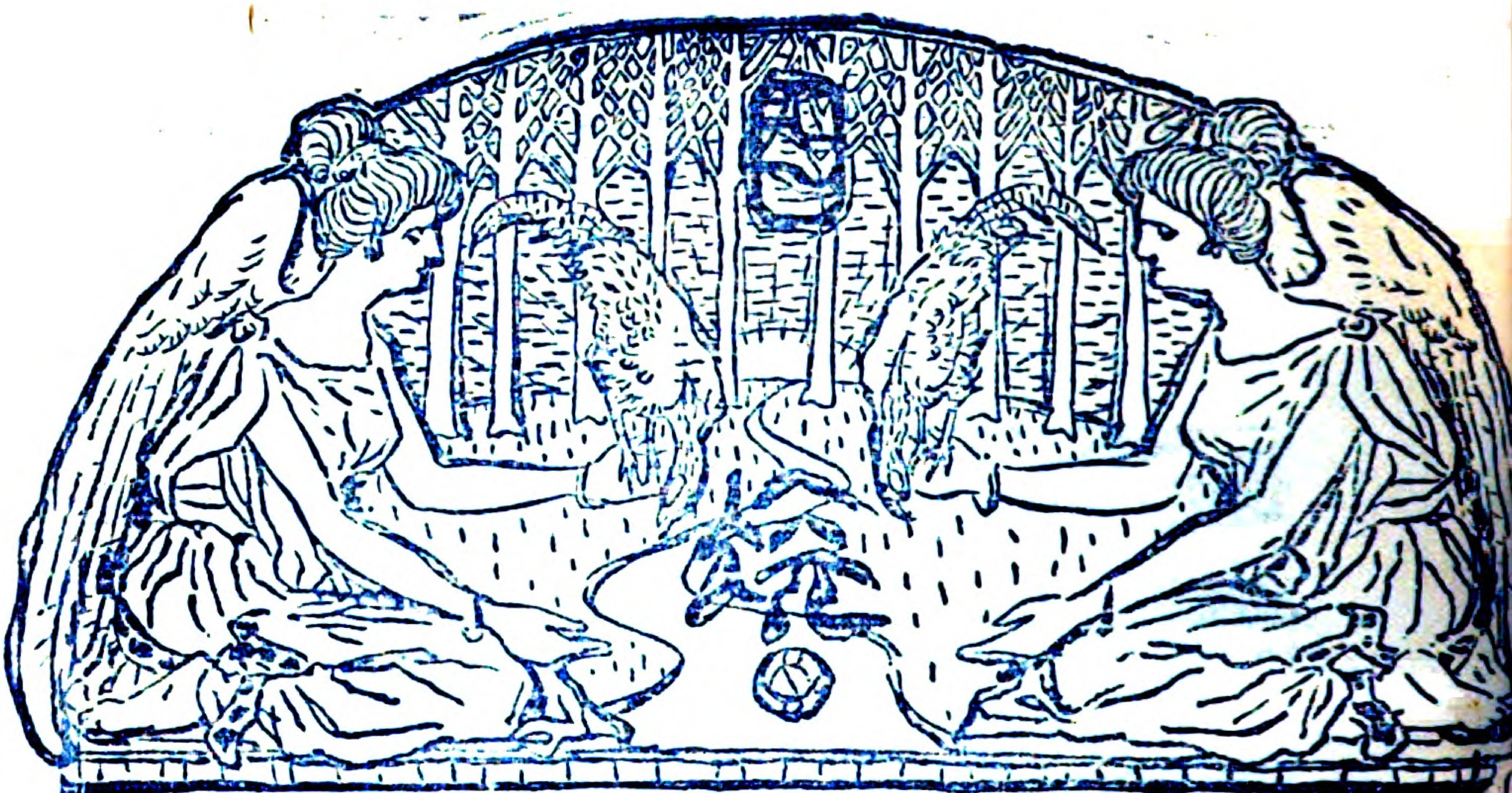
廢馬 佐藤紅綠

は本鄕座の「陽炎」と殆んど全一の材料を、彼れを今日の一般觀劇者を相手とする演ずべき脚本、此れを文學的素養ある讀者に供する「讀むべき戯曲（レーゼドラマ）」に書き分けたるもの、以て劇作者としての氏の理想の一部を覗ふに足るべし。吾人は敢て文壇劇壇の愼密なる批判を乞はんと欲す。

論文及び說苑には現代第一流の大家の寄稿を蒐錄し、以て些か江湖の深厚なる眷遇に酬ゆる所あらんとを期す。



中央公論第二十四年第三號目次



此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ





此美人の持てる寶丹の匙はおのづから十徳を具へて其利便いふばかりなし、そは服藥の用を爲すは固より云ふを俟たず、かむざし、耳かき、小楊枝、草子箸、筋たて、火箸、糊へら、爪さうぢ、枝折等に活用せらる、また裏面に刻せる妙の一字には千万無量の德あれども盡しがたければ略しぬ。(木花園)

此匙は金三十錢以上の寶丹に添て贈呈す

●寶丹を少量たりとも時々に服用せば、口中を清め、胸をすかし、身心ともに爽快を覺ゆること疑ひなし、主治としては頭痛、眩暈、腹痛、下痢、四季の感冒を始め、其他の諸症に効驗ある事は今更に云ふ必要なし、こは既に實驗者諸賢の御確認あらせ玉ふ所なりと信ずればなり。

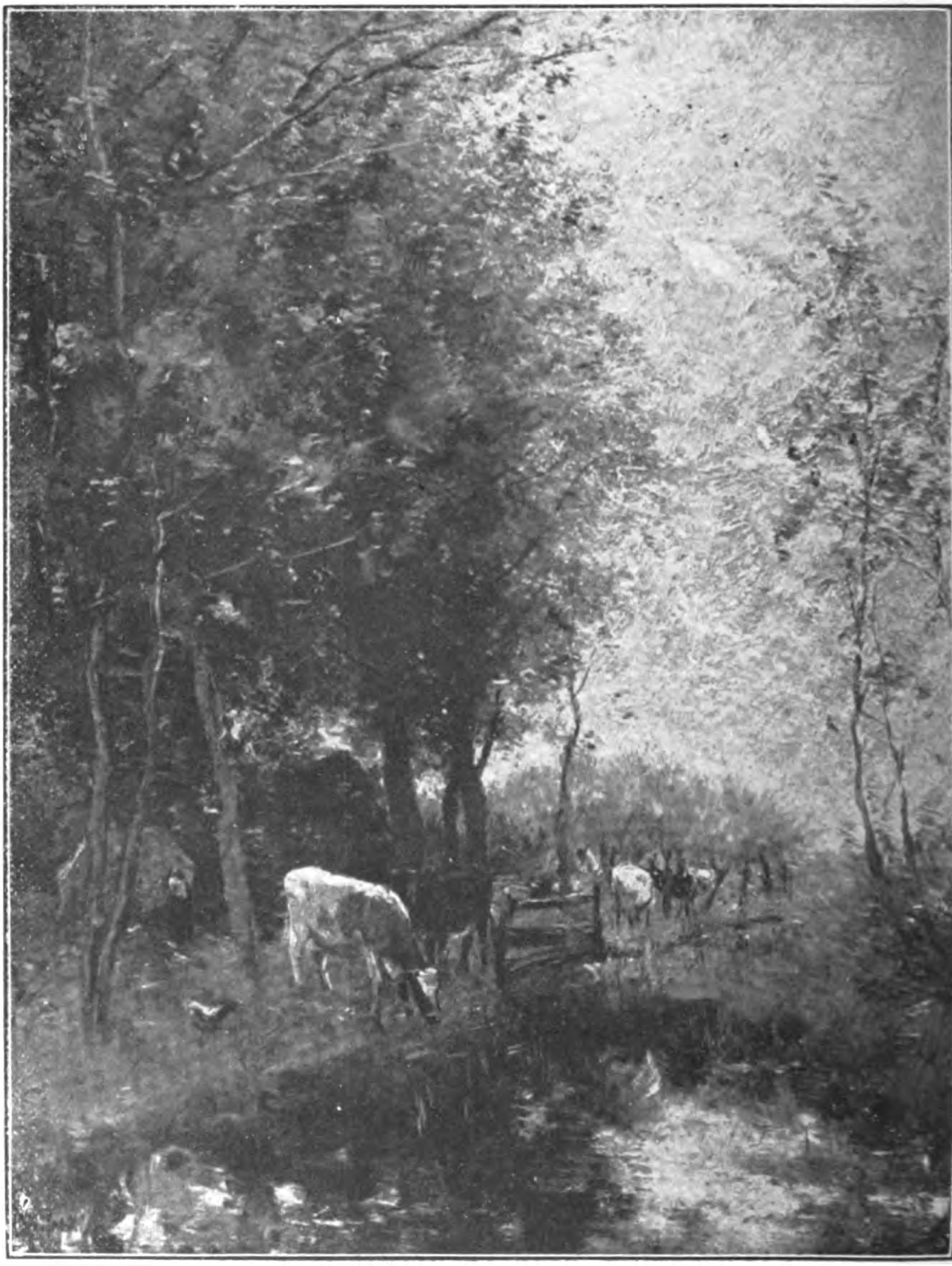
寶丹定價

家庭用……金壹圓　金貳圓　金參圓
懐中用……金廿錢　金卅錢　金五十錢
御試用……金十錢



寶丹本舗守田治兵衛

"SPRINGTIME"



WILLIAM MARIS



第二十四年
第三號
（第二百四十號）

新政黨組織の大勢

（一）

現今政治界に於ける主要なる問題は、言ふまでもなく新政黨組織の成否是れ也或は二大政黨の對立を以て、憲政の運用に缺く可らざる條件の如く思惟するものあり、多くの黨人、多くの新聞記者等現に然りとす、然れども是れ英國の議院政治を以て最良なりと妄信する謬見に出づ、王室と爭ひ、王を弑し、王を要して強ひてマグナカルタを得て、自然に今日の政治を馴致し來れる英國の歴史を會得せざる短見に出づ、之を理想的に考へ、且つ世界の大勢より推すに、三個以上の政黨の存立するを最上とす、然る時は二個以上の政黨の援助を得るがために、内閣は常に國民の信用を得べき最善の政策を立てんとを努め、而して政黨また他と聯合し提携するがため、互ひに我意を捨てゝ、公平な

る態度に出てんとを競ふ可ければ也、是れ政府政黨をして互ひに横恣に流れず、常に公平誠實に君國のために圖らしむる所以ならずや

看よ現在政友會が單獨を以て衆議院の多數を制するがため、其の專恣の弊漸くにして長ぜんとするにあらずや、彼れや他の壓力、殊に政府の壓迫を蒙むらば、輙もすれば其の一角を突崩されて、所謂絕對的多數を守持し得ざるがため、力めて靜平無事の間に其の結束を固めんと欲し、且つ世間の同情を喪はざるがため、幾んど小心翼々として謙抑の態を執ると雖も、尙ほ多數を恃みて、往々專恣に流るゝ風なき能はず、況んや其の結束全く成りて自から戒心を弛ぶる時に於てをや、一黨多數の弊拒ぐ可らず、地方自治の基礎の如き先づ第一に其の弊習に浸犯せらるゝを免かれざらんとす、之を極言すれば、一黨多數の弊は國の基礎を動かす虞ありとするも、必らずしも誇張ならじ

二個以上の黨派連合するも、多數を制する場合尙ほ横恣に流れ易しと謂ふ乎、然れども一黨横恣なれば他の黨派を刺擊して連合を解かしめ易し、他の黨派も亦國民の信用を顧念して容易に放恣ならず、假令横恣なるも、一黨にして多數なるよりも横恣ならず、理勢素より然れば也

且つ我が貴族院には、多數黨の暴横を憎むの情最も強きものあり、一黨若し多數を占め、而して政府の基礎主として此の多數黨に在らん乎、貴族院は感情的に自から之に反抗すると無きを保せず、故に內閣公平に最善の政策を立て、之に由て二黨以上の援助を得るに如かず、斯くすれば貴族院の感情また融和して、自然に其の公平と誠實とを諒とす可ければ也。此の場合に在ては、內閣の基礎必らずしも聯合

黨にのみ偏するを要せず、貴衆兩院は勿論、汎く國民的に適材を求めて適處に配置することを得、其の施政また國民的に最も公平誠實なるを得べき也

故に政治上の理想として、吾人は議會に二個以上の政黨の存立するを以て最良の方法なりと斷言す、而して是れ最も我が國情に適したる憲政運用の名案たるを疑はず、彼の兩黨對立を以て憲政の發達に缺く可らずと做すが如きは、深く思はざる淺薄論のみ

(二)

吾人は此の見地よりして、新政黨組織論の基礎の兩大黨對峙に在るを非認す、惟ふに新政黨も亦少くも三個に分立すべき乎、請ふ少しく事實に就て觀察せよ。

所謂新政黨組織論なるものは、進歩黨、戊申倶樂部、又新會、大同倶樂部の四政派を打て一丸とし、以て政友會と對抗するを目的とす、然れども此の四政派は果して渾然融合すべきや否や

進歩黨中には改革、非改革の兩派あり、改革派は勿論新政黨主張者なるも、非改革派は必らずしも然らず、唯だ非改革派の首領、犬養氏は、自派の漸く孤立して形勢の日に非なるを視、寧ろ機先を制して又新會と合同し、以て一政黨を組織せんと欲するが如し、吾人の聞く所によれば、大隈伯は一日島田氏を招きて晝餐を倶にし、食後の懇談中從容として『犬養の局量偏狭なる、竟に今日あるに至れる皆自から招けるのみ、然かも今の境遇や實に憫むべきものあり、舊友の誼として之を救ふの道なきや否や』と說けり、而して翌早朝犬養氏は島田氏に電話を以て面晤を求めたりき、島田氏は進歩黨を去りし後、犬

養氏と公會の席上に於て相見しと一再ならざるも、對坐交語したることは一回も之あらず、而して突如面談を求め來りたるを以て、必らず進歩又新兩派合同のためなるを猜し、辭を構へて之を謝絕したりといひ、又一說に、犬養氏等より密かに又新會の有志に合同を謀れるに、又新會の人々は『公等解黨し來るも之を拒まず、唯だ我が又新會を解くが如きは思ひも寄らず』といひ、暗に合同を拒絕したりしとも傳ふ、世間或は虎ノ門俱樂部に於ける三稅廢止聯合懇親會を以て、新政黨組織の準備と視做す者あり、犬養氏等は或は然かく企圖したりしも知る可らず、然かも又新會の多數に斯る考慮なかりしや疑ふ可らず

新政黨組織を企つる一派の中には、進歩黨の非改革派が漸次合同に同意し來れるを以て、犬養氏と進退を同くするもの數名に過ぎず、多くも十數名に過ぎずと揣摩するものあり、犬養氏が早く又新會と合同し、進歩黨の全部を提げて之に加はらんと計る目的の果して遂げらるべきや否や、恐らくば疑問ならん、否、進歩黨兩分し、一は犬養派として又新會の或るものと合同し、玆に小なる一黨派を作ると觀測するを以て、比較的事實に近しと視て可なるべし

（三）

戊申俱樂部には、多少の動搖なきにあらず、現に戸水氏は公然脫會すべきことを明言し、而して之を抑止するに力めたりしものあり、鳩山氏は戸水氏を政友會に招致せんと欲し、密かに好地位を掛けて之を誘へるに、戸水氏頗ぶる動けりともいふ、他にも新政黨の組織を見るに至らずんば、寧ろ政友會に趨りて以て多數黨たる利益に均霑すべしとする者もあり、其の領袖等は之を抑止して速かに新政黨を作らん

と欲し、密かに進歩黨の一角に交渉する所あり、仙石、片岡、中村の諸氏と、大石氏等との間には、現に密議中なるに似たり、此の人々の推測に據れば、戊申倶樂部の四十人と、大同倶樂部の三十人と、進歩黨中の四十人とを併せて、差向き百十人の議員を網羅し、又新會よりも十餘名を羅致して、茲に少くも百二十人を得、更らに政友會の一角を裂かば、百五十人内外の議員を得んこと難からず、斯くして政友會の多數黨たる現狀を打破し、政界を三分して其の一を保ち得べしと揣摩するに似たり

且つ此の一派は、其の進退果して機宜を得るに於ては、進歩黨非改革派の大部分をも網羅し、更らに又新會の多數をも招致せば、政友會より約五十人を拉し來り得べく、然る時は、幾んど二百人に近き頭數を舉げ、却つて衆議院に多數を制するに足ると算するが如し

又新會は眞に烏合の衆也、其の幾んど總てが徒らに辯を好みて呶々する、恰かも烏の如し、目して烏合の衆と爲す實に適評也、然れども其の有力者には、空しく饒舌し、徒らに集團するも、竟に事に益なきを察し、寧ろ抱負の實行に鋭意せんことを期し、從つて新政黨に加はるの必要を感知するも、名分上未だ漫りに進退するを得ず、爲めに何等か公然の口實を得んと欲するの意を抱くに似たり、而して之がために策るものは以爲らく、前内閣の六年計畫を十一年計畫として事業を繰延べたる以上、更らに二三年を延べて、十三年計畫又は十五年計畫と爲すこと難事ならず、斯くして第一に軍備偏重の財政を改むるの名義を得、次には四十四年度より條約改正の結果關稅收入の増加あるを以て、此の増加額を缺陷補填に充つるの條件を以て、惡稅廢止を公約すべし、斯くして第二に三稅廢止の主張を串徹するの名義を得、由

て以て又新會の大部分を新政黨に加はらしむべしと

此の策士一派は、斯くして十三年乃至十五年計畫と、惡稅廢止の公約とを以て又新會の大部分は勿論犬養氏の一派をも招致すべく、而して政府及び大同派も多く之を苦痛とすべき理由なきのみならず、政友會の一角も亦必らず好んで來り投ずるを以て、容易に大なる新政黨を成立せしめ得べしと思ひ做すものに似たり。果して策る所に違算なきや否や、抑もまた事實玆に至るべきや否やは、吾人未だ猝かに判斷すると能はざるのみ

（四）

新政黨組織は、必らずしも主義政見を同くするもの〻結合するには非ず、若し主義政見の同じきもの〻みを集めて組織するとせば、何等の面倒も、何等の手數も要すると莫し、理をいへば、大體にても主義政見を同くするもの〻結合を政黨とすべき筈なれども、事實は必らずしも理に合はず、寧ろ勢力の强大を目的として結合すると、世界の政黨、殊に我が國政黨の通有性たり、若し主義政見の同じき集團ならば、如何なる政黨にも內訌あるべき筈なし、然るに進步黨は改革非改革の爭訌到底一掃する能はず、而して黨として最も節制ありと稱せらる〻政友會に在てすら、現に二日會、硬派團等と稱するもの相鬩ぎて、頗ぶる幹部を困惑せしめ、竟に總裁の盡力を煩はしたりしにあらずや、若し主義政見を以て結合したる黨派ならば、豈斯の如きとある可けんや

故に主義政見を以て離合すべしといふは、黨人の表看版のみ、然り、一種の口實のみ、自から欺むき

世を欺くのみ、然かも今日尙ほ新政黨組織の旗幟として、主義政見に拘泥するは、世間體を瞞せんとする稚態に過ぎず、依然として議論に淫する也

政黨の目的は、政權を掌握し、若くば少くも政權に密邇して或る政治を行ふにあり、此がため勢力の強大を要するが故に、乃ち多數集合するのみ、故に政黨は猶ほ藩閥の如し、僅かに其の運動の陰陽明晴に差あるを異なりとするのみ、夫れ勢力の強大を期する以上、絕對に多數を制するを以て、政黨最要の手段とせざる可らず、必らずしも二大政黨對立を要せず、一黨獨占の地位に立つを利とすべし、少くも今の政友會の如く獨り多數を占めて、而して他の黨派は七花八裂、紛々として相合はざるを利なりとすべし、政黨本位とすれば、素より然らざるを得ざる也、然れどもトラストの怖るべきが如く、獨占會社の弊あるが如く、多數黨には專恣橫暴の弊あり、國家本位より斷じて、二黨以上の分立を最も妙なりとするのみ

（五）

新政黨は恐らくば二個に分立すべし、假令一時一黨となりて、政友會と所謂二大政黨の對立となるも幾くならずして分裂し、また少くも三黨鼎立を見るべし、吾人は事實の必らず玆に至るべきことを推斷す犬養氏の一派は、必らず最少數黨と爲るべし、氏の特質に於て然り、氏と好尙を俱にするもの〻數に於て然り、然れども氏等は、政友會と新政黨とが兩つながら絕對の多數を制するに足らず、僅々の差を以て勝敗を分つの地位に在るべきを豫想し、自派小なりと雖も、巧みに此の間に處せば、兩黨の死命を

制して能く政界を意の如くすべしと思ひ做すと、恰かも故佐々克堂の策るが如くせん乎、是れも亦一策にして、而して氏今日の境遇及び性質に於て竟に斯の如くするの外なからんとす、故に新政黨なるものは、大同派の全部、進歩黨の大部分、戊申倶樂部の殆んど全部、又新會の一部分と政友會の一小部分より成り、而して政友會と犬養派とは、各派の分子を互ひに吸集し爭奪して、政友會は過半數より稍々減じ、犬養派は多くも四五十人を出でざるべし

吾人は事實の斯の如くなるを以て、現狀より遙かに有利なるとを信ぜざる能はず、乃ち政府は一黨のみに偏倚する能はず、力めて最善の政治を以て兩黨の援護を得んと期する結果、政黨も亦比較的に公平嚴正なる態度を執り、而して貴族院また感情に趨らず、平正に贊否を決して、結局國政の改善を期圖し得らるべければ也

一代の師表的人物

(一)

一言にして天下の法となり、匹夫にして百世の師たる底の人物は、如何なる時代に於ても必要也、斯る人物に貧しき社會は不幸也、全く之を有せざる國民は禍也

釋迦、孔子、基督は千世の師表也、否、人世の最善なる師表也、斯の如きは如何なる時代にも之ある

を望む可らずと雖も、總ての時代には、其の時代に適當なる師表的人物あるを要す、日蓮、親鸞は百世の師表也、是れも亦總ての時代に之あるを望む可らずと雖も、其の德望一鄕一國を感化し、延きて一代の模範と爲るべき人物は、如何なる時代にも缺く可らず

一代の師表たるべき人物は、時代の要求に應ずる資質を有す、隨つて其の性格悉く一なるを得ず、干戈僅かに收まれる時代に在ては、忠信寬恕を主とする中江藤樹の出づるあり、太平に馴れて漸く驕泰ならんとする時代に在ては、士道を砥礪する山鹿素行の出づるあり、輕浮俗を爲して偷安是れ事とする時代に在ては、勤儉重厚にして經濟の才ある二宮尊德の出づるあり、總て時代の宜しきに隨つて、學德を以て一世を率ゆるの概あり、竟に能く一世の師表たる也

(二)

今や學問の道大に備はり、官民立の大學中學を始め、到る處小學校の設けありて、教育の盛なる、前古未だ曾て有らざる所とす、國民の智能を啓發するに於て殆んど備はらざる所なしと稱するも可なり、然れども眞に個人の智能を啓發し、其の德性を涵養して人格の完全なるものを作るべき眞の教育に至ては、吾人未だ之あるを視ざる也、蓋し眞の教育者として、其の誠意と德行とを以て、人を感孚し德化するものあらざれば也、學問の切賣はあり、授業料と講義とを交換する一種の貿易はあり、師として子弟を教へ、子弟として師に事ふるものは、一部の小學校を除くの外、殆んど絕て之あらず

好むも好まざるも、故福澤諭吉翁の人格を尊重せざるものは莫かるべし、彼れが教育者として偉大な

りしヿを否定し能はざるべし、彼れや一世を擧げて空論に流れ、士の生業に拙なるを慨して、竟に黄金萬能を唱へたりき、是れ猶ほ藤樹、素行、尊德の時代に應じて其の宜しきを行へるに齊しきのみ、之を以て彼れを累すべきに非ず、抑も又彼れが眞の教育者として、一代の師表たるヿを無視す可らざる也

彼れ去つて後、眞の教育者は寥乎として看るべきなし、大隈伯は都下私立學校の最大なる早稻田に總長たるも、教育者としては未だ信用さるゝに至らず、依然政界の怪傑として或る野心の凝塊の如く視らるゝを免がれず、鎌田氏新渡戸氏酷だ相肖て而して共に重厚の風に乏しく一代の師表たるには、尙ほ多くの年處を閲せざる可らざるに似たり、餘子は乃ち碌々評するに足らず

所謂教育界を瞰ふに、師表たるべき人物なく、又自から師表たらんヿを期する人物もなきが如し、或は之ありて、未だ世に聞へず、而して又世に認められざる也、乃ち有るも無きに齊し

（三）

一代の師表たるべき人物は、必らずしも教育者に限らず、政事家も可也、實業家も可也、著作家も可也、殊に天下の高居に立つて、社會の注目を惹くものに在ては、苟くも其の性格を有する以上、直ちに師表とせらるべし

試みに此の方面に物色せん乎、彼の西鄕、木戶、大久保の三傑は、詢に師表たる資格を具備したりき、彼等の人格、殊に忠誠にして君國を憂へ、一身を以て國家國民に殉ずる純潔なる精神と、常に此の精神に戻らざる德操とは、優に一代に師表たるに足れる也今の伊藤公は、其の勳業遙かに三傑の上に出て、

位また人臣を極めて、遠く三傑の及ばざる所なるも、一代の師表たるが如きは、竟に世の許さゞる所たり、然る所以は他なし、其の精神と、其の精神と相戻らざる操行とに於て、未だ天下の信を得ざるが故のみ、彼れ老來尚ほ好んで酒色に沈湎し、以て日本の謝安とす、斯の如きは三傑と雖も亦其の癖なかりしに非ず、然かも三傑に在て毫も累せらるゝ所なくして、唯だ彼れに於て常に識者の笑侮を免かれざるは何ぞ、三傑には能く之を蔽ふに足るの精神と操行とありしも、彼れには乃ち之れあらざれば也、彼れ君國に盡すの精神恐らくば人後に落ちざらん、然かも智餘りありて德足らざるが爲めに、操行其の精神に伴はず、三傑の清廉にして死後一頃の田なかりしが如く、彼れも亦今の元老中唯一の清廉家たり、然かも三傑が他の不清廉を許さゞる氣魄ありしに比して、彼れは他の不清廉を默認する缺點あり、器度の三傑よりも遙かに低き所以にして、其の操行の竟に精神に伴はざるの致す所たり、三傑の如き誠意は蓋し彼の缺如する所にして、此の一事常に輙もすれば世の笑侮を受くる所以にして、其師表たると能はざる所以なりとす

西園寺侯は識度宏遠にして資質飄逸、物に拘泥せざるの結果、到底他の師表たるに足らず、桂侯の如きは智巧の士にして誠意の人に非ず、然かも其の素行の伊藤公に比して尚ほ低き、士君子の歯するだも潔しとせざる所、如何ぞ師表たるに足らんや、尾崎行雄氏の清純剛直なる、一時殆んど師表たるべしとして矚望せられたるも、近時其の人格を蒙晦ならしめたる傾向あり

澁澤榮一男は所謂實業界の泰斗なるもの也、三分の公心と三分の俠氣とあり、紛々たる實業家中に在

で、僅かに談ずるに足るも、尙ほ一代の師表たるには未だし、斯の人を除けば、餘子は唯だ利慾に汲々たる匹夫のみ、甚だしきは一部より奸商と罵らるゝに至る

操觚者流の中に在て、博士三宅雪嶺氏孤高獨節、嶷然として異彩あり、然かも未だ甚だ世に聞へざるに於て、一世の師表たるに至らず、竟に操觚者中の師表たらんも、一世の師表と仰視さるゝに至るや否やは疑問也、他は權家の爪牙たらずんば則ち富人の幇間たるに過ぎず、才華餘りありて威德寸分だもなし

（四）

宗教の威信なき今日より甚だしきは莫かるべし、而して師道の衰へたるや久し、此の時に於て偉大なる人格を以て一鄕一國を感孚し德化し、延きて以て一代に及ぼすものなきは憂ふべし、斯の如くにして一代の風尙日に低く、唯だ勢利に趨り、富貴をのみ重んぜは、人世は唯だ墮落あるのみ

近時學生の放縱殊に甚だしきは、敎育社會に師表たるべき人物なく、假令人物あるも未だ大に彰はれて其の感化を及ぼす莫きが故ならずや、堂々たる大會社の重役にして唯だ利に走り、爲さゞるとなきに至つて、驚ろくべき破綻を暴露し、延きて歐米人をして日本實業家の品性を疑はしむるも、彼等の間に未だ師表とすべき人物なきが故ならずや、政事家が賄賂を取るに知にして、民に信なきを耻ぢざるも、一世の師表たる人物の儼乎として之を監視する莫きが故ならざらんや、若し斯の如くにして十年廿年ならば、世は轉た濁らん、天下唯だ利を重んじてまた仁義を解せざるに至らん、是れ人は乃ち獸類と擇ぶ

なき也

カーライル曰く『英國の大を以てして誇るべきは領土に非ず、富に非ず、シエクスピアの作物なり』と。日本にして今一代の師表たるべき人物に貧しきは、不幸也、禍也、南は臺灣を合せ、北は樺太の南半を收め、覇を東亞に稱して所謂世界一等國の班に入れるも、一代の師表的人物を缺如するに於て吾人は竟に誇るに足るものを有せず、否、自から戰々として深憂なき能はざるのみ



唯物史観

（序説）

藤井健治郎

一

中央公論の一月號に、丘博士の『所謂文明の弊の源』と云ふ論文が載つて居る。其の大意は人は、今日の人心の浮薄に流れて、みだりに虚位虚榮を獲得せんとする風潮を以つて、偏に罪を物質的文明の發達に歸して居るやうである。が、自分の見を以てすれば、それは間違ひてある。物質的文明と、道德の墮落人心の荒廢、この二つの現象は成程同時に起つた現象に相違ないが、兩者の間には必ずしも因果の關係があるのではない。換言すれば物質的文明は、必ずしも人心荒廢の源因てはない。唯今日の制度に於て、貸したるものに利息を附くると云ふ制度が存する爲め、富めるもの益々富み、貧しきものは益々貧しくなり、其處で中等の階級が漸次に倒るゝ事となる。此の中等の階級なるものは、社會に於ける最も健全なる分子であつて、實に一社會の運命を左右する力を持つて居るものである。それが今の如き狀態にあるからして、勢、道德の荒廢、人心の浮薄を來たす事となつたのである。と言ふのであつた。

此の論旨は誠に好い思ひ附で、大體に於ては僕も博士の見に贊成の意を表するものである。が、博士の說く所餘り簡に過ぎて、少しく其の要領を盡し居らざる恨みもあるし、また一つは右の博士の論旨は、之を歷史的に見れば決して博士の獨創の見であるとも思はれない。僕の見る所を以てすれば、所謂近世社會主義者

の見る所も、略々それと同様のものであつて、唯その論に多少相出入し、その精粗を異にして居ると云ふに過ぎない。是れ僕が博士の論文の出てたるを機として、従來の社會主義者が、何う云ふ風に右の關係を見て居つたかを述べて見やうと思ふ所以である。從て僕の此の文は博士の論を大成しやうといふのでもなければ、又勿論それを駁すのでもない、博士の論文とは全く沒交渉の獨立の文である。但た之を機會として、所縁として此の文を草するまでのことである。

二

今此處に僕は近世社會主義といふ語を用ゐたが、此の語は、實に廣い意味を持つて居つて、其語の中には色々の問題が含まれて居る。此言葉は英吉利のオーヴエンの主宰して居た會合に於て始めて用ゐられた言葉である。其後色々の人によりて使はれて居るが、其のこれを使ふ人々に依りて、用ゐらるゝ意味が皆多少變化して居るのである。故に社會主義とは何ぞやと云ふ事を定義するのは頗る困難であつて、今日諸々の經濟學者や、倫理學者や、政治學者等之れに對して色々の定義を下して居る。そうしてそれ等は皆一定の見地から社會主義を解釋したもので、よしその全豹でなくとも、少くともその一班を含んで居るものであるから、すべてそれを捨てる譯には行かぬ、が又その一を採ることも出來ぬ。こんな譯であるから、今此處で一刀兩斷的に社會主義とは何ぞやと云ふ定義を與ふる大胆は僕の敢てしやうとする所でもなく、また敢てする必要もないのである。

唯此處では、或る社會主義者の論究したる問題を捉へて、それを社會主義なる名の下に叙述すれば、此の論文の目的はそれで達し得るものと思ふ。近世社會主義者の内で、所謂科學的社會主義なるものゝ鼻祖は、カール・マルクスである。之れは社會主義の歴史を研究する學者の齋しく認めて疑はざる所である。それ故今マルクスの思想を社會主義の重なる代表の一と見て、その中に就いて、前に述べた所の現代文明に關して、彼は奈何に論じて居るかを叙述するのは、最も適當な

道て、明瞭なる方法てあろうと思ふ。

三

如此マルクスの思想を以て、近世社會主義なる名の下に含まれ居る思想の重なる代表的のものゝ一つとして敍述を進めやうと思ふ。偖てマルクスの思想は、その範圍極めて廣く、また極めて深遠なものてあつて、從て彼の研究したあらゆる問題をあらゆる深さに於て敍述論評する事は今の場合に於いて到底出來得べきとてないし、またその必要もないのてある。從つて以下述ぶる所は文明批判に對する問題の大綱に過ぎない。

マルクスの思想を大觀すれば、二大根本觀念に歸着せしむるとが出來る。その一は唯物史觀て、その二は過剩價値てある。マルクスの思想が此の二大根本思想に歸するといふ、この見解はマルクス研究者の齊しく一致する所てあつて、殊に彼と水魚の交りをなした彼のフリードリヒ・エンゲルスの如きは、此の二大根本觀念を以て、マルクスの先人未發の思想を闡明したる最も重要なる點となし、これがマルクスを偉大ならしむる所以てあると云ふて居る位てある。此の内ても最も文明批判に的切なる思想は、前者即ち唯物史觀てある。今此處に極めて簡略にマルクスの所謂唯物史觀なる思想は奈何なるものてあるかを論述して見やう。

四

歐羅巴に於ける近世文明の幕は、宗敎の革新、古文藝の復古、新學術の勃興に依りて落されたものであるとは、多くの文明史家の唱ふる所てある。併し乍ら此等以外に經濟の發達と云ふとも決して見逃すべからざる事と思はれる。磁石の發見以來、航海の術頓に進歩して、世界がその地上の範圍を更らに擴大し、通商貿易によりて漸次に富を增加する。遂に市民なるものが社會の重なる要素となつて、在來の封建制度を破壞し去つた。此の重なる源因は市民の經濟的發達にあるは爭ふべからざる事實であろうと思ふ。殊に十九世紀になつて蒸汽鑵の發明が出來、その勢力は更らに進んで來たのてある。即ち生產に於ける蒸汽機關の應用は、大いに生產を容易にして、短い時間て、少ない勞力て、

大いなる生産をなし得るやうになつたのである。從つて在來の手工に依賴せる小資本家はどしどし倒れて、一方には大資本家は益々盛んになる。これが十九世紀を通じての大體の狀態であると云ふても決して過言でないと信ずる。而して如此經濟的發達は、一面に於て世界の富を增進し、吾人の生活を容易ならしむるやうにはなつたけれども、また他面に於ては貧富の懸隔を甚しうせしめて、その結果社會をして所謂階級(クラッセンカムプ)の爭の修羅場たらしめたる暗黑の方面を持つて居るのである。ライプチッヒ大學の講師、ピーヤマンと云ふ學者は、此の頃『マルクス主義の世界觀』と云ふ書を著はして、其の始めに次のやうなことを言ふて居る。

曰く、十九世紀の經濟的自由主義は、光明と暗黑の兩方面を持つて居る。その光明の方面とは、十九世紀の經濟的自由主義は、個人個人の企業をして全々自由ならしめ、その自由の企業は過古の經濟的組織を破ぶりて、新らしき經濟的組織を打ち建てたのである。過古の經濟組織に於ては、各個人は所謂官權政治の下に壓制せられて、決して個人の自由を享樂することが出來なかつたが、近世の經濟組織は、各個人をしてかゝる境遇から脫出せしめたのである。また經濟的自由主義に於ては自由競爭を以て吾人々類を幸福ならしむる唯一の原理であると考へたのである。此の自由競爭のために、生產が激烈に增加して、吾人の生活を幸福ならしめたのである。これは光明の方面であるが、偖てその暗黑の方面はと云ふと、これを文明史上から云へば、この經濟的自由主義が盛んになつた爲めに、十九世紀の始まりに於て、カントや、フイヒテ、或はシエリング等に依つて非常に盛であつた唯心的世界觀が衰微して、唯物的、自然的世界觀が跋扈するやうになつたとである。また之を經濟的政治的方面より言へば、この經濟的自由主義なるものは、資本家と勞働者との間に到底渉るべからざる鴻溝を穿つて仕舞つたものであると述べて、此所でピーヤマンは伯林大學のシユモラー教授の論文の一節を引用して居る。

シユモラー教授の言ふには、此の十九世紀の機械時

代は、人類に新らしい、非常に美はしく、非常に良好な住家を與へたのである。恐くは猶ほ來たるべき未來に於ては、吾々人類の住家は層一層良好に、美はしきものとなるであらう。併し乍ら悲しい哉吾々人類は、この折角與へられたる良好なる美麗なる家屋を利用すべき新らしき生活秩序（レイベンスオルドウヌング）を未だ發見し得ない。吾々は今やその新らしき美はしき住家のために相爭ふて居るのである。云々。

ビーヤマンは猶ほ言葉を續けて、併し乍ら此の經濟的自由主義の持ち來たせる、經濟的政治的方面の暗黒點なるものは、この儘に止まるものでない。即ち資本家と勞働者との關係はこの儘にして止まるものでない。それは早晩破壞せらるべき運命の下にあるものであると說いて、更らにトウーガン・バラノフスキイの語を引用して居る。それは今日の資本々位制度と、吾人の道德的思想とは、互に相矛盾して居るものである。即ち今日の資本本位制度は、飽く迄勞働者を奴隷となし、機械化せざれは止まざる勢を示して居るが、吾人の道德意識は儼乎として、カントが『人間を唯だ手段として取扱ふなかれ、それ自身目的として取扱へよ』と言つた如く、人格の尊嚴は到底不可侵のものであると云ふ事を要求して居る。故に此の資本々位制度と、吾人の道德の意識とは互に相容れざるものであると云ふのである。ビーヤマンの述べて居る所は右の如くであるが、此れと同じ事は、フランツ・スタウヂンガーの如きも、その著『道德の經濟的基礎』の內で、詳說して居る。今その要を摘んで云へば、今日の資本々位制度の下に生じ來たる所の莫大なる生產は、果して何人によりて多く消費せられて居るか、換言すれば今日の莫大なる生產の重なる購買者は何人であるか、それは疑ひもなく大多數の勞働者である。然るにその大多數の勞働者は、資本家の壓制を蒙りて、益々その購買力を減殺されつゝあるのである。故に縱令や資本家が莫大なる生產をなし得るにしても、その販路を見出たすとが出來なくなる。その結果資本家は、資本家自からその生產の道を杜絕するか、若しくは勞働者の賃銀を

引き上ぐるか、二者その一を採らなければならぬダイレンマに掛つて居るのである。此の點から考へて見ると、今日の資本制度の生產と云ふものは、それ自らにして破壞せらるべき運命の許に横たはつて居るものである、と云ふて居る。

併しこのトウーガン・バラノフスキイの考にせよ、またフランツ・スタウヂンガーの考にせよ、その根本思想は、マルクスが已に喝破して居るのである。否、マルクスの唯物史觀なるものは、實に右の思想を極めて普遍に、極めて精密に論述して、以て今日の資本々位制度の自然に自ら破壞すべき運命を有つて居ることを切論した處の者に外ならないのである。

五

人類の歴史には果して一定不變の法則ありや否やと云ふことに關しては、古來よりして哲學者間に、非常に議論のある問題で、今に於て猶ほ歸着する所を知らざる如き有樣である。故にその論爭の叙述や、及びその批評に這入つて之れを論述するの遑は今は有たないのであるが、併しながら、吾々人類を大宇宙よりして見れば、吾々人類も他の諸々の自然物と同じく、この大宇宙を構成して居る一要素に外ならざるは爭ふべからざる事實である。然るに人間以外の諸々の自然物の間には、常に一定の規律があつて、毫もその以外に出づることなきに係らず、獨り人類のみ何等の規律を持たないものであると云ふは、世界を統一的に領解する上に於いて甚た考へ惡くきことである。縱令や人類の歴史を支配する法則は、これを他の自然を支配するそれ等に比ぶれば、極めて複雜にして、且つ微妙なるものであるにもせよ、兎に角何等かの規律か其處に存在すると見るのが、大宇宙の統一的領解として頗る穩健なる思想であろうと思ふ。これ古來歐羅巴の思想界に、歴史哲學なるものゝ起つた所以であろうと思はれる。即ち人間の歴史をたゞ或る事件、或る時代の無意義なる繼續とはしないで、それ等諸々の事件時代を通じて、其處に一定の法則かあると云ふやうに見做すのである。これからして人類の歴史を統一的に說明しやうとする

歴史哲學か生ずるのである。この歴史哲學も他の普通の哲學の如く、學者により色々その説を異にして居て、なか〳〵相一致して居ると云ふやうなものではない。今最近に表はれた、この歴史哲學の諸系統の簡單なる叙述及び論評をなせる書を擧けて見ると、第一にはコロンビヤ大學教授セリグマン氏の著『歴史の經濟的解釋』及びライプチッヒ大學講師パウル・バルト氏の著、『社會學としての歴史哲學』などが目星しいものであらう。此の兩書を比較して見ると、前者は專らマルクスの歴史見解を叙述批評しやうと云ふのを重なる目的として、諸々の歴史見解は、單にその緒論として述へられてあるから、その論述は粗雑の譏を免がれない。之に反して後者は重に諸々の歴史的見解を精密に叙述批判せんとしたものであるから、其の言ふ所可なりに精細である。併し前者は極めて簡單てはあるとは云へ、その大要は盡してあると思はれるから、暫時前者によりて諸々の史的見解を叙述して見やうと思ふ。かくするはマルクスの歴史哲學史上に於ける地位を示すに便利であるからである。

六

セリグマンの見解によれば、此れ迄に見えたる歴史的見解には、凡そ五つある。

第一は宗教的見解で、その代表者はベンジャミン・キッドである。キッドは專ら宗教上の見地より人類の歴史を解釋しやうと企てたもので、彼の考に依れば、猶太教は吾人に義務の觀念を與へ、儒教は秩序の觀念を與へ、回々教は正義の觀念を與へ、佛教は忍辱の觀念を與へ、最後に基督教は愛の觀念を與へたるものである。此等の五大宗教は、吾々人類の精神的文明の發達の上に深妙なる旨趣を有して居るものであると主張してゐる。この見解に對してセリグマンは、このキッドの考は因果の關係を顚倒して見て居るものであると批評して居る。何となれば、此等の五大宗教は、人類歴史の結果として現はれたもので、その源因ではないからである。

第二は政治的見解で、その代表者はアリストテレー

スてある。即ち人類の歴史なるものは凡て治者被治者の關係より產れ來たものである。即ち獨裁政治より貴族政治に移り、貴族政治より共和政治に到る間には、其處に常に政治上の變革があり、それに伴れて諸般の人類の事件が起つて來たのである。之れを他の一方より說明すれば、個人は始め何等の自由を持つて居なかつた、それが後に漸々政治的自由を獲得するに到り、其處に一切の人類の歴史が生ずるのである。この見解に對してもセリグマンは、之れも矢張り因果を顚倒して居るもので政治的現象は人類歴史の源因でなくして、其の結果である。政治的現象を以て人類歴史の源因とするは、馬車馬の前に車を繫ぐやうなもので、全然冠履顚倒の議論であると批評して居る。

第三は物理的見解で、その代表者は英吉利のバックルである。バックルは人類の文明の起源及び發達を凡て外圍の事情、即ち土地の有樣、氣候の狀態、山河の形勢等から說明しやうとしたのである。それ故バックルの考は物理的見解と云ふ事は出來る。併しバックルは徹頭徹尾右の論を主張して居る譯ではない。現に彼れの著『英國文明史』の或る部分に於ては、文明の發展と云ふことは、人類の精神的要素が、段々と外圍の事情に打ち勝ちて、人類を外圍の事情より自由なるを得せしむるを云ふのであると述べて居る。それ故に元より一切外圍の事情のみを以て說明しやうとするものとは言はれぬけれど、彼の著述全體の調子から云へば、バックルは外圍の事情によりて人類の歴史を說明しやうと試みた一人であると言ふて差支ないのである。

之に對してセリグマンは、バックルのこの考は頗る面白きものではあるが、バックルの言ふ處は、唯富の生產の方面にのみ傾いて、分配の方面には彼は一向注意して居ない。此の分配と云ふことは、人類の歴史に於て大いなる働をして居る現象である。故にバックルの考は面白き考ではあるが、未だ徹底した說とは言ひ難いと批評して居る。

第四は唯心的見解で、その代表者は言ふ迄もなくヘーゲルである。ヘーゲルは彼の所謂辯證的哲學の根本

思想よりして、人類の歴史を以て所謂客觀的精神の辯證的發展をなすものと見たのである。かくして彼は彼の有名なる『歴史哲學』なる著述に於て、歐羅巴の古代より近代に到る迄の、一々の事件に就いて、その論述を逞うしたのである。之に對してセリグマンは、ヘーゲルの考は餘りに偏した考である。彼は少しも人間の物質的方面を見て居らない。彼の考は只た形式ばかりに偏して内容に乏しい、吾人は單にヘーゲルの見解を以て充分の解釋に接したものとは言はれないと批評して居る。

以上に論述したものはセリグマンの大體の見方である。猶ほバルトには此等の外、ゴビノーの人種的見解や、或はレイマンの英雄的見解を擧げて居るが、それ等は今此處で深く論究する必要はないから省くとゝする。唯これ迄にセリグマンの述べたる内、第三、第四、即ちバックルの考と、ヘーゲルの考とはカールマルクスの唯物史觀に關係あるもので、殊にヘーゲルの辨證哲學はマルクス思想の母であるといふても宜いといふことを注意して置きたい。吾人はこのヘーゲルの思想か、マルクスのそれの上に奈何に多くの影響を與へて居るかを、今少しく知らなければならぬと思ふのである。

七

以上セリグマンの述べたる四つの歴史の見方の外に、尙ほ第五者の見方がある。これ即ちカール・マルクスの唯物史觀である。而して已に述べたる如く、この唯物史觀は、マルクスの二大發見の一であるとエンゲルス等は言ふて居る。けれどもこの考は決してマルクスの獨創の見てはない、彼のマックス・アドラーやバルト等が已に說いて居るやうに、之は已に佛蘭西のサン・シモンや、フーリエー等の中に見えた考である。唯マルクスはその思想をヘーゲルの辯證法によりて、系統的に秩序的に論述して、よく個々の事件に涉りてその事を證明したに過ぎないのである。一體或る一の思想と云ふものは、その思想の前に何等の連絡も關係もなく、忽然として現はるゝなど決してあるべからざるとてあ

る譬ばカントの思想も、若しカントの前にライプニツ・ヲルフの哲學がなくまたヒユームの哲學がなかつたならば、カントの哲學は出現せなかつたかも知れぬ。此の意味に於てカントの思想は巳にライプニツやヒユームの思想中に含まれて居たものであると云ふ事が出來る。しかしながらそは言ひ過ぎてあつて、カントのカントたる所以は、それ等の哲學を綜合して更らに其の上に一定の見地を打ち建てた所に存在して居るのてある。それと同じくマルクスの唯物史觀が、サン・シモンやフーリエー等に見得られたものとしても、その一點を以て全々マルクスの獨創の見を郤くるのは少しく酷な見解と思ふ。唯エンゲルスか云ふ程に果して自負し得べきものなりや否やは疑はしいと云ふ迄てある。此等の事は猶今后の論述によりて明になるであろうと信ずる。

八

マルクスの所謂唯物的史觀は、彼の『エーレンド・デア・フイロソフイ』、一八四八年の『宜言書』それから『經濟學批判』等に多く見えて居つて、其の他彼の大著『資本論』及びライン新聞、或は『進歩』と題する雜誌等に掲載せる隨時の論文等にも明かに散見して居る。其の大體を云へば、原始民族の最も要求するものは衣食住てある。而してその衣食住を造り出すと云ふとより、人類社會に經濟的現象か起つて來たのてある。從てその生産の有樣によりて、社會の組織か始終變遷をして來て居る。彼の所謂精神的文明即ち音樂、文學、美術、學術、道德、宗教と云ふやうなものは、詰り此等の衣食住の要求か充たされてから起るものであつて、社會の活動の根抵を形造るものは、經濟生活てある。所謂精神的文明はその上に冠せられたる冠に外ならないのてある。彼の古代の文明は奴隷組織の生産事情より生じたものてあるし、中世の封建的文明は、封建の君主と、その小作人との關係より生じたものてあるし、近代の社會と云ふものは資本家と勞働者との關係より生じたものである。從て前に言つた如く吾々人類が曾て經過して來た所の道德思想の

如きも、たゞその當時の經濟組織の如何によりてのみ說明せらるべきもので、その以外には說明せらるべきものではない。故に古代の道德にして、吾人の眼には頗る不道德に見ゆる事柄も、その當時の經濟事情よりして考ふればまた恕すべき點があると云ふやうに、凡て一切の歷史的變遷を、社會の經濟組織の上より說明せんとしたものである。卽ち經濟組織は其處の社會に一定の階級を生じ、その各階級が互に相爭ふ事により て、人類の歷史をなせるものである。而して今日の資本々位制度は、その歷史の本質上、正さに破壞滅亡すべきものである。吾々の社會運動と云ふものは、當さに來たるべき當然の運命を、たゞ人力に依りて幾分か早く、且つ容易に來たさしめんとするものに外ならないのである。之れが大體の見解である。猶ほ次に委細の點に渉りて、マルクスの思想を敍述して見たいと思ふ。

宮相の結婚問題

文學博士　建部遯吾

田中宮相の結婚問題については世間にいろ〳〵の批評があるやうである。吾輩は此問題の成行や若くは內容については詳しい事を知らぬ。が事決して輕々に看過すべき事にあらず、人事上、社會上、頗る重大なる意義を有するものと信ずるが故に、世間の傳ふる事實を根據として、些か批評の標準に關する吾輩の意見を述べて見やうと思ふ。これには問題の要點を明確に區分して見ることが必要である。

先づ第一の問題は年齡の差といふ事である。これは生理上からと風俗上からと二つに分けて見なければならぬ。生理の一般原則の上からいへば無論批難さるべきものであらう。然し世の中には隨分原則外れの體質がある。いくら年を老つても身體も丈夫、心持も若くて、壯年者と劣らぬ人が少くない。だから之れは寧ろ

醫者のいふべき事でない。本人同志の身體健康如何といふ特別の場合（スペシアル・ケース）に屬することとて、只年齢が違ふからというて一概に批評し去る譯にも行かぬ。世間の人が傳ふるが如くんば田中宮相はなかなか身體も丈夫で若い者をアッといはせるやうな事も可なりにあるらしい。されば此點は寧ろ醫者の鑑定すべき特別の場合である。金杉君の如き醫學博士が取持つといへば、此點で生理上差支のないことは明瞭でないか。現に谷干城子の如きも六十歳にして子が出來た。(談少しく岐路に亘るが之について面白い話がある、其子の生れた時は谷子夫人熊子は五十三歳であつた、そこで谷子戯れて曰く、後世三上等の如き古文書詮索の歴史家が宮中の文書を案じて、明治の貴婦人は五十三歳にして子を産めりと論ずるだらう。歴史家は才、學、識を以て物の裏面をも洞觀するの明がなければならぬ、單に文書のみによつて事を論ずるは非常な誤りである…と)板垣退助伯も六十一歳で子を産んで六一と名づけ、又詩仙桂湖邨の弟に六十郎というて其親が六十にして産んだ人がある。近頃新聞の傳ふる所によれば七十何歳の老婆が子を産んだといふ事さへある。して見れば年齢の上のみより宮相の結婚問題を批難するのは少しく早計に失する。然し社會の風俗の上よりいへば無論結構とはいへぬと思ふ。併し一人の男子が姉妹を妻にすることは日本の風俗で可笑しい事とされてゐるが、兄の妻が、兄が死んだ爲めに弟の妻に直るといふが如き事は隨分ある。英國あたりでは非常に可笑しい事とされてゐるが、世界全體の上から見ては、左程厭ふべき（ヂスガスチング）、忌むべき（アボミナブル）事といへぬ。

第二の問題は素姓の相違といふ事である。これは日本の過去と現在とにどれ丈け社會狀態が異つたかといふ事が判斷の眼目である。今日の國政を料理し、若くは宮中に奉仕する人にして、昔、志を得ざりし時、品行などについて其人自身も、朋友も餘り注意を拂はざりし時分、隨分いかゞはしき人を妻にした。今日の何爵夫人、大臣夫人などいふ人にさういふ人が可なりあるやうだ。かゝる場合に於て、其夫人が、今日に至る

までに其良人の境遇、身分の上進に伴うて性格品質を向上發展せしめ得た場合には、何も之を許すべからざる理由はない。所で今日の若い女子は皆學校教育を受けて居る。今の教育には随分所謂トコロテン主義が行はれる、故に華族の令嬢も商人の娘も若し學習院女學部に入つて同一の教育を受け得る以上、其卒業生は大抵似たり寄たりてある、然らば此點からすれば今日に於ては普通人民の娘なりといつて決して華族に緣付かれぬ事はない。殊に教育の一大効果は人をして容易に其境遇に順應し得べからしむるにある。例へば兵卒から士官になるには廿年近くかゝるが、士官候補生の教育ある者は兵卒から僅か二年にして少尉になれる。萬事が夫れてある。だから今日の女子は若し素性が惡くとも、教育ある故に、昔の婦人が廿年もかゝつて漸く華族らしくなつたのを、僅か一二年にして立派になり濟ますかも知れない。若しさういふ見込が立つとすれば此點も强いて反對する必要がないかも知れん。然し猶殘る問題は今と昔とを問はず、素姓のわるいものは、社會上高等の位置にあるもの、殊に宮中に立つ人の妻たる資格なきものといふ意見を是認するとすれば、いふまでもなく此緣談は不合格である。併し之と同時に現在の夫婦にも多くの不合格者を出すことゝなる。然らば此原則は理想としては異議が少なからうが、今日の日本には果して實行出來る事かどうか。これには宗教家、風俗改良家、道德家、並びに新聞雜誌記者政治家等の順序に從て其意見に寛嚴の差あることゝ察する。

第三の問題は本人の道德的價値の問題である。これも二つの見地から論ぜらるる。一つは宮内大臣伯爵にとつてかゝる事がよいか惡いかといふ點てあつて、之れはいふまでもなく、品行のわるいものや、道德的價値の低いものは其位地に不釣合とするより外はない。其一つは一個人としての田中光顯から見るのてあつて、これを判するに、其婿君の道德的價値をも照らし見なくてはならぬ。之にも亦個人的と社會的との二つの見方がある。個人的に見れば所謂「破鍋に閉蓋」てあ

つて、若し婿君の道德的價値が低しとすれば所詮立派なものは得られぬ。低き者をも似合はしきものとして友人は之を賀せざるを得ぬ譯である。然し社會的立脚地からいへば、さういふ不都合なる夫婦は社會を蠹毒すること故、血縁のわるいものには、よいものをめあはせ、不都合なものには、立派なものを縁付かせた方がよい。然し私は元より新聞記者でないから、小林孝子の人物の如何、殊に田中光顯君の人物の如何を詳かにせぬが、一般論をすれば右の通りである。これらは固より批評の標準であつて、批評夫自身ではない事を斷つて置く。

第四の問題は、宮内大臣及び伯爵といふが如き、社會上、並びに社交上名譽の源泉に最も近き位置にある人、殊に我國の國體としては同時に道德上の最高中樞、德育上の儀表的中樞たる皇室に極めて接近し奉るべき位置にある人として、斯くの如き婚姻問題が起る事についての可否得失。これは右の三項とは全く別問題にして、何とも畏れ多い事の極みといはなければならぬ。吾輩は世の批評家がこれを右の如き輕く小さい三項中の一と比較し混同し又は同時に論し去ることを遺憾とする。お半長右衛門の問題と宮相の結婚問題とを一筆に論ずるのは甚だ失態である。兩者の間には天淵月鼈の差がある。此問題が動機になつて皇室に接近する部分、宮内大臣に類するサークル、伯爵に似たるサークルの風紀改良問題が起るべきものと思ふ。藤堂伯爵の事件の時にも、華族懲戒委員の顔觸等についても恬然として怪まなかつた。堂々たる華族の事であるから、其邊にぬかりはなかつたらうが、新聞記者的見地よりすれば、かういふ顔觸で果して懲戒が出來るであらうかと疑はるゝ餘地はあつたらうと思ふ。「二六」の如きは辛辣なる筆法を以て藤堂事件に筆誅的氣焔を擧ぐるに大膽であつた樣だか、我大臣類似、伯爵類似の位置にある人々の仲間に、かくの如き噴火山の破裂する同一の地質、地心の火氣熱氣なきや否やについては、慧敏なる「二六」記者も何等の注意を拂はれなかつた樣である。吾輩は此點に對して、新聞紙の高等批評

家の一人として怪訝の念を抱くものである。嘗て本誌に載せた「上東郷大將書」といふ一場の話に於ても其一端に觸れたことがあるが、何故か世人はかゝることについて甚だ冷淡である。然し「今日の大臣伯爵といふが如き社會は到底かゝる點には相手にならぬ」と高を括つて了へば其れまでゝあるが、高を括つて安心が出來るか、放任して國家社會の長計が立つと世の有識者が濟まし得るか。多言を要せぬ事と思ふ。吾輩が過日學識ある少壯貴族の數名と會談せる場合に、どの道海江田家の如きは爵位を奉還するの外ないから、家督爭ひに勝ても負ても同じ事と彼等は一致したのである。苟も華族が幾多の語弊を犯して自ら皇室の藩屏と稱して、一面皇室に對する特別の恩榮を長へにせんと期するならば、是非共涙を揮うて馬稷を切るの擧に出てなくてはならぬであらう。若し孔子の所謂父は子の爲めに痩し、子は父の爲めに痩すといふ格言を、華族社會の内幕を隱蔽することに向つて適用し、苟も一時を糊塗するが如きことあらば、華族其ものゝ存立のために斷して取るべからざるの策である。我輩は少壯にして學識あり、氣力ある華胄諸君子が拔本塞源の策に向て突進せられんことを切に希望し、世の彈正臺を以て任ずる剛毅果敢なる新聞記者諸君子が徒らに區々たる一二の火の手の擧つた事件にのみ更らに火の手を添ふる如き事をせずして我皇室の社交的――殊に我國體に固有なる道德的尊嚴を永遠に擁護宣揚して「醇厚俗を成し」「華を去り實に就き」といふが如き良風美俗を扶植發達せしめんことを希望する次第である。

若し夫れ不幸にして田中伯の結婚事件が總て如上の不利益なる條件を具足せるものと、萬か一つ假定をして、其場合に宮相の地位を去り、伯爵を捨てゝ一個の匹夫となつて以て其婚姻を遂行せんとする場合がありとするも、如上の分折的批評の標準によれば、批評のどの箇條が脱却し得ても、どの箇條が脱却し得ざるかは極めて明瞭の事と思ふ。此問題についての大體の所見をお話すれば右の如くである。（完）

憲法を愛するの熱情

竹越與三郎

過る十一日は帝國議會を首めとして、諸學校に至るまて、憲法發布二十年を紀念するが爲めに賀會が催ふせられた、抑々二月十一日は我建國の祖先神武天皇が新民族の首長として大和の橿原に即位せられたといふ日て、國民の紀念すべき祝日てあると同時に、二十年前に發布せられたる憲法の故を以て更に新しき意味に於て祝はるべき日となつた、余は此日朝は津田梅子女史の英學塾に至りて憲法に付ての卑見を述べ、午後は早稻田大學に至り、大隈伯と共に此日を祝ふて一場の演説を試みて、聊か此憲法發布の日を祝するに於て涯分を盡し得たといふ事て、心中平和を得た譯である。

抑ゝ明治の齢も既に四十二を重ね、其間内亂外寇なきに非すと雖も憲法發布以來二十年間は概して云へば我國民に於ては所謂堯天舜日とも謂ふべき時節てあつた、上には叡明なる陛下の座しまして、萬民の心を心とし給ふあり、下には歐洲の文物輸入せられて國民の智徳より生活に至るまて、日々夜々に進みつゝある、其間無論歐洲諸國に比しては人民の權利、生命の安全、財産の鞏固などの點に至つてはまだ及ぶべからざる所なきにしも非すてあるが、併し是は理想に比しての不満足てあつて、之を我過去の歷史に較べて見れば、二千五百年間未た曾て此の如く幸福の日は無いのてある、のみならず外に對しては明治二十七年には支那に勝ち、三十七年には露國に捷ち、今や一等國として世界の檜舞臺に出て世界列國の外交的コンサートの中に於て確に最も聲高き謠ひ手の一人となつた、是は何てあるかと云はば、概して皆憲法政治の賜物と云はねばならぬ。

抑々何れの國の歷史に於ても二個の勢力が相衝突するは免れぬことてある、其一は英雄の士起つて主權者となり、國を以て家と爲さんとする運動てあつて、所謂國家なる文字は此の如き意味から起きたもので、一國を家と爲し、一國の人民を己の家族と爲し、生殺與奪

の權を其家長が握るといふことてある、是れ即ち家族として國民を待つものであつて、善政を施すの意義に於ては間然すべきことてはないが、併し人民が自ら其權利を求むるといふ事に付ては甚だ不充分たるを免れぬ、然るに一方には之に對して家を以て國と爲すといふ運動が起る、即ち天子は萬民の首長であつて、貴族の首長ではない、天下は天下の天下にして一人の天下に非ずといふやうな事で所謂王室を擴けて國と成すといふ運動である、一方の運動は國を以て王室と爲すといふ運動である、一は王室を擴めて國と爲し一は國を挾めて王室と爲すといふ、此二個の運動は何れに於ても免れぬことてある、さて近世の國體は世界列國を通じて所謂家を以て國と爲すといふ運動、王室を擴めて國と爲すといふ運動が勝つ、是が即ち列國を通じて近世國家として具備せねばならぬ要件となつて來た、是は唯り國内に於ける人民の要求のみに依るものではなく列國相對峙する以上は必ず具へねばならぬ條件となつて來た、恰も交通が發達した時に船を持たねばならぬ常備兵を持たねばならぬといふが如き形勢と同じく、列國對峙する爲めには近世國家の原則たる所謂家を以て國と爲す、即ち多數人民の權利を認めて、多數人民共に此國を治めるといふ條件を具備せねばならぬことゝなつた、西洋列國皆近世此國家の性質を取るが爲めには君臣相屠り、上下相傷け、殆ど一國を焦土と爲した者さへある、短きは五六年、長きは二三十年、國家は殆ど滅びて唯國家に於ける各黨派が存在したといふが如きものがあつたことが無きにしも非ず佛蘭西の「バレール」などが、憲法は專制者の手に依つて培養せらるゝものであるといふが如きことを言つたを始めとして、多くは皆是れ各國共血を以て憲法を書いてある今日平和の時に當つては列國の憲法は白紙にインキを以て印刷したるものであるが、竊に其歷史に遡つて之を讀めば其一字一句一章悉く皆是れ血ならざることなく、殆ど腥風血雨一卷を濕すといふ有樣である、然るに我皇上の叡聖なるや、列國の君臣相爭つて取り、相爭つて授けた此憲法を談笑の間平和の聲の内萬民歡呼

の間に授け給ふて之が爲めには人心統一し之が爲めには五千萬人の心は一人の心となり、之が爲めには五千萬人は所謂奴隷境界を脱して皇室を政治上の父母、政治上の太陽と仰いで皇室と共に此國を治めるといふことになつて人心統一、士氣茲に揚り、士氣茲に揚れば勝利茲に在るといふやうな譯で、先づ支那に勝ち、露國にも捷つたといふことである、我々は幸にして此幸福の日に生れて、此幸を得るといふことは實に男子として祝賀せねばならぬ時であらうと思ふ。

併ながら高き代價を拂つて受取つた品物は多く尊敬するが代價の安きものは往々にして之を輕んずることを免れぬのが人情である、歐洲列國皆共に革命若くは暗殺を以て其憲法を得た結果として、憲法を尊重すること至大至重苟も一點一角憲法に觸るる者があれば殆ど嫉妬的に之を擁護せんとするの精神が歐米國民の間に充滿して居る、英吉利人の諺に「英人は憲法に依つて得たる自由を愛すること其妻を愛するが如く、佛蘭人の之を愛するは其情婦を愛するか如し。」といふことがあるが、實に斯の如して、英人、佛人は苟も憲法の一點一角憲法の精神に違反し若くはせんとするが如き者に出遭へば、殆ど己の妻、己の情婦に指を差す者に出遭つたるが如く、滿腹の嫉妬を以て之を爭はんとする有樣である、何となれば彼等は此憲法を得るには血を以て得たもので、高き代價を以て得れば之を尊重するは人情の自然であるが故である、然るに我邦は談笑の間に憲法を得たといふことは賀すべきことではあるが、同時に國民が憲法を輕んずる精神がないといふことは言い難いことである、殊に近來支那に勝ち、露國に捷ち內政に於ては藩閥の餘孽あるのみにして最早壓制者といふものを見出すことが出來ぬといふことて、國民稍や自暴自待の狀態に在るが故に、憲法政治の難有味を忘れ易い、此機會に乘じて藩閥者流は新聞記者を使嗾し、政黨員を使嗾し、現在に於ける國會政治の弱點を誇張して之を人民の耳目に觸れ易くせしむることを力むるが爲めに、人民未だ憲法の難有味を知らずして早く旣に國會政治の短所に厭きんとする傾を生じて來

たといふことは、是は實に慄然として恐るべきことである、昔宋の檀道濟は敵國の放つた流言に依つて捕はれて首を斬られんとする時に、汝等自ら汝の長城を毀つこと勿れ。と云つて、天を仰いで死んだことがあるが、今日區々の弊害に懲りて國會政治に失望し、憲法政治に厭き果つる者があつたならば、是れ人民自ら汝の長城を毀つものである、昔堯の時耕して食ふ帝德我に於いて何かあらんやと言つたが、是れ即ち王政の極意であつて、人民をして王政の何物たるを知らしめざる所が即ち王政の難有き所であるが、今日國會政治の難有味を人民が感ぜざるに於ては、即ち國會政治の難有き所以であるといふことを忘れてはならぬ、我々は日々澤庵と米の飯て生活をするが、平時に於ては米の飯と澤庵の難有味を知らぬ、萬一山に入り若くは海に浮んで窮困した時に至つて、始めて米の飯と澤庵の難有さを知るのであるが、今日憲法國會の御蔭に依つて壓制者、藩閥者流も其慾を逞しうすることが出來ぬ、是に依て人民國會憲法の難有味を感じない、若し一旦藩閥者流が出て憲法に依らざる政治を行つた時に至つて始めて人民憲法政治、國會政治の難有味を感ずるであらうと思ふが此の如きことは自分は之れ無きことを冀ふ。

然りと雖も我國民は極めて武功に醉ひ易き國民である。東郷大將が對馬に於て露西亞の艦隊を破つて歸つて來た時は、恰も羅馬の人民が「シーザル」を迎へるが如く狂喜し甚しきは東郷大將をして內閣を組織せしめやうといふ者さへ出て來た位であつた、東郷君は無論軍人としては稀世の人物であらう、併ながら彼をして政治を執らしめたならば一兵卒にも如かぬ者である、然るに其武功に醉ふて之に託するに五千萬人の生命財產を以てせんとするに至つては、殆ど狂氣の沙汰と云はねばならぬ、我國民は武功に醉ひ易きこと此の如き者である、豈啻に武功のみならんや、我國民は陸海軍に對しては殆ど酒に醉ふが如き狀態を以て其武功を嘆美すべく用意して居る國民である、萬一我國民にして憲法に對する熱情深からず、國會政治に對する信念固か

らずんば、他日何等かの機會に恐るべき「ヂクテーター」が出てゝ憲法に依らざる政治を行ふ時がないといふことを誰か保證し得るてあらうか、今を距ること四十年前「ナポレオン」三世かまだ英吉利に居候として居つた頃、彼の言ふ所は共和國の城壁に於て名譽の討死をするといふことてあつた、佛蘭西人民は此聲に迷つて彼を大統領に選擧した、大統領に選擧せられた彼は何をしたか、彼は巴里の人民に泉の如き「シャンパン」を飮ましめ、鶩鳥の肉を山の如く積み、日々夜々之を飮食の間に樂ましめ、或夜の如きは內閣大臣總出で大夜會を催ふして、「ナポレオン」の甥て內務大臣をして居つた男の如きは洗濯屋の御婆さんと組んて夜會に躍るといふ有樣てあつた、而して其大夜會の濟んだ其晩夜の十二時を限りとして巴里市中は「クーデーター」を施されたのてある、其「クーデーター」は如何にして行はれたか、警視廳は巴里市中の新聞記者を捕へて之を警視廳に引致し、左の手には黃金、小切手を封じたる袋を見せ、右の手には劍を示し、「ナポレオン」が帝位に即くことに贊成すれば黃金の袋あり、之に反對すれば牢獄に押込めるといふことて、新聞記者の口は悉く緘せられた、政黨員は政府に服從する者は宜し、否らざる者は悉く牢獄に投ぜられた、反對の聲一つもなし此の如くして「ナポレオン」は帝位に即いた、今や我邦は「ナポレオン」三世なしと雖も、併し「ナポレオン」三世の奸手段を學ぶ者はある、警視廳に劍を執る者はないが、併し其舊惡を發いて牢獄に入れんと威かして新聞記者を使ふ術を解して居る者はある、さうして黃金の力は巴里に於けるよりも多くの力を以て我政治家、學者、論客を迷はしつゝある、若し他日一旦「ナポレオン」三世の奸手段を學ぶ者が出來て來たならば、而して其時に於て我國民の憲法に對する信念固からすんば、恐くは豎子をして功を成さしむるとなしと誰か證保することが出來やうか、故に自分は今日何れの黨派の人と雖も憲法に對して國民に擁護の心を助長せんとする者があるならば、共に力を協はしたいと思つて居る。

支那の政治の理想は賢者其位に居り、能者其力を盡

すに在る、此理想たるや歐羅巴と雖も亦然り、「ラスキン」曰く、國家の健康は最も賢き者をして最も貴からしむるに在り、これは古今東西を一貫した政治の理想であると思ふが、さて此理想を行ふには如何なる手段に依るかと云はゞ、最も善きは一人の人あつて万能力を以て國民中を見廻して、最も貴き者を選び出して其位に當らしむるに在る、其次の手段は最も多數の尊敬し信用する人をして其貴き位に在らしむるのである第一義は古今最も有得難し、已むを得ずして第二位に從つて政治をするが即ち憲法政治である、學者の空想としては第一義を取る、然れども今日實行し得る政治としては第二義より優つた者を發見せぬのである、是れ即ち世界列國を通じて一二百年間、憲法政治の運動が世界を風靡する所以である、此運動たるや曾て歐洲を風靡して而して日本をして之に學ばしめた、日本が憲法政治に依つて成功したことは、今や東洋別國を風靡しつゝある、支那の憲法政治を學ばんとする、波斯に於て憲法政治を容れんとする、露西亞に於て憲法政治の行はれつゝある、土耳其が憲法政治となりしが如き是れ皆日本の成功が是等の東洋人種を刺戟したものであつて、恰も佛國革命が歐洲を震動せめたる本となつた如きものである、故に憲法政治なるものは一片の空論に非ずして世界的の事實である、今や此世界の事實に付て日本は大なる部分を働きつゝあるのである、然るに日本國民自ら其憲法に對する忠實の念を缺くならば是れ恰も他人を救ふて極樂に入らしめて、而して自ら地獄に落つるが如きものである、況や過去に於ける堯天舜日は企圖せられずと雖も、將に來らんとするものを望めば國民は一層憲法に對しては忠實ならざるべからざる理由を有するをや、併ながら憲法は一片の空文であつて、之を活かしむるは國民の炎々たる烈志である所謂憲法の根は國民の「ハート」に在るといふのは是である、先づ第一に憲法は日本の文學に這入らなければならぬ、然るに我文學に於ては未た曾て憲法に關するものなしと云つて宜い位である、憲法は學校に入らざるべからず、然るに未だ曾て今日までは普通教育に於て憲法に關する熱情を鼓吹した者を見出さぬと云つて宜いのである、憲法は家々戸々に入らざるべからず英吉利の憲法は國會若くは王室に非ずして「ハムプデン」

等が國家人民の爲めに憲法を取らんとして血を流したといふ話が家々戸々に傳つた所に憲法がある、然るに我邦に於ては家々戸々に於ては鼠小僧の噺あり、自雷也の譚はあるが、憲法に付て苦心した人々の傳記は這入つたとは云ひないのである、而して最後に憲法は政黨及び政治思想に依つて活躍するものである、「シエキスピヤー」の「ハムレツト」の傳記に、「若し我傍に大砲があるならば一層有益であらう」と云つて居るが、即ち此の如く憲法素と一片の空文、之を活かすは政黨の力である、政治思想の力である、今日政黨の力に依らず憲法のことを云々するは、恰も舌を以て賊を打たんとするものである、政黨に依つて憲法を爭ふことは始めて手を以て賊を打つものである、故に憲法を愛護する者は即ち政黨の勢力を助長するに非ずんば其志を遂することは容易ならざることである、英吉利に「トリーゾン」といふ言葉がある、「トリーゾン」は即ち大叛逆である、此大叛逆は國を賣ることが大叛逆であるが、同時に憲法に依らざる政治を行はしめんとする者は即ち大叛逆である、我國民は露探若くは獨探といふものを忌み嫌つて、國を賣るといふことは大叛逆だと思つて居ることを解するのは言ふまでもない、併ながら若し憲法に依らざる政治を行はんと欲する者があるならば、是れ亦一つの叛逆であるといふことを學ぶ程に致らずんば到底憲法に對する充分の堅固なる信念といふことは出來ぬのである、英吉利の諺に「英人の其自由を愛するや妻を愛するが如し、佛人や其自由を愛するは情婦を愛するが如し」と云つたが、我邦に於ては國民の憲法に依つて與へられたる自由を愛するは其父母を愛するが如しといふ熱情を生じて貰いたいのである而して此事は政黨の力を俟たざるべからず、是れ余が政黨に力を盡し、而して世人が政黨に力を盡さんことを望む所以である、が、併し余は必ずしも政友黨と云はず、必ずしも進歩黨と云はぬ、昔歐洲の中央に「シバルリー」即ち俠武士なる一團體が出來て、教會の爲めに宗教を守り、婦人を守り、之が爲めに團體を作り之が爲めに天下を横行したといふことは世人の既に知る所である、此俠武士一變して所謂歐洲の「ゼントルマン」即ち紳士なる一階級を成したのであるが、我邦に於て願くは憲法に對する新しき「シバルリー」が起されて各黨各派を通じて憲法の爲めに危難を冒して之を擁護せんとする其無形の團體の出來ることを余は切望して已む能はぬ者である。



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある清米露等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

支那人教育に對する所見

（附、北京廷の現狀）

文學博士　服部宇之吉

近來歐米各國が大分支那人教育に注意し、支那の方に向つて大學を建設するものがある、中に就いて亞米利加の如きは前年早く已に湖南長沙にエール大學の分校とも云ふべきものを設けてある、獨逸でも膠州灣に大學を建つる事となり、之には國と國との交渉で清國政府からも資金を出す事となり、その條件としては會計監督に一人の支那人を入れる事になつて居る、亞米利加では別に又山東に大學を建てることになつて居り、英吉利も場所は未だ分らぬが矢張り大學を建てることに爲つて居り、露西亞でも北滿州の吉林に大學を建つることになつて居る、一般の狀勢は先づ斯うなつて居るが、北京に居る日本人には、清國人教育の爲に北京邊に大學を建てるが善からうと思つて居るものもある、が是まで清國で日本人の經營して居る學校もあるが同文書院を除くの外は皆一私人の力なので、從つて規模も小に設備も不完全で成績は上らぬ、各國の態度が已に前述の如しとすれば、單に一私人の手に任して置けず、それを國家又は公の力でするが宜いといふ事にもなろう、此樣なる計畫は未だ具體的に案を立てて居る人も無いが、兎に角左樣な考を持つて多少畫策せんとして居るものもある、が問題は只金である、大金を得て立派なものを建て得るならば建てたいものである。

今暫く北京だけに付て云へば、亞米利加のプレスビリアンミッションで建てた大學と稱するものがある、規模頗る大で、支那政府からも幾らかの補助がある樣だけれどそれは公ではない。佛蘭西でも北京には四つの會堂が建てゝある、その中北堂の側に佛蘭西語の學

校がある、建物も大きく生徒も澤山の様てある、外見上教會のもの丶様てあるが、事實は佛國政府の補助て成り立つて居るのて、直接には教會と關係のないものだ、以上の外まだ一つ大きなものは、倫敦ミッションて建てて居る學校てある、協和醫學堂と呼ばれるものだが、病院もあれば化學研究室もある、圖書館もある、建築も相應だし設備も可なりに行屆いて居る。まだ學ければ其他にも有るけれど左迄言ふに足らぬ。

若し今日本て一私人の力てなく公の力によつて大學を起さうとすれば、是非それ等と頡頑するものでなければならぬ、すると先づ建築に二三十萬圓の資金を要する、其他設備から經常費から仲々掛る。之が出來ぬとすれば私人の經營になるものと大した違がなくなる、從つて支那人の來り學ぶものも少いことになる、支那人を集めるには勢ひ物質的の設備が立派てなければならぬ事情がある。此樣な設備さへ出來るなら必ずしも場所は北京に限らぬ、北京以外の地方でも宜しい。各國ては支那に於てドン〳〵學校を建てるのに我日本ては無爲にして傍觀することが宜いか如何かと云ふ事を先づ問題にして研究せねばならぬ。若し日本ては支那內地て大學などを建てることが出來ぬと云ふなら日本の內地ても可なりてある、出來るだけ我が學校の設備を擴張して、支那の生徒を引受け、完全な教授をするがよい。以前には支那からは速成的の生徒を寄越したものだが今ては支那自ら之を希望して居らぬ。支那の文部の當局者は、年限は長くなつても宜いから完全なる教授を受ける樣にしたいといつて居る、現に先頃私の歸國する時にも、是からは此方で普通學を終つたものだけを遣るから、何分完全な教育を與へられる樣特に賴むといふ依賴もあつたのてある。

我が官立學校では支那の生徒を多く引受けて之に十分なる滿足を得させる事は設備上困難てある、とは言ふものの特に支那人の爲に學校を設けることは、彼方て非常に厭がるのだ。高等學校などて、支那人の爲に特に級を拵えて教えて居るが、之を厭うて是非日本の學生と一所に教えて貰ひたがつて居る、支那人だからとて別にされる樣なら態々海を越えて日本迄遣る必要がない、支那內地に學校を建てゝ教師を日本から雇い入れれば濟む、それを態々遣るのは、實は日本の學生と同樣の教授訓練を受けたいからである。又單なる教授訓練以外に更に利する所あらんと欲して居るのだといつて居る。

處が支那の學生と日本の學生とはその學力の根底が違ふといふ點があるが、之に對して彼方では、豫備教育の年限を實際に必要である丈延ばしても構はぬから、その積りで是非日本學生と一つに教授をして欲しいと請求して居る、從來留學生の日本其他外國から歸つたものに對して學位試驗を實行して居る、之は登庸試驗の性質を兼ねたものだ。が之をば支那人の爲に特に設けた學校や若くは特に作つた級を經て來たものには行はぬ、彼等に對して受驗の資格を與へぬことにしてある、即ち彼等の學力を承認せぬといふ事になつて居るのである。何故かといへば前にも述べた通り、其樣な處を出て來たのでは、迚も一般の日本學生と同樣な學力を有することは出來ぬ、一段卑いものであらねばならぬ、其れならば不用であるといふのである。

支那では之から先、留學生を相應に寄越したい、なるなら澤山に寄越したいといつて居る、然るに前述の事情があるとすると、日本でそれを引受けることは困難を感ぜなければならぬ、支那内地で遣るとすれば宜いけれど、之を我國内に於てしやうとすると忽ち右の困難に逢着する、その求に應じて設備を完全にするには如何しても經費に關係する事だから困難には相違ない、とはいふもの丶外國では如何であるか態と大金を掛けて支那に大學を迄設けるのだから、少し位内地で支那人教育の爲に盡力しても宜さ相なものだ。政府のみとはいはぬ、更に國民も之に對して盡力せなければならぬ。

外國人が支那の教育等に關して自己の勢力を張るに熱心なことは非常なものだ。取り分け獨逸の如きは支那で學校を建てるとなると無俸給で教員を貸さうなどと迄申込む、けれど北京などでは斯樣な申込はいつも斷つて居る、と云ふのは只で貸す譯はない、その裏には何か計られぬ意味が潛んで居ろうと思ふからである、が地方へ行けば必ずしも斷るものでは無い、南京の或る官立學校には無俸給で勸めて居る獨逸人がある、無俸給にして而かも其責任、條件等は他の教員と異ならぬのであるから尋常の話でない、上海にも支那の學校を建てることに就いて、獨逸領事から二人の無俸給の教員を貸與して居る、のみならず更に經費の中へ一萬マルクの金を寄附して居る。

又獨逸は教育に用ふる器械標本の類を賣る爲に、廻遊展覽會なるものを設け、品物を持ち歩いて支那各地を廻り、同時に注文を受ける樣にして居る。若し彼等

の持ち歩く器械にして教育上甚だ有益なるものであつて、そして此の如く見せ、說明し、且つ注文を先々て受取るといふことになつては、日本で之まで彼地に教育器械などを賣つて居るものには大した打擊を與へる事になる、幸にその持ち歩いた標本、器械等が左迄有益なものでなく、用意に不十分なところが有つたものだから餘り注意を惹かず、又注文も無かつた樣だ、つまり不結果に終つたのであつたが、それにしても日本人とは違ひ、坐して客を待つことをせずに、持ち步いて注文を取るといふ態度は等閑視することのならぬものである。

之も私人の計畫ではなく、政府の補助があるのだ、即ち北京駐箚の公使から外務省に交涉して展覽會の場所を貸して貰ひ、又淸國文部省から各學校に命令して教員學生等に見に行かしめた、領事の居るところでは直接に、居らぬところは書面で領事から官憲に意を致し、教員並に學生に勸めて見に行く樣にして貰つた、又支那の西方の偏僻の地なる甘肅に獨逸人が物理化學の器械藥品等を持つて行つた事がある、不便なところに持ち行き、おまけに比較的安く賣つたのだから大に歡迎せられる、併し斯くて官憲と親しくなり、何か工事でもある時には引受けさせて貰ふのだから損はせぬ。獨逸では此の如くに色々な方面に手を着けて居るのである。その他の國々でも矢張り色々な處へ手を着けて居る樣だ。

日本でも教育の方に就いて言へば、多く教員を出しては居る、がそれ以外何もして居らぬ樣だ、留學生が來るといふ事が一面に存在して居るのであるけれども、之迚も經費上の關係があり十分には引受け難いのである、何か之に就いては講究の要があろうと思ふ。

倘ほ日本で支那人を教育するに就いて注意を請ひ度いことがある。支那人は日本へ來て、學問を研究するけれども、日本の文化の本源文明の眞髓を了解して歸るものは少い樣だ、又支那人を教育する方でも、特にその方に注意し盡力することは少い、官立學校でも亦私立學校でも、差當りのことを教うるに急であつて、そちらは疎かにして居る樣だ、支那人の方から進んですれば宜いけれど、皆がそれに興味を持つといふ事はない、それ故日本の方から進んで之を了解させる態度に出なければいけぬ、西洋の文物が日本に於て進んだといふには、日本には日本の根源があり、旨く同化して行けたからである、然るに之を洞見し理解するも

が支那人には少い、支那人も大抵自分等と日本人とは人種も同じければ文字も同じい、だから日本人の成し得る處は支那人も成し得る所であるといふ樣に考えて居るが、そこには必ずしも左樣に行かぬ點もあるべきてある。日本が西洋の學問を取つて進歩したといふのは日本に固有の要素があつたからであると知つたならば、支那で之を移植するに當つては、支那性に同化する樣多少變改するところがなくてはならぬ、日本の特性を知るといふ事は御互に取つて必要な事と思ふから、此方の研究を十分支那人にして貰ひたいがそれには日本の歴史や文學の研究も必要である、之を學校で敎えるとなれば、差當り必要ならぬものを敎えて、その爲に現下必要なる學科の方の時間を殺ぐといふ事になる恐がある、けれども、必ずしも正科とせずとも尙ほ他に適當な方法が有ることゝ思ふ。遊歴などに來て日本のことを調べて行く人には、多少左樣言ふ事の分る人もあるけれども、孰れかといへば先づ少い方である。

次には一體に對して希望したい事がある。日本に留學した支那人は、歸つて后皆重要な仕事をして居る、今日では官吏として地位の高いものは未だ少い、日本の勅任官相等位に進んで居るものが三四人位で、それに近いものは隨分ある、が地位は左迄でないにしても、實際に於て色々の仕事をする人は日本へ留學したものに多い、現在に於て支那の政治その他の社會に於て、彼等は有力なるものとなつて居る。

歐米の留學生は數も少いが、又早くから歐米へ行つて居たものが多いので、歐米の語は能く出來るが支那の學問が出來ず、漢文も思ふ樣に書けぬといふ弊がある、そこで支那で官吏として事を爲すには日本の留學生よりは劣るので、各方面に於て後者よりは勢力がないのである。

けれども米國などへは今後留學生を大分出すことになつて居るのだから、今后は狀態が變るでもあろうが、現在の儘を言へば此樣である、此狀態を維持して行くのが御互に便利であろうと思ふ。それに就いては、政府並に一般國民からして支那の留學生に對し、成るべく好意を以て親切に取扱ひ、十分日本の事を分らして還すが宜いと思ふ。が支那の留學生は彼等から進んで日本人と交ることも少く、日本人の方でも余り彼等と交はることが無い、稀に有れば何か利用の下心あるといふ樣な次第だ、それでは無しに、公平に兩國の關係

を考へ、東亞全局の事情をも察し、日清兩國の情誼を厚くする爲に、彼等を親切に扱ひ彼等に利益を與へ、愉快な感情を抱いて歸らす樣にするが宜い、此樣な事は必ずしも金錢に關した事でもなく人々の用意一つである、これは私の支那に居つて痛切に感じた所である。

次に北京の現在に就いて話して見やう、一時滿洲問題等で衝突したから兩國間の感情の融和を害したけれども近來は大に變つて來た。大層宜くなつて來た。之には多少日本政府の方針の改まつた事も關係があるが、清國兩宮崩御の際に於て日本の皇室の取らせられた御態度、並に政府國民の共に取つた態度等が大なる因を爲したのである、支那に居る日本人の態度も亦與つて力あることは言ふ迄もない。兎に角支那人の我々に對する感情が、以前と違つて甚だ善良なことは全くの事實であるから、之を維持し續けることは肝要である。

北京政府の狀態は如何かといふに、極めて有望なものである、といふのは兩宮崩御の后は何か事が起るであろうとは、内外共に豫期して語つて居た所であつたが、實際は左樣でなく、凡ての施設が皆豫定されて居り、それに由つて着々と進んだので、兩宮の崩御の后急に相談したのではない、それ故政府には少しも周章の態もなく一致の欠くる事もなかつたのである。當初二三日一般人民は多少動搖しかけたけれども軈ては無事に歸してしまつた、それにも所以がある、政治の中心たる攝政王には、北京の大小の官吏が皆望を屬して心服して居る、年は若いけれど極めて公平で極めて質素である、それに謙遜の德がある、質素と云ふことは王をして廉潔ならしめ、隨つて公平を損することも少くなり、凡ての遣り方が正大に行ける、官吏の取扱も公平である、私情又は賄賂によつて事を左右する事はない、大小官員の心服を得るも尤もである。

唯上述だけでは此國事多端の時に局に當り難き憂もあろうが、それのみでなく、攝政王は更に斷にも富まるゝとは事實によつて證明される。斷といつても妄斷には陷らぬ、隨分周密な考の後の樣である、此鹽梅で行けば旨く行け相なものだ。

此攝政王の德は、今日では未だ直接に一般國民には知れまいけれど、一般の官吏を通して次第に分るから、官民共に心服することになる、官民の聲望を攝政王の一身に維ぐといふ事が出來樣と思ふ。爲すべきことは是から色々ある、多くの仕事が扣えて居るが、兎に角

上に立つ人が此有樣であるから、物の運びも順當に行くべく、支那の將來は有望であると信ぜられる。

政界の動搖といふが如きことも、政治の中心の變動に連れて多少はあるべきことであるけれども。此點にも頗る注意が屆いて居り、余り動搖を來さぬ樣にしてある、袁世凱が止めた爲に新しい政治が後れるか知らんとは、内外人共に恐れて居た所であつたが、之も先帝の定められた通りに行ふといふ事を、上諭としても出したし、豫定の方針によつて豫定の期日に新政を施くといふ事をば、呉々も各方面に向けて訓示しても居る、豫定は今より八年の后に凡て新政を大成するといふ事であるが、旨く行かうと想像して居る。自分は日本政府も國民も之に對して道德上又其他の方面より十分の援助を與ふるのが、東亞大局の爲めに又善鄰の好誼の爲に必要なことゝ信じ一般に向つて切に之を希望するものである。

海外消息

一月三十一日巴里より　無念庵

●●●謹啓　近頃巴里に於ける日本的趣味の浸漸は益々著しくなり來りて、衣服は愚か足の穿物にまで影響せんずる有樣に候、例へばサンダルと稱する中世紀頃大に流行したりし日本の草鞋樣の者が再び貴婦人の交際社會に復活せんとするものの如く、底を銀張りとなし其れに絹の紐をつけて足に結び付け、日本のキモノを着、頗る珍妙なる姿をなして交際場裏に現はるゝを非常に意氣がり居る者を出すに至りたるなど其一例を申すべきか、是等は日本の昔の錦繪などを見たる結果なりとか申す事に候。

●●●●●●●●●●●ヴィネズェラ共和國の革命騷動　前便に於て單に事件の結果をのみ報道し置きたるヴ國の革命騷ぎは別に列國に何等の影響を與ふるが如き者にもあらねば單に副大統領ゴメッ氏が内閣を乘取りたるだけにて、事變は終りたる樣に候

▲同共和國は南亞米利加に於てブラヂル、コロンビヤ等と境を接する、凡そ三萬六千餘方哩ばかりの一小國にて、コロンバスに發見せられてより西班牙人に征服せられ長く其主權の下にありしが、後コロンビヤと共に共和國となり、更に之と分別してヴネズイラの共和國と名乘り出てたる國に候。目下八千の常備軍を有し貿易も中々盛にして珈琲殊にコヽア

は世界生粋の巴里ッ子にまで持囃さるゝ名産に候

▲今後の事變は曩にヴ政府が和蘭殖民地の汽船を脫税の名の下に差押へ其船員を禁錮したる返報として、和蘭の巡洋艦ゲルデルランドがボルト、カベル沖に於てヴ政府の警備船アリックスを差押ひ、更に運送船マヨー號を差押ひたるに始まりたる者に候。しかし和蘭が此擧に出でたる眞意は決してヴィネズイラ共和國に仇せんが爲にはあらず、全くは現大統領カストロ氏が英邁の氣に任せて、往々和蘭政府を侮蔑する行動あるより、和蘭政府は先づ其兵船を押へて問罪的談判をカストロ氏に持ち掛けたるにて、當の敵は國にあらずしてカストロ氏にあるなりと云ふ。カストロ氏は病氣と稱して獨逸に入りしが、其虛に乘じて群民蜂起しカストロ派の有力者を刺殺さんとする陰謀企てられたりしが、野心滿々たる副大統領ゴメツ氏は之を機とし、官兵を率ゐてカラカスに退き、玆に新政府を樹立し、國内に大赦令を發し、巧に其國民をして萬歲を齊唱せしめたる次第にて候

▲カストロ氏は現代の奈翁と稱せらるゝだけありて、生平南米の一小共和國の大統領たるに慊焉たるものあり、然かも現代の國際關係は容易に其驥足を伸べしむる能はず、徒に雙腕を撫して天の一方を睨視するのみなるより、屢々關政府などゝ衝突を引起す譯なりと某政治家は申し居られ候

●**波斯帝と英露聯合運動**　波斯帝は國内の黨徒愈々甚しきものあるにも拘はらず、依然として其國民との約束たる憲政實施を履行せず、又恐らく之を履行せんとする樣子もなきより、玆に英露兩國は協力一致波斯帝及び其國會を援助せん聯合運動を開始せんとするに至り候、即ち露國外相は過般駐露英大使ニコルソン氏に向つて兩國が對波斯政策の一致したるを機とし、速に波斯帝に迫りて憲政を實施すべき事を了解せしむる手段を取らんと提言せられたり、而して目下波斯は國庫窮乏之到底外債を俟つにあらざれば整理の見込みなきより英露兩國は其財政の困難を救はん代はりに立憲政治を布告せしむべしと云ふにある由に候。今後の英露兩國聯合運動が首尾能く無難に行はるゝに至らば、此の方面の難問題は全く玆に一掃せらるゝ事となり、全く喜ばしき事なるも、兩國の聯合運動は到底……ヨシ開始せられたりとするも……最後まで無難に持續せられ得べきにあらずとの事に候

●**排日問題の眞相**　米國加州に於ける排日派は一時鎭靜せられたる傾きなりしが、此程再び其氣勢を高め來り、共和黨院内總理ジョンソン氏及外數名より日本人の公立學校通校禁止案銀行會社の重役たる事を禁示する案土地所有權禁示案及び日本人を市町村内一定の區域内に居住せしむる案等を州會上下院に提出し、委員會より次て下院を通過したるやうに候が、大統領は例に依りて其喰止め運動に着手し、日本政府が移民制限協定後最も誠實に米國との條約を勵行し居るは、加州々會の一派が妄に少數劣等階級の投票を得んとして之に背くが如き行動を取られては、米國全體に及すべき不利益少なからずと稱し、下院に最も嚴重なる勸告

を下したるが爲に日本人排斥案は不成立に終らんとするものゝ如くなるが紐育新聞は該問題の根底に立入りて忌憚なく其眞相を說かれ候

▲即ち曰く本問題は日米兩國間に於ける最も困難なる問題にして、兩國政府が如何なる協約を結ぶも、加州に日本人の影を絶たざる限りは、此後長く消滅す可らざる難物也、現大統領ローズヴェルト氏の精神にして發る間は、加州が如何に騷ぐとも鐵鎚一下忽ちに粉碎せらるべく、又米國全體より云へば、之を以て最も誠實なる仕方と云はざるべからずも、如何なる打擊に遭ひたりとて排日的感情を一掃する事は蓋し至難なりと云ふべし。加州の排日感情は讀て字の如く感情にして理屈にあらず、米國官憲及び一般上流の識者が日本人に對するや、日本の國力を認め其地位に顧み、其紳士的溫和なる外交を多とし、國際上之を平等に遇せざるべからずと信ずるなるも、下級勞働者が個人として日本人を見るや大に其立場を異にす、其異なれる風俗習慣生活狀態を見、其低廉なる賃金を以て働くを見て、彼等は之と競爭する事を屑とせず、然かも日本人は頭腦能く發達し怜悧にして事物の判斷力を缺かず、總ての方面に於て白人と異ならざる地位を得んとしつゝあるが故に、一種の反感を起し、一途に之を嫉忌するに至る。一言にして之を云へば政府が國家として之を平等にせんとするも、國民が個人として之を厭ふに起因するものなり。加州以外の米國人間にも多少此種の感情は免かれず、唯加州に於けるが如く甚しからざるのみ、之を以て加州人は全米國の利害の爲めに我加州人が獨り之を忍ぶは堪え得べからずと稱す。それには又之に乘じ、排日問題を旗印として投票を爭はんとする野心家のあるありて、絶えず彼等を煽動しつゝあるが爲めに、該問題は米國政府が日本政府と如何なる協約を結ぶとも到底効を奏すべきにあらざるや論を俟たず。吾人は日本人を以て最も優秀なる、白人と毫も異ならざる民族なりと信じ、之に向つては歐州人と同樣の尊敬を拂ふ者なるを斷言す、又然かするを以て至當なりと信ずる者なるも、既に彼我人種の相違上言語風俗の相違上、自然の結果として斯かる反感を買ひ居るとせば、速に他に進路を發見して、謂はれなき加州人の侮辱を免かるゝに如かず、之を以て、日本人の體面を全うする唯一の方法なりと信ずる者なり云々」と

▲右は最も能く排日感情を說明せる者なりと思はれ候。加州人が日本人を嫌ふ事は一種迷信的なり、今回の排日議案出づるや、ボストンに於ける二三の新聞が、加州人の輕擧妄動を嘲笑したりしに桑港の一新聞は其社說に於て「左程日本人が御好みならば旅費を付けて差上ぐべければ早々引取られたし」と述べたり。加州は加那陀及び其他の地方の如く緊切に、將來の發展に日本人の勞働を必要とせず、排日感情は一朝一夕にして止むべきにあられば、行々は宜しく他の方面に膨脹するが得策なりと申す事に候。

▲されど米國全體の輿論は全然大統領に味方し、桑港「クロニクル」の如

き、假令議案は加州下院を通過するとも、之れ日米條約に違反せる者なれば無効なりと論ぜられ、加州に於ける有識者は、先年日本に到りたる實業家の面々ドールマン氏を始めとし、盛大なる排日案破壞運動を開始せりとの報知もあれば、此際日本本國の諸新聞は餘り騷々しく騒ぎ立てぬが宜かるべしと存じ候

●バルカン半島の風雲　半島の小國が戰鬪力を有せざると、獨帝が議會に於て明かに墺國に味方せんと斷言したると及び露國が比較的に溫和なる態度を取り居るとに依り、一時危殆なりし半島の風雲は既に危機を去りたるものの如く見受けられ候此間にセルヴイヤが時々小憤慨的行動を取る事あれど、是等は誠に一喝して止まるべきものにして全局に影響を及ぼすべきものにあらず、唯恐るゝ處は英國の態度に候

▲墺紙の英國攻擊　墺國納也府に於て最も有力なる新聞紙は盛に英國を攻擊しつゝあり、就中「ノイエ、フライエ、プレッセ」の如きは英國が常に塞爾比及土耳古を誘動し、バルカン半島の事態を益々紛糾せしむるは怪しからずと稱し、英國の外交は、獨逸の味方する邦國は其何國たるを問はず、危險の地位に陷らしむるを以て其目的とする事ふべからずと放言致し候

▲英外相の演說　然れども英國は固より妄に戰爭を好む者にあらざれば、墺國の新提議が墺土談判の如望なる鋒を見、以前の態度を改むるに至りたるやう見受けられ候。英外相グレー氏はコールド、ストリームに於て、近東問題は平和に解決せらるべしと宣言し、猶墺英兩國の關係が一層好良ならんことを希望すと演說せられ候しが、該演說は維也府に於て熱誠なる歡迎を受け、輿論は以前と打つて變はり。半官紙フレムデム、ブラット紙は、該演說を以て、相互攻擊を事とする不愉快なる時期を一變すべき機會を與ふるものとなし、兩國間の歷史的友誼を復歸する爲めには適當の盡力を辭せずと言明せられ候

▲セルヴイヤ外相の辯難　是より先き塞爾比外相は一月三日の塞國議會に於て「墺國がバルカン半島に於て、今日まで優先權を默許せられ居たるは、露國の南下を拒がんとする政略に出でたるものなれば、露國が南下小邦併存の野心を捨てたる今日に至りては、墺國は須く其勢力をバルカン半島より撤退して可なるに、反てボスニア、ヘルツエゴヴエナの二州を併呑したり、今やバルカン諸國の敵は露國にあらずして墺國なり、墺國がバルカン半島に地盤を有する間は、吾人は一日も安眠する事を得ず、二州は墺國の羈絆を脫して獨立若しくは半獨立するを近東平和維持の良策なりとす、而してセルヴイヤ、モンテネグロ及び以上の二州と政治經濟上の同盟を形成するは刻下の急務にして、列國も又容易に之を承諾すべし云々」と演說せしが、此演說墺國に傳へらるゝや、墺國政府は大に怒り、直にベルグレード（セルヴイヤ首府）駐劄墺國公使フォルガッチ伯をして、塞國外相ミロヴノウイッチ氏に對し、以上の演說筆記として新聞紙の傳ふる處に誤謬なきや否やを質問せしめ、若し誤謬なしとせば、即時國際關係を斷ち塞國を撤退すべしと談せしめたりしに、塞國外相は之に狼狽し、自己の演說

は誤り傳へられたりと稱し、辨明的辭羅文を書して墺國公使に送り、即時に之を發表して漸く事なきを得たるは、誠に笑止千萬の事共に候

●墺土談判の成立　墺國の新提議とは、即ち墺國より二州合併の報償として、二州內にある土耳古國有地に對し二百五十万磅(古耳古貨)を支拂へ、且つ土耳古の關稅增加、專賣制採用を承諾すべき案件なるが、土耳古政府は大に之を歡迎し、大體に於て之を承諾する事に一致し、且つ墺國が二州占領中の歲入に比例して、土耳古國債の一部を負擔せんことを要求したりしが、墺國は之を拒絕したる由に候土府駐剳の英佛獨露の四國大使は、成る可く早く墺土及び土勃談判を終了して、內政の改革に着手する方然るべしと勸告し、土國政府も又之を納れて、遂に一月十二日愈々同意の旨を墺國大使に通牒致したる由に候

▲此後墺土協約草案に於て双方に多少の衝突はあらんも、大體に於ては左したる相違もあるまじく、先づ本問題は以上の新提案に依りて解決せられたる事と見做すも敢て早計にあらざるべく候

▲墺國が以上の新提案を出したる內情に關しては、種々に言ひ觸らす者あれど、其最も信頼すべき說は、英國の牽制的態度が之を然らしめたりと云ふに有りと存じ候。墺國は唯英國を恐る、英國が土耳古に聲援し居るを以て、若し長く本問題を未決の間に置くときは、或は英國が他の小邦を煽動して土勃塞等の小邦同盟を見るべき機會を與へずとも限らず、斯くては由々しき一大事となるべければ、此際適當の提案をなして、速急本問題を解決するに若かずとし、さては二百五十萬磅の報償案を提出する事に決したるなりと云ふ。土耳古も又一方に勃牙利あり、何等かの方法を以て之を處決せざるべからざるに、英國の聲援以前の如くならざるを感じ居る今日、又財政頗る困難なるに鑑み、之を納るゝを以て至當なりと思ひ、多少國民の反對を豫期して之を承諾する事となりたる由に候

▲英國は之に對して非常なる滿足を表し墺國は墺英國交の改善に力を注ぐべしと宣言し、バルカンの風雲は全く危機を去りたりと申すべく候

●土勃談判の開始　勃牙利は墺太利が土耳古と妥協せるを見、此際自國の獨立問題をも解決せんとし、曩に其占領せる自國領內東方鐵道の一部と東ルーメニヤとに對する報償として八千二百萬法を支拂ふべしと提議せしに、土耳古政府は、之に應ぜず、更に大なる價格の要求を提出し、最後通牒的の意を附して勃牙利に迫りたり、之れ勃牙利獨立宣言後具體的土勃談判の第一着にして、本問題は之より愈々紛糾し來るべき模樣あり、現に勃政府提出の八千二百萬すら勃國財政紊亂せる今日、到底支拂ふ事を得ざるべしとて、首府ソフヰア市に於ては大に物議を起しつゝある位なれば、土耳古の要求の容れられざるべきや論を俟たず、それかあらぬか、兩國は早くも示威運動として戰鬪準備を開始したやうに候

▲勃牙利は土耳古が東ルーメニア要害の地に出兵したりとて、直に動員令を下したるが、土耳古政府は其理由を勃政府に詰問し、斯の如き不穩の舉に出づるときは反て兩國の妥協を困難ならしむべしと通告せられた

り

▲然るに露國は自國々境に接する地點に於て、勃牙利が盛に兵力を集中するを見て、土勃兩國の關係を益々危殆ならしむるものとなし、英佛獨墺の列國に通牒し、列國の盡力を得て、穩かに兩國間の係爭問題を解决せんとせば、一切軍事的行動を避すべしと勸告する事に同意を求めたる由タイムス紙上に見え候。タイムスは之に對し最も滿足なる意を表し、列國は速に之に應じて適當の勸告をなすべしと論ぜられ候

●露國浦港海防案の成立　日露戰爭後露國は東洋に海軍の根據地を失ひたるより、昨年屢々東洋方面に當らしむべき海軍の本據地を作らん計畫を立てたりしも、常に立消となりて果す事を得ず、本年も又浦鹽港海防案なる者海軍省より提出せられたる由に候、最近浦港通信に依るに該案は日露戰爭以前まで旅順口に置かれたりし極東海軍々司令部を浦港に移轉せしむる者にして、之に要する豫算は六百萬留餘に計上せられ、通過の上は明年より着手する筈なりとの事に候

●キューバ島の新政布告　キューバ島民が獨立して共和自治制を取らんとし、久しき以前より叛亂に叛亂を重ねたりし事は、世人の能く知る處に候が、巴里「マタン」に達したる電報に依れば、同島民議會は遂にコメッツ將軍を大統領に、ザーカス博士を副大統領に撰擧し、玆に新内閣を組織し、一日二十八日を以て共和制を布告したる由に候、而して之と同時に米國キューバ知事は總ての政務を新政府に引渡し、玆に全く米國民政の終止を言明せる布達文を新大統領に送付し、目出度く新政引繼を終りたるが、當日キューバの天地は歡聲湧くばかりなりし由、左もあるべき事に候。

親友田岡嶺雲病む、僕一書を東京エコー紙上に於て與ふ、其復書即ち左に掲ぐるもの也、エコー今僕と交涉なし、現代最も多くの讀者を有し且つ最も信ずるに足る雜誌の一なる中央公論に之れを掲ぐるを得るは僕の甚だ快とする所也

嶺雲の友　正岡藝陽

藝陽に復す

（於豆南客舍）

病　嶺　雲

（一）

藝陽君足下

僕が愚拙を棄てず、懇者書を賜ふて垂教慇懃、僕が惰怠を警策せらるゝ所あり、再誦三誦仰て足下が友誼の篤きに感激し、又省みて自らの薄志に耻ぢ、覺えず衾を蹴て起たんことを想へり、顧みれば僕臥病來方に

一年兩脚久しく躄して纔に衽席の間に蹣歩するを得るのみなりと雖ども、頼に双手未だ其用を失はず、以て筆を握るに足る、固と當さに幾ばくもなきの餘生を惜んで、自彊奮勵其分とする所に竭すべきに、却て病故に托して安逸を貪り、空々寂々旦暮を蒲團裡に輾轉するのみなる、假令足下の言を竢ざるも、僕自ら亦其甚だ志氣の頽唐せるを識る、蓋し人生は活動の上に意義有り、活動なくして生くるは死と擇ぶ所なし、今僕猶幸に死せず、宜しく寸陰をも惜んで大に奮勵し以て其の幸にして生くる所以に背かざらんことを期せざる可からず、餘生幾何ぞ、朝、夕を計る可からず、縱使明日にして死せんも、此幸に生くるの一日一刻一時を活動せば始めて其幸に生くるに於て一日一刻一時の意味あり價値ある也、而るに病慵習をなし、奮はんことを欲せざるに非ずして竟に奮はず、何等の爲す所なくして既に一年を空度し了る、之れを念へば痛悔いふ可からず、玆に足下が激勵の辭に對し忸怩の感更に深し。

（二）

僕羸弱善病、今に至る迄既に二たび垂死の病に罹る故に生死を以て度外に措くの工夫に於て稍々自ら勉むる所あり、故に今次の疾を發て、醫の爲めに不治を宣告せらるゝも、甚しく失望狼狽せず、固より未だ哲人の大達觀生死の際に優游するの見地に達する能はざるも、亦甚しく死生の事を以て胸襟を攪らるゝことを免る、然りと雖ども此小安心小我見累をなして却て、死に對する大煩悶大悲痛を感ずる能はず、既に大煩悩なく大悲痛なきが故に又大覺大悟大解脱ある能はず、唯不繫の舟の泛々として浪に任ずるが如く、空々寂々の餘生を蒲團裡に貪るのみ、且僕資性偏執にして我の上に權威ある何者をも認むるを屑しとせず、我の外に憑頼すべき何者をも認むるを屑しとせず、僕はトルストイの如くアナーキストにして、而してトルストイと似ずアセイスト也、僕は如何にするとも宗教的なるものを信ずる能はず、僕は此病苦の故に天を呼び神に禱りて慰藉を得る能はず、否寧ろ慰藉を求めんことを欲せず、宗教心は予に於て絶無也、是を以て僕は我が病の

復起つ可からざるを知るも、未だ嘗て一念の宗教に及びたることなし、故に僕の庸劣なる、同じく死生の際に立つも、僕樗牛氏の如く日蓮論の雄渾ある論者なる能はず、又梁川氏の如く見神說の幽妙なる見解ある能はず、是れ大に恥づべしと雖ども、天分の差企及すべからざるを以て自ら甘んずべきのみ、固より僕が宗教を信ずる能はざるは僕の不幸たるべし、然れども僕は獨歩君の如く信ずる能はざるを悲とだも感ずることなし、僕の欲する所は唯男らしく死せんとするに在り、ストイック的に死せんとするに在り、死の前に立ちて女々しき繰言と愚痴とを繙すを陋なりと信ず、當世の人は感情を矯むるを以て非近世的なりといはん、可なり矣、僕は寧ろ吾が脉管に一縷の封建的武士の血を遺傳せるを誇とせん、僕は情を忍ぶ能はざるを以て男兒の恥辱なりと信ず、夫れ修學修心其工夫の究竟は唯從容として死し得るの域に達するにあり、死の問題は人の須らく日常工夫すべき所、當面死と撞着して遽かに悲惻哀切の聲を揚ぐるが如き、不用意不覺悟の至りならずとせんや、且夫れ病固より苦しからざるに非ずと雖も、其呻吟は一私室中の事のみ、公然之を言ふて人に愬ふべき者に非ず、僕は此くの如く信ずるが故に、罹病以來多く言はず、言へば語の動もすれば病苦の事に涉らん事を恐るれば也、必ずしも倦怠の故のみに非ざる也。

（三）

且夫れ僕の如きは文壇の落伍者也、其頭腦も舊式也其文章も舊式也、其思想其主義亦皆舊式也、今日の文壇上に角逐するに堪えざること僕自ら之を識る、僕元と稟質迂疎之に加ふるに命數の蹇奇を以てし、四方に放浪して、中央に止まること稀に、衣食の奔走に急にして讀書の修養を缺き、終に學荒み、腦涸るることを致す、病來閑に乘じて頻りに書を貪り讀み、以て少しく時勢の變に應ぜんと欲するも、急轉直下の文界は、吾人の追隨せんとするを待たずして、其傾向を遷移する也、實に今日の我が文壇は吾人の眼より見ればあまりに新名辭を趁ふて趨するに忙はしき也、思想あつて主

義の名生ずるに非ず、主義の名を先づ掲げて思想之を追ふ、曰く自然主義也、曰く象徴主義也、曰く新自然主義也、曰く高尚自然主義也、曰く何曰く何と今の文壇に藉を有して其聲名を維持せんと欲するものに、此等の主義の名の變ずる毎に、其新を趁うて此に附いて遲れざるの聰明を有せざる可からず、吾等の如き唯自己の見る所信ずる所を披攊し、抒攄して以て足れりとし、西歐に何主義が流行し何イズムが持囃さるゝやを知らんとするに懶き者、否寧ろ唯其自己によりて立ち他人の後塵を拜するを屑しとせざる偏執のものは、今日の文壇上に立つの資格なき者也、今日の文壇に立たんとする者はイブセンを説かざる可からず、モウパツサンを説かざる可からず、ダンヌチヲを説かざる可からず、何エフ何スキーの名を喋々せざる可からず、是れ吾等の如き淺學にして寡聞なるものの到底爲し能はざる所、縱使し爲し能ふも亦爲すを欲せざる所也、吾人は衒學を憎む、誇識を憎む、更に他人の糟粕を嘗め唾餘を拾ふて得々たるものの輕薄を憎む、僕縱使あらゆる今日の西歐文學者の著書を直に原作上より讀破するの學力と精力と時間とを有したりとするも、猶之を爲すを欲せず、何ぞ況んやブランデスの一卷を讀んで露國文學通となり澄すが如きをや、今の人は囚はるるを厭ふ、固より人は自ら主たるを尙ぶ、傳説舊習の奴隷となるは固より恥づべき也、然れども自己の主義によりて立ち自己の信念の上に立つて渝はらざるは、之を囚はれたるものなりとはいふ可からず、而かも今の人は朝に東に往き暮に西にゆき操守なく本領なきを以て囚へられざるものなりと誤り、却て其自己の主張によりて渝らざるものを固陋なりとなす、所謂囚へらるゝ所なりとは豈に守る所なきの謂ならんや、而かも今の人は守る所ある人を罵て囚へられたりといふ、殊に知らず。其自ら囚へらるゝことを陋しとする彼等自ら西歐の輸入思想に囚へられて流轉するものなるを、夫れ所謂囚へられざらん事を欲するものは、最も强く自己を守るものならざる可からず、而かも今の文壇の識者を見るに、徒らに西歐の流行を生呑活剝し、一方自然主

義を唱へて、傳習の打破を說き乍ら、一方に現實主義と號して、「神ながら」の御幣主義を說くの矛盾を敢へてする者あり、是れ畢竟ずるに彼等に徹底せる自己より出てたる主義なきに由る也、此くの如き者果して今日の文壇の新趨向なりとせば、吾人は寧ろ落伍者として文壇に立つ能はざるを名譽とせん、是れ僕が頃來文壇に遠ざかれる所以にして、必ずしも病の倦怠の爲めのみには非ざる也。

（四）

藝陽君足下、十又五年前僕が初めて筆を青年文に執りし時に當りてや、僕猶年少氣銳自ら信ずること厚く又自ら任ずること高く、文學を生命とし文章を事業となす、渾身の心血を此に傾注す、故に其思想其文字稺氣の存ずることを免れざりしと雖ども、而かも猶摯實にして熱を帶びたりき、爾來風塵に奔走して稍々世故の辛酸を嘗むると共に、其頭漸く冷に、其眼彌よ白く感興の泉枯れ、想像の焰滅え、文學なる者に興味を感ずること亦往日の如くならず、今の僕には文學は一種の閑事業游戲文字として觀らるゝのみ、僕の今の心を動かす者は社會の不平等也、人類の悲慘なる運命也、即ち實世界の缺陷也、吾は批評家として一篇の小說を是非せんよりは、先づ飢寒に泣く者に一椀の粥を與ふるの途を講ぜんことを欲す、哲學を論じて眞理の茫漠たるを探究せんよりは、寧ろ今日の文明の弊害を根治的に救治するの策を求むるの急なるを信ず、今日僕の眼を着くる所正に玆に在り、是れ僕が漸く文壇に遠ざかれる所以の一因にして必ずしも倦怠の故のみには非ざる也。

（五）

藝陽君足下、天地萬古ありて、此身再び得ず、人生唯百年にして、此日最も過ぎ易し、此の再び得ざるの身を以て、此の最も過ぎ易きの日に處く、此身愛むべく此日惜まざる可からず、況んや今の吾の如き餘命數ふ可きをや、豈に碌々爲す所なくして此の幾ばくもなきの餘命を空度す可けんや、餘命の長短は、今の吾に於て問ふべき所に非ざる也、能く一日を生き得ば、其

一日を善用し、一月を生き得ば其一月を勉强す、唯此有るべきのみ、夫れ人生れずんば則ち已む、苟くも既に生る、其生れたるの證契として、何等かの手印足跡を天地の間に留め置かんことを要すべし、然るに顧みて吾が四十年の生涯に見る、鉛槧廿年未だ立言の後世に垂るゝに足るものなく、文章百篇、僅に覆甕の資たるを得るのみ、而して今や一歩を轉ずれば即ち死あり死生命あり論ずるに足らずと雖ども醉生夢死霧の如く消え去らんことは吾の堪へざる所、吾今病困倦怠殆ど爲す所なしと雖ども、而かも胸中猶窃かに爲さんと期する所多し、吾にして幸に猶餘生若干あらば、吾は先づ半ば成れる女子解放論の稿を完うせんと欲す、夫れ婦人の地位の今日の如きは決して自然に非ず、之を生物學上より視、人類學上より視て、男女關係は當さに生殖關係の上に立つべく、而して生殖關係よりしていへば女性は主にして男性は賓也、故に男女間自然の關係をいへば女性は男性の上に立つべきもの也、而るに今の如く女性の關係が單なる生殖關係より離れて、夫婦なる固定せる結合となれるが爲めに、經濟上女性は男性の寄食者となりたれば也、故に女子を今日の地位より解散するには、先づ家なるものの柱礎を破り、夫婦なるものの連鎖を斷ち、男女を自由なる戀愛の關係の上に立たしめざる可からず、僕が此論たる甚だ奇激に失するが如しと雖ども、宗教改革あつて思想的解放あり、佛國革命あつて政治的解放あり、次て來るべきものは性的解放なかる可からず、而して解放は舊慣傳說の破壞を意味す、予が論の奇激に類するものあるは是が爲めのみ、然れども女性の解放は到底來らざる可からざる也、此くの如くいふと雖ども予は敢て、女子に媚びんとするに非ず、予が私情よりいへば予の最も厭ふものは資質淺薄なる女子の增長也、然れども眞理は私情を容れず、予が一面に女子を罵倒しつゝ而かも猶女子の解放を論ぜんとする所以也、

（六）

更らに餘命あらば、僕は「人の生るゝや裸體也」と題する一書を著はして世に問はんと欲す、夫れ人間の罪

罪は衣を以て裸體を蔽ふに始まる、衣を以て裸體を蔽ふは虛僞を以て自然を蔽ふ也、形式を以て自由を蔽ふ也、束縛は實に人間着衣の發明に因す、僞善は道德的に頽墮を招き矯飾は經濟的に競爭を招き、束縛は精神的に萎縮を肉體的に傷害を招く、即ち着衣は人間墮落の第一因也、今日の所謂文明なるものは智巧の偏進也之を溯れば裸體を蔽ふに基く、太古の撲を敗つて、人間の墮落生ず、今の人は原始人類を野蠻なりといへど其分に劣れるは唯智巧の上のみ、物質の上のみ、靈性の上道德の上には、原始人は寧ろ所謂今の文明人に軼駕す、法律も刑罰も巡査も軍艦も常備兵も財產私有も結婚の女人私有も憎惡恨怨忿鬪戰爭も皆所謂文明の產物也、着衣以後の產物也、人間の始祖アダム、イヴの墮落は即ち着衣の墮落也、予はルッソーと同じく自然を尙ぶ、老莊と同じく自然を尙ぶ、トルストイと同じく今日の物質的文明に反對す、予は人の初めて生るゝに裸體なるより說起して、倫理的、社會的、政治的に今日の文明を批評せんことを欲す。

(七)

ショーペンハウアーの哲學は十九世紀後半紀の思想を支配す、トルストイもゴルキーも、イブセンも、ニーチイ(老莊に韓非あるが如く)すらも、ワグネルすらも、皆氏が哲學の影響を受けたるに非さるはなし、故に現代の思想を解して徹底せんことを要せば、先づ源頭に溯りて氏が哲學を解せざる可からず、獨り然るのみならず、氏は東洋思想と西洋思想との渾融を試みたる先鞭者也、此點に於ても氏が哲學は吾人東洋人の尤も研究を値する者也、然るに氏が著述の邦語に譯せられたるもの、僅に故中江兆民の氏が懸賞論文の一篇を評したると、及び戀愛に關する意見の斷片が、角田浩々氏の名によりて公にせられたると唯此二種ある而已、近時吾か文壇の士の西歐思想の皷吹に努むる者多く、而かも其のモウパサンを譯しゴルキーを譯し、ツルゲネツフを譯するにも、主として勞少くして而して早く金に代へ得可き短篇小品を採るのみ、代表的作物の大著長篇なるものに至りては多く顧みられず、是れ

豈に眞摯に西歐思想を紹介する所以ならんや、僕の如き非才淺識豈に能く大哲學者の思想を解し得るといはん、然れども隗より始めて氏が哲學の譯述に從はんことを欲す、蓋し僕に一個の主義一個の見地ありとせば能く之有るを得たるは氏の哲學の賜也、吾にして若し餘生あり、而して病幸に少間あり以て事を成すを得ば、聊か以て其恩に酬ゆるに足らんか。

（八）

藝陽君足下、僕は又「數奇傳」を著はして、自己の小生涯を敍せんことを欲す、蓋し古より自敍傳を著はすもの多く一代の大人物也、故に其閲歴に變化饒く、其記述は教訓に富む、僕輩の如きものが自敍傳を著すなどは僭越の極也、然れども平凡なる主人公を擇ぶことは今日の小説の流行なれば、僕輩の如き小人物の自敍傳も、亦駄小説と相比するに足るほどの面白味はあらん、且人は大人物が其自敍傳に於ていつはらざる懺悔をなすを驚異すべき事のやうにいへど、既に之を筆に上せ文となす時、其自己の經歷は、既に自己に非ずして一個の對境也、客象也、即ち一種脱實的の者也、人が追想に於ては苦痛の經驗も快感を覺ゆるが如く、自己の失敗自己の罪惡も、之を過去の事實として告白する時には既に代りて一種の小説的假譚と同じきものとなる也、故に之を記敍するに筆記者自らも毫も羞恥若しくは嫌惡を感ずることなく、否寧ろ興味を以て之を爲し得る也、故に人が自敍傳を作りて正直に自己を暴露するは決して左程の良心的努力を要するものに非ず、殊に其人が名譽あり地位ある大人物なるに於ては其過去に於ける其人の罪惡又は失敗は其人を賤しくするよりも、寧ろ反映的に其人の價値を上すの結果を來すものなるが故に、寧ろ一種の詩を以て之を爲すを得る也、故に大人物が其生の事實を如何に露骨に自白するも是れ決して感嘆に値せず、其自敍傳なるものは竟に藝術的作品たるに過ぎざればなり、予は予の數奇傳に於て必ずしも僞らざる自己を語らんとはいはず、僞るを要せざるべき範圍に於て、僞らざる自己を語らんと欲するのみ、夫れ人には語るべき事と語るべからざる

事あり、語るべからざることを強て筆にし強て之を文にするは亦一種の誇衒也、即ち亦僞はり也、

（九）

藝陽君足下、僕の今在る所北豆西海岸の一漁村、三面山に懐かれ、一面海に枕む、隱波を隔つて遙かに甲信の山を望むべし、日夕富士の雄姿を仰いで靜臥讀書に耽る、所謂安閒を愛して寂寞を忘るる者、此くの如きの生涯亦好からざるに非ず、但凡夫機心時に動く猶未だ大悟の域に達する能はず、魂は帝京に飛んで、歸念矢の如き時あり、節三月に入り輕暖を覺えば、乃ち都門の人となつて掉尾の一活動を試みんことを欲す、兄と再び相見て當世を罵る、蓋し數旬の後にあらん歟。

雲　頓　首

ドストジエウスキイの病氣

醫學的心理學的研究

ドクトル　富士川游

露西亞の文豪ドストジエウスキイは、ツルゲネフ、トルストイ等と、友人仲間で、其著述は世に行はれて居るが、此人の書いた小説の中には、精神に異常の有る人物が甚だ多い。これは、その小説を讀むだ人には誰にでも氣の附く事であるが、この事に就ては露西亞の精神病學者の多數が、段々研究をして居る。余は今その概略をここに紹介しようと思ふ。

第一にプロフエッソールツイッシユは『精神病學者としてのドストジエウスキイ』と題せる書物を著はして、その中に、斯う言つて居る『ドストジエウスキイがどうして、箇樣に精神病理學上の知識を得たかと言ふと、その説明は容易でない。殊に、ドストジエウスキ

イが、病的精神の現象に就て、精しく知つて居つたといふことは、實に不思議であるが、しかし、これはドストジエウスキイが、自分の病氣で、經驗した所から、箇様に病的精神の分析を精しくすることが出來たのであらうと思はれる。ドストジエウスキイが言ふ所に據ると、彼は小兒の時に已に幻視、幻聽を持つて居つた、又彼が癲癇を患ひて、居つたといふことは普ねく人の知る所である』それで、ドストジエウスキイの傳記や、その友人等の追想錄などを調べて見ると、ドストジエウスキイが癲癇を患ひたことと、その小説の中に書いた病的精神の狀態が自己の經驗に基づいて居るといふことが明かである。

ニコラウス、ストラシヨウは斯う言つて居る『ドストジエウスキイは最主觀的記者の一人である。彼が書いたものは、大抵、自己の精神の定型を本として、これを寫したものである。余は彼を善く知つて居るから彼の著述を讀むと、その敍述の主觀的であるといふことが、よくわかる』。ストラシヨウは又ドストジエウスキイの癲癇を患ひたることを說いて居る『癲癇の發作は、通常一月に一遍位起きたが、しかしたまには一週に二度位發作の起きたこともあつた。外國に居た時は氣候の關係やら、精神の影響やらのためであつたか、癲癇の發作が四箇月も無かつたことがある。確か一千八百六十五年の事と覺えて居るが、ある日の晩、十一時頃、ドストジエウスキイは余の許を尋ねて來て、兩人は調子に乘つて面白く話した。その間の問題が何であつたか、よく覺えて居らぬが、ドストジエウスキイはひどく興奮し、椅子を離れて、室内をばアチラ、コチラと步行て居つた。余は靜かに、椅子に腰を掛けて居つたが、その時遲し、彼の時早し、ドストジエウスキイは、異様の眼つきをなし、口を開き。をそろしい聲を發して、忽ち床板の上に倒れた。幸に此時の發作は、輕い方で、間もなく、醒めたのである』ドストジエウスキイが自から話す所に依ると、癲癇の發作があつて後、二三日の間は、精神に異常があつて、苦悶名狀すべからず、丁度自分が犯罪でもしたかのやうに感

じられると言ふが、ドストエウスキイが書いた小說のクラマゾツフ兄弟を讀むで見ると、スメルドジヤコウといふ癲癇病者が居つて、この人が犯罪人であるかの如くに、病的に自覺するといふことが書いてある。これはドストエウスキイが自己の病氣の經驗から得た所のものを、その儘に寫したのである』

『ドストエウスキイは、途中で知つた人に遇ても知らぬ風をして行く。集會などでも人に挨拶をされても返事をせぬ。多年相知つた人にても、アナタは誰方でございますかと聞き返す。こういふ事は、癲癇の發作があつた後では、隨分甚しかつた』と、ミルコウは言つて居る。ミルコウはドストエウスキイと相識の仲で、度々、ドストエウスキイの癲癇を介抱した人であるから、その人の言ふことは事實であらう。現にドストエウスキイも自から言つて居る『余は、余か流罪に處せられた時に、癲癇の發作を患ひ、それからは、全くこの惱を免かれることは出來ない。それまでは見たことや聞いたことは、瑣細の事までも、一々記憶して居つたが、癲癇の發作が起るやうになつてからは時々、善く知れる人をすら忘るることが多い。惡魔と題する小說を書いた時にも、その作中の人物の名を忘れて、始終、初めから繰返して、讀まねばならぬのであつた』(ソロウジエウの追想錄に依る)

右に言つた所は、ドストエウスキイが晚年の二十年間の有樣であるが、これに依りて見ると、ドストエウスキイが、可なり重い癲癇に惱むで居つたといふことは明かである。

それで、この所で、ドストエウスキイの幼小の時の有樣はどうであつたか、青年の頃の有樣はどうであつたか、といふことをしらべて見るの必要がある。

ドストエウスキイは、名をフエオドル、ミハイロウイッチユといひ、莫斯哥の生れである。その父は「マリーン」病院の醫員であつたが、固より薄給で、其家は隨分狹隘であつた。ドストエウスキイは、この間に、數人の兄弟等と共に生長したのであるが、その父の敎育は嚴重で、十歲の頃には、已に宗敎や、歷史の

本を讀ませられた、ドストジエウスキイの母は弱い人て、一千八百三十六年に肺結核で死んだので、ドストジエウスキイは田舍出の乳母のために養はれたが、その乳母がお伽話を上手にしたので、ドストジエウスキイは熱心にこれを聽いて、ます〳〵想像力を盛にしたのである。ドストジエウスキイの父は、神經性で、沈默て、猜疑心が深く、おこりつぽい人て、その小供をばよく叱りつけたのである。處が、莫斯哥から百五十里ばかり離れた所に、父の別莊があつて、夏期の間は、家族一同ここに移り、父のみが獨り莫斯哥に留まるのてあつたから、この間は、鬼の留守といふ譯て、小供等も自由に活動することが出來たので、僅に數週の間てあるが、ここに新しい刺激を受けたことは尠くない。

ドストジエウスキイは、神經過敏て、性質活潑の小兒てあつたが、その別莊に居る間は、餓鬼大將となつて、他の兄弟等と諸方を遊び廻つて、色々の遊戯をなし、其間に、露西亞の田舍の自然の感化を受けたことが尠なくなかつた。殊にドストジエウスキイは幼時の頃から、想像力に富むで居つたので、遊戯をするにも何時ても、人の先に立つて居つて。この事はドストジエウスキイが後に書いた小說『青年』の中に、敍述してある。キルピツニコウなども言つて居る通り、『青年』と題する小說は、ドストジエウスキイの自傳とも見るべきものてある。

ドストジエウスキイが自分で書いたものを見ても、他の人の話によりて見ても、ドストジエウスキイは、幼少の時から夢幻の狀態になつたことが多いといふことてある。これは固より健康のものにも見る所てあるが、神經病の素因のあるものに多いが當然てある。ドストジエウスキイは此の如き夢幻の狀態に兼て、幻視や幻聽の症狀を持つて居つたといふことを自分て書いて居る。

一千八百三十七年、ドストジエウスキイは、喉頭の病にかゝりて、音聲が出てず、談話をすることも出來にくい位になつた。ドストジエウスキイの父は「アロ

パチー」派の醫學を奉して居つたのであるが、その子供の病氣の頑固であつたので、節を折て、反對學派たる「ホメパチー」派の醫家に療治を依頼したけれども、その効果が思はしく無かつた。全體、この年にドストジエウスキイの母が、肺結核で死むだので、父はドストジエウスキイと弟のミハイルとを聖彼得堡に送る積て、其前に伯母を附けて、莫斯哥の某寺院に遣つた。所が其母が死むでから間も無い時であつたために、此時、非常の感動を起したものと見え、喉頭の病、音聲の出ぬやうになつたのも全く精神的のものであつたと認められるのである。

ドストジエウスキイは、一千八百三十七年、年十五て、聖彼得堡に出て、工兵將校學校に入り、四年で卒業し、已に士官になつてから二年ほど圖書科を修めた。工兵科では數學と圖書とが主要のものであるのに、ドストジエウスキイは文藝の研究に熱心であつたから、その本科には力が這入なかつた。一千八百四十二年、ドストジエウスキイは工兵士官となつたが、軍隊の仕事を嫌ふことは、少しも從前とかはらなかつたのである。此時、ドストジエウスキイは已に一家を持つて居つた、其家には四個の室があつて、ドストジエウスキイはその一個の室に住むで居り、外の三個の室には誰人も居なかつたといふ有樣であつた。ドストジエウスキイは狹き一室に机を置き、その傍に坐床を備へ、夜になれば、これを其儘寢床に用ひた。机の上にも、椅子の上にも、床板の上にも、書物と原稿紙とが散亂して居る、その間にドストジエウスキイは悠然として坐して居るといふ有樣であつた。朝の內、軍隊の仕事を濟ましてからは、始終この一室に閉居して、自分の好きな文學上の業務に從事したのであるが、ドクトルセンリーカムプが此時のドストジエウスキイの身體の樣子を書いたものを見ると、ドストジエウスキイの顏色は蒼白で、何時も乾性(喀痰の無い)の咳嗽があり、殊に毎朝劇しかつた。それに音聲は嗄れて、顎下腺が腫れて居つたといふことである。この容態は、結核性のものであつたらしい。殊にその母親が肺結核で死むだ所

から考へると、その癖は益々深くなるのである。

此頃、ドストジエウスキイの日常の生活は、隨分常人に違つた所があつた。ドストジエウスキイは朝から晩まで、時には夜半までも、机に倚つて、何か書いて居つて、その事は親友にも言はなかつた。たまに親友からその事を聞かれると、不性無性に、極めて單簡に返事をした。それで後には親友も、それをドストジエウスキイには聞かぬやうになつた。何か書き了ると、直ぐに何か、他の書物を讀むのが、ドストジエウスキイの癖であつた。

過度の勉强は、ドストジエウスキイの身體の健康を損した。ドストジエウスキイが學校に在りし時にも、已に癲癇の氣味があつたが、此頃よりは、精神沈鬱の狀態が增して來た。

ドストジエウスキイが罪せられて、西伯里亞へ流されたのは、一千八百四十九年の春であつたが、その前に、始終ドストジエウスキイの病氣を診察して居つたのは、ヤイウスキイといふ醫師であつたが、ヤノウスキイの言ふ所に據ると、ドストジエウスキイは此時已に癲癇にかかつて居て、輕くはあつたが、數回癲癇の發作を起したことがあると云ふことである。

ドストジエウスキイが婦人に對しての關係はわからぬ。酒は餘まり飮まなかつた。これに反して、甘い物は大好であつて、茶と珈琲とは、隨分多量に用ひた、煙草もまた盛に用ひた樣子である。

右に言つた所で見ると、ドストジエウスキイは神經質の父と、結核質の母との間に出來た小供で、幼少の時から、神經過敏で、夢幻の症狀をあらはし、幻視、幻聽を患へた。癲癇は、十五六歲の頃から、その徵候が現はれて居つたが、西伯里亞へ流された時から、其症狀が劇しくなつて、後には隨分重くなつた。そのために、癲癇の發作の止むだ後でも、ドストジエウスキイの精神狀態には異常の點があつたのである。

ドストジエウスキイは、此の如く、自分が癲癇で苦しむで居つたので、其症候を委しく分析して、その小說の中に、隨分明細に敍述して居る。それでドストジ

エウスキイが書いた小說の中に、自己の疾病、即ち癲癇の事を敍述してあるのに、凡そ五個の型がある。

第一は『主婦』の中のムリン老人。この小說はドストジエウスキイが一千八百七十四年に書いたもので、壯年のドストジエウスキイの精神の狀態が明かに書かれてある。すなはち癲癇性性格が若しく顯はれて居るのである。

第二は『貶黜者と被侮辱者』(一千八百六十一年)の中のネリー。此の小說の中には、ネリーの病床日誌が擧げてあつて、それに癲癇發作の狀態が精しく書いてある。

第三は『痴愚者』(一千八百六十八年)の中のミシユキン候。ここには、一人の子供があつて、幼少の時から癲癇の發作に惱むで居つたが、瑞西に赴むいて、療治をして、其病症が癒ほり、其人は健全のものになつたといふ次第が書いてあつて、別に病的のことは認められぬ。

第四は『惡魔』(一千八百七十一年)の中のキリロツフ。この場合ては、癲癇の發作に代りて、精神的同價症が現はれることが書いてある。

第五は『カラマツフ兄弟』の中のスメルトジヤコフ。ここには、スメルトジヤコフの生立から、死亡の時までの模樣が書いてあつて、この癲癇の發生のことが精しく擧げてある。

ドストジエウスキイの小說の中に、精神異常の人物が多いのは、畢竟右の次第で、ドストジエウスキイが自分の病氣で經驗した事實をその小說の上に顯はしたといふことは、趣味のあることと思ふ。

帝都の新聞經營者(三)

黑頭巾

其一

●經營者の特調は、經營者自ら暴露しつゝあり。煙と咳嗽とは長く隱す可かざる也。

◉吾輩は、之に由て經營者を月旦す。必ずしも經營者を探問するの必要無き也。

◉經營者は『紅葉狩』の鬼女の如き乎。人を倩いて其の工を弄するの間は、容易に其の假面を看破さるゝこと無し。

◉而して、漸く人を引て、其魔機に誘ひ得たるのとき其の眞面目は前面の明水に映ず。

◉或は八犬傳の伏姫の如く、自らは人心を具すと思へり。然るに之を鏡に照らせば、何時の間にか畜生の形相を現ずるものあり。

◉或は「三十三間堂」の平太郎妻の如く、柳、化して人間にある間は、美婦と現じ、其の本に歸るのときは、昔の儘の柳なることあり。

◉之を要するに、經營者は、其慘憺たる苦心の爲に、或は經營の趣味の爲に、引込まれて、知らず〱一種經營者の根性を陶冶す。

◉役人根性、町人根性、百姓根性、或は軍人根性のある如く、經營者亦自ら經營者根性無くんばあらざるべし。

◉經營者根性は、中々容易に見透かされ得可らざるに似たり。

◉而して其の本性を現はすのときは、則ち水に映ずる怪しの面影なるもの是也。

◉經營者根性といふは、必ずしも善とも惡とも附くものにあらず。

◉近世、「何々氣質(かたぎ)」の書流行す。明治の代に至つても坪内逍遙の「書生氣質」あり。未だ「新聞經營者氣質」を書ける者あらざる也。

◉嘗て「新聞記者の十年間」を自記せる記者あり。然れども、「新聞經營の十年間」を自叙せる經營者あるを聞かず。

◉現代の新聞經營者、才筆の士少からず、其の趣味ある半生の行路は、其の口より吾輩の聞かんと欲する所也。

其二

◉「中央」が銀座を去て、山崎高等洋服店、として出て其の對岸の毎日も亦歿落して、銀座の新聞界漸く寂寞

を加ふるのとき、「東京日々」も亦丸の内に退却するの報を傳ふる者あり。

●或は曰く、「東京日々」の建築は、近ごろ呉服店大丸の買收する所となれりと。

●彼の古風にして、何となく羅馬の廢址の面影を帶びたる「東京日々」の建物が、一轉して呉服店たらんことは、吾輩の殊に痛惜するところならずんばあらず。

●此の如くにして、銀座街創建の當初の舊建築は、全く一物をも遺すこと無きに至れり。

●古へより角屋敷は、商家の希望する所にして、而して又た大に擔ぐ所たりといふ。

●其說にいふ、角店は榮ふるときは大に榮ゑ、然らずんば急轉、衰運に向ふ。

●角店に三代の繁榮無く、眞角の店は、轉々つねに其主を交代す。

●「中央」「毎日」「日々」が、いづれも銀座街の角屋敷より退却して、煉瓦街に漸く新聞社の跡を絕たんとするに至れること、抑も何等の趨勢ぞや。

●豈、角屋敷の祟れるか、將た新聞經營の、此の如く困難なるを表章するものにや。

●此際ひとり「讀賣」あり。京橋畔に巍然として、近ごろ更に、其壘を高くし、壁を新たにしつゝあり。

●越後屋は、角店を以て古來、繁昌して今の三越に至る。然れども、「讀賣」の角屋敷に於ける如く、晴々しき角屋敷は他に多く其比を見ず。

●「讀賣」の角屋敷は、實に東京市中に於ける、有數の晴がましき位置たらずんばあらず。

●「讀賣」の位置は、商店として恐らくは餘りに高明に過ぐ。之を新聞社として、其の軍艦の側面に似たる廣々したる左舷を廣告の舞臺に提供せんこと、或は恰當の處置たらずんばあらざるべし。

●「讀賣」に對比すべきは、新橋畔の博品館あり。其の廣告上より見たる形勢、まさに匹似す。

●彼は、近時の新築と共に、紙面も亦た昔日悠揚の氣を減じ、次第に變徴を呈しつゝあり。

●「讀賣」は銀座一丁目一番地にあり。或は曰ふ、此處

はして、此の如き呑氣なる新聞ありと。

●然れども「讀賣」が特地に呑氣なりしは、則ち煉瓦街頭の角屋敷に、尙ほ割據する一因たらずとせんや。

其三

●六號活字をして、特地に精采を發揮せしむるものは萬朝報なり。

●吾輩は、萬朝報の六號記事を見ることを喜ぶ。六號は萬朝報の生命なり。

●勿論、あらゆる新聞皆六號を用ひざるは有らず。然れども或は精明を缺き、或は殊に「紙幅節約の爲とし
か」見えず。

●ひとり萬朝報の六號記事は、六號に妙處あり。

●換言すれば、六號なるが故に靈活を覺え、六號なるが故に人目を惹く。

●蓋し其原に溯れば、萬朝報の六號は、其紙面の狹隘に起因するに外ならず。

●然れども萬朝報に於ける六號記事は、紙面適宜の處々に雜出して、無限の情趣を帶ぶ。

●此點よりして見るときは、萬朝報は、之を六號新聞といふを妨げず。

●六號新聞は帝都の新聞中、蓋し唯一也。

●刀に大刀と匕首とあり。匕首には則ち生々精悍の活趣あり。

●匕首の妙味は則ち六號活字の趣味なり。而して之れ經營者黑岩の趣味を代表するものならずんばあらざる可き也。

其四

●萬朝の六號新聞たるに對比して、二號新聞を以て標榜するものは、「報知也。

●所謂報知式といふは、活字を以て表示すれば、二號新聞の意義に外ならず。

●二號活字を多用したるは、「時事」を嚆矢とす。

●「時事」が十二頁の大紙面にして「綽々たる餘裕」の處分に苦めるは、二號多用の一因とす。

●「報知」は則ち、「時事」の株を奪つて、二號新聞の名聲を、殆んど獨占しつゝあり。

●「報知」が二號を利用するは、煙火を打揚げ、イルミネーションを點ずるの意味也。

●「報知」の二號は、啻に記事の内容を廣告するに止めず、實に紙面を裝飾す。

●「報知」の二號は、平凡なる紙面をして、光彩陸離たらしめんとするにあり。

●故に吾輩はいふ、「報知」の二號は、一種の廣告術たる也。

●萬朝が、五號乃至六號を用ふる處に、「報知」は則ち二號を點出す。

●「報知」の編輯術は、一種侮り難き處あり。世人は、往々其の平俗を笑ふ者無きにあらず。然れども、平俗の中に、機鋒を藏するは、「報知」の長處也。

●何等の見る可きもの、更に無きが如くにして、而して何と無く面白ろき處あり。

●數日、平凡の紙面、打續くかと思へば、中々、趣味ありて、切拔に値するの記事出づ。

●左程にも無き日には、二號は眞の形式に過ぎざるの感を抱かしむれども、一旦、趣味ある記事出づれば、二號は頗る振ふ。

●畢竟、弦齋居士の「食道樂」も「日の出島」も共に、「報知」式の上乘なるものにして、其の成功せる所以は、則ち「報知」の成功せる所以也。

其五

●近時往々「國民」式の語を聞く。「國民」式は「報知」式の一種なり。

●「國民」式は「報知」式より出づ。而して其二號を連發するに至つては、「報知」を凌駕す。

●「國民」は、唯だ二號活字のみならず、挿圖を排列するの技巧に至つても、二號と同様也。

●造語に於て、活字に於て、而して挿圖の排列に於て、滿幅の紙面、徹頭徹尾、挑發的なるは「國民」式也。

●「報知」は、同じく挑發的の氣味を帶ぶと雖も、廣く世の中を顧客とするが故に、何となく平にして穩なる處あり。

●「國民」は則ち書生を釣り、若衆を釣らんとす。其調

子は輕にして佻。

●此の如きは、蘇峰の性格を暴露して遺憾無きものにあらずや。

●彼既に御用紙として政事を以て本職とす。而して其の新聞が、書生の下宿屋に、理髪店にさへも、普及せんことを慾望するは、則ち此の如き新聞調を造り出す所以にあらずや。

●「國民」式が、「報知」式を凌駕し得ざる所以のものは、其の根底に於て、經營者の頭中に、二兎を逐ふ的の、矛盾の經營あること、其一大原因也。

●蘇峯は恐くは、賑やかなる新聞を造り得べし。整頓せる新聞を造り得ざるべし。

●然れども、吾輩は、蘇峯が一頭地を、拔くの文才にして、隨つて其紙面亦た一種才調、人を魅するの處あるを認む。

●ひとり、彼の「國民」式を學んで、自家の特調を失ふもの、輓近往々にして出づるを見て、吾輩は、古へ邯鄲歩を學ぶ者の嘆を發せずんばあらざる也。

其六

●「二六」の田中伯結婚問題に關する記事は近時人目を聳動す。

●就中、公山縣に呈するの一書尤も光采絢爛を極むるもの。恐らくは近時稀觀の快文字たらずんばあらず。

●或は其の小題做大題の嫌あるを惜むものあり。是亦一面の眞理無くんばあらず。

●或は又た「二六」の文章、奇激の氣、紙面に横溢するを惜む者あり。然れども、奇激は「二六」の生命なり。

●奇激の調は、由來「二六」の長處也、又た寧ろ其の國粹たる也。

●これを古に比するも、悲歌激越の調、「二六」の如きは、得易からざる也。

●假令、燕趙悲歌の士をして再生せしむるあらんとも、豈これ以上の憂憤高凉の音調を歌ふ者あらんや。

●吾輩を以て見れば、「二六」が得意の擅場は、奇憤の氣、餘あり。而して、哀婉の音足らず。

●彼が意到り筆到るの時、則ち壯士をして慷慨劍舞せしむるに足る可く、孤兒寡婦をして、潸々として泣かしむ可きにあらざる也。

其七

●東京パックに載せたる、廿五年前の田中伯、十年前の孝子、兩々對比して「お半、長右衞門」を現出す。帝都の諸新聞、此奇拔なる寫眞に思當らず。

●「半」といひ、「長」といふ、這般の結婚は、當初よりして博奕的の意義を有す。

●實は此兩者の關係は、「お半、長右」以上也。寧ろ玄宗楊貴妃なり。

●長恨歌を讀む者は、玄宗貴妃に對して絶代の美男美女を聯想す。

●安んぞ知らん、貴妃は猶ほ天嬌たる艶婦なれども、玄宗は則ち七十に垂んとするの老翁也。

●「二六」の活動の爲に、連理の枝折られ、比翼の契割かれて、鴛鴦離れ〴〵に寒し。

●岩淵の別墅は、富士山を望み、東海の仙郷也。堺越しに一古松あり、姿致横生す。或はいふ、三保松原にある羽衣の松の根分せるもの是也と。

●道路、説を爲す者あり、曰く、一種室咲の麗草、或夜、ひそかに香を裹みて衞門より運び入れらる。

●これより浴後の水、魚油を漾へ、艶々として青春の香を浮ぶ。

●雲上の秘戯、世人すべて知らず、天高く地厚くしてすべて月下氷翁の沈默を守るに委かす可かりし也。

●浪花節に、「天人のお松」を語る。其筋書にいふ、「天人のお松」は沼津の美人也。

●彼女は、姫百合の嫋々たる風姿に、測る可らざる莫逆の氣を藏す。

●其頃、肥前の鍋島侯に御落胤あり。久しく其所在を失す。唯だ女子たりしことだけは知らる。

●何處の茅屋に人となり玉ふやらん、今や芳紀まさに十八九なるべしと、父殿の人知れず思を焦がし玉ふ折柄、突如として御落胤と名乘りて、乘物とゞろと乘込み來る者あり。

●樹影を出るの鶴、白沙に立つ。轎輿の扉を開かせて徐ろに下り立ちたるは、目覺むる計りの美しき「天人のお松」

●頃は彼女の年二十一なるべし、十七八にも見擬ふ初々しき、氣高き艶容。

●彼女は、絶代の美しき文金高島田に、絶代の覇氣を藴みて、纎手を濡らして「粟」の三十五萬石を攫取らんとす。

●彼女は一敗、地に塗れたりと雖も、實に女天一坊たるを失はず。

●「天人のお松」が狙ひたる鍋島家は今や侯爵也。孝子が夢みたるは、伯爵也。

●吾輩は、敢て孝子を以てお松の再生とはいはず。然れども、「天人のお松」逝きて今幾年ぞ。羽衣の松も漸く枯るゝのとき、其の根分の芽を吹きて、新聞種となれること、松樹千年、猶ほ靈あるもの乎、否乎。

●伯田中は維新功臣の一人也。老來、少婦を娶るの一點、必ずしも其の德を損せず。

●艶福は人の樂事也。操觚者、之を諷詠して以て興趣を遣ること、又た聖世の餘澤にあらずや。

●吾輩は期待す。「二六」社中、麗才の士、彩筆を驅りて新長恨歌を賦する者出づるあらんことを。

其八

●吾輩は未だ千頭淸臣を見ず。然れども其の遣り口に依て見るときは、彼も亦、咳嗽患者たるを免れず。

●一昨年の大晦日に「日々」が休刊したるは、蓋し新聞界の注目を惹けり。

●然るに、千頭は則ち、近事片々の欄を半減して半段と爲せるは、其の看板を半枚に割りたると殆んど同意義也。

●或は休刊し、或は半減す。吾輩は彼經營者の態度の嚴々然として、堅守の風あるを認むる能はず。

●財政記者拂底の時に、惜む可きは、「日々」の本多雪堂の位地なり。

●四五年前、東京に田中穗積あり、大阪に本多精一あり。東西相對して、健筆を以て期待されたるに、今や

兩者共に東都に集りて、雪堂は大だ振はず。

●雪堂は內藤湖南と共に「大阪朝日」を飾り、「大阪毎日」に對して堂々筆陣を張るの觀無くんばあらざりき。

●湖南、京大に入るの後、雪堂も亦た厚聘されて「日々」社長の椅子に著く。

●「日々」の樓上の眞角の社長室は、朝比奈知泉嘗て機略縱橫の筆を揮ひたる處。加藤高明、外務大臣を退くの後、暫らく有爲の煩悶を横へしの處。雪堂が一躍して此室を占據せるは、彼の爲に榮と爲すに足る。

●可惜、好漢、世才無し。彼は頓挫して、空しく高給の一記者となり畢る。

●而して「日々」の經營者が、漫に高給を以て雪堂を蓄ふるは、美人を金屋に貯ふるとは、全然其の意義を異にす。

●雪堂は、表裝せざる古書畫の如くに、床の間の横の袋棚に投入せらる。

●投入せられたる場所は、眞逆に貴からざるには非ず。然れども彼は廢物也。

●美人を金屋に貯ふるは、則ちビールを穴藏に貯ふると一般也。

●ビールを穴藏に貯ふるは、それをして、不斷に清冷の妙味を保たしめんが爲のみ。

●雪堂は、今の如くにして貯へらるゝに於ては、彼は次第に其の清新の氣を失ひて、店頭に曝らせるビールとなり畢らん。

●過去の雪堂は、財政論に於て精采を有す。然れども今後尙ほ現狀を維持するならんには、本多精一は畢竟不換紙幣也。

●「日々」は財政の論壇として、一箇の估劵を有するを以つて、此の位置を利用せんとしたるもの、先きに田中穗積あり。後ちに雪堂あり。

●二人者は共に志を得ず、而して田中は去り、雪堂は留まる。

●開說、田中は、信州に於て多額納稅の資格を有し、其人溫良にして頭腦明斷也。

●彼は夙に歐洲に留學して歸り、年壯にして、早稻田派財政學者の撰手を以て期待せらる。

●早稻田派には、天野爲之、鹽島仁吉等ありと雖も新聞記者としては、田中を以て有望とせざる可らず。

●彼は必ずしも文章家にはあらず、然れど一週間、溫泉場に籠城して、三百頁の著述を、一氣呵成に完了したるの經驗を有す。

●彼は、新聞經營に趣味を有し、暖簾のふるき一新聞を、手に入れんことを待つや久し。

●彼は、幾回か此計畫を試みて成らず。今、則ち宿昔の志を達して、「毎日」經營の倚子に著く。

●聞く、彼は、早稻田に於ける新聞研究會の代表者なり。想ふに、彼は、「毎日」を以て、新聞研究會の實驗室となすの覺悟あらん。

●近時、早稻田大學は、少壯、新聞記者の淵藪なり。いはゞ、田中は其の若年寄也。

●此意味に於て、彼が「毎日」に於ける經營振りは、囑目に値す。

●抑も吾輩は又た、彼に期待するところあり。當年、彼は、雪堂を以て好敵手と爲し、心窃かに、甲越二雄の心事を以て、自任せずんばあらざりき。

●今や、彼は得意の人となり、雪堂は失意の人たり。吾輩は、「謙信、信玄に鹽を贈る」の俠氣を以て、彼、田中に囑望せずんばあらざる也。

現代人物評論（十四）

小松原文相論

△小松原英太郎氏

覆面子

人物評論は具合が悪いから單に經歷の一斑位なら話しませう、小松原さんは元來は新聞から出たんです、最初、東京に於て曙朝野江湖近事評論等に筆を執り又岡山に於て山陽新報を起し近時大坂毎日を主幹したのです、氏の東京に出ましたのは明治七年頃征韓論當時です、當時岡山には二派があつた、氏は非征韓論派であつて、その爲態々同士六人と相提へて東京にやつて來たのだ、それが機會で氏は一時慶應義塾に入つたのである、その他の同士も同人社其他へ通つたが、下宿に歸るや互に學びたる所を交換して研鑽切磋眞面目に勉强するといふ學問の遣り方であつたのだ、それから新聞記者になつた、近事評論であつたと思ふ、盛に過激な事を書いたものだから遂に其筋の忌諱に觸れて二年か三年囹圄に呻吟した、何でも鐵腸居士末廣重恭氏も一所であつた樣に思ふ、獄中にては詩も作り文章も書き意氣頗る昂かれりと聞く、明治十年頃と覺ゆ、岡山に歸り山陽新報を創む、實に岡山に於ける新聞紙の鼻祖にして今に於て縣下有力の新聞紙となり居れり、明治十三年頃始て官途に就て外務省に出仕したのです、

有名なる北海道官有物拂下問題に引續き、當時の內閣に動搖を生じ、大隈伯が挂冠して改進黨を組織した時、慶應義塾出身者は多く伯に隨て在野の人となつた、氏もその仲間で有つた樣に思ふ、その後太政官書記官となり參事院議官補となり明治十七年に及んだ氏に親炙したる人の話に依るに氏は非常の勉强家で又精神家である殊に讀書を嗜み新版の書物といつたら皆讀んだものである、獨逸へ行きたいといふ考はその頃に起きたので俄に獨逸語を始めたが、劇務に居るので仲々時間はない、而かも勉强なる氏は公退後、夜一時若くは二時迄も役所の書類を見了り、澤山の手紙の來るのを一々披いて見ては書くべき丈の返事は盡く書き、それから自分の研究に掛り獨逸書と首つ引をするのだ、好で廣く人と交はり來客は非常に多い家であつた、中六番町に居られた頃の事を記臆して居るが、室といふ室殆んど訪問者が通してある、然るに氏は朝起ると先づ日課として居る新聞の通覽を始める、當時の事だから皆といつても左程迄數もないには相違ないが、兎に角東京發刊のものを皆取つて居つたのだ、それを了つてそれから客に接するといふ順序にして有つた、當時から山縣公には非常に信用があつたので往復も頻繁であつた、山縣公は其頃參議であつた、

十七年の夏頃に氏は夙志始めて成り、獨逸駐在公館詰外務書記官となつて渡歐した、とはいふもの丶外務は元來その志ではない、志は內務の

行政に在つたのである、三四年間も居つたでせう、その間に習ひかけの獨逸語を更に完成すべく勉めると同時に、地方の行政を熱心に調べたものだ、特に地方自治に關することを調べたのだ、それから歸つたのは二十年頃であらう、氏は直に内務省へ入り秘書官を勤めたので恰も好し我國に於て地方に自治政を行ふの時機に際會したのである我國にては獨逸人モッセ氏を聘して市制町村制を立案せしめ、更に郡制府縣制をも立案せしめた、氏は當時大森鍾一氏等と共にモッセ氏の事業を助成したものである。地方自治の施行には山縣さんも井上さんも熱心であり、青木、野村、品川等の諸氏も亦同じく熱心であつたから、知らず々々の間に地方自治の朋黨なるものが出來又自治政研究會なる者か起つた、斯ゝる有樣で市制町村制は遂に二十二年を以て實施さるるに至つたが郡制府縣制は内閣に異論ありて實施か後れ剰へ大に修正せられて殆と換骨脱體となつた。

二十三年に國會が開けたが、自治行政論者の朋黨は遂に井上侯即ち當時の井上伯を戴ける自治黨と名乘りて衆議院に於ける一大勢力を占め野村青木品川等の諸氏朝に在て之を助け、澁澤榮一、福地源一郎などいふ人々が野に在て之を援けた、がその參謀は實に小松原さんであつたのだ、外に齋藤修一郎氏などもあつたが。

地方自治に最も熱心なりしは氏でありた尋て内務大臣秘書官より一轉して出てゝ埼玉縣知事となつた、當時水害等があつて色々困難の事件があつたに拘らず治績の見るべきもの少からす、地方官中錚々たる方であつた、二十四年頃品川内務大臣に擢かれて警保局長となり所謂選擧干渉をやつた、品川の大臣、白根の次官、小松原の警保局長といふ役割で盛なものであつた、その結果少からず害毒を流したに相違ないが、隨分思ひ切つたやり方をしたものだ。

當時は又憲法の或る條項に付き議論二派に分れ、子爵井上法制局長官が一方を代表しその爲に政府部内に暗流が出來た、山縣老公品川子爵等は井上子爵に左袒し小松原さんも矢張其一味である、敵手の方は先づ洩らさずに置かう、

内閣倒れて氏は靜岡縣知事となつたが、地方行政に熱心なものだから色々新しい計劃をもなし、相應の治績もあつた、その後長崎縣知事となつた、それから三十一年頃、山縣内閣の時に司法次官となつて中央に來り、同じ内閣で更に内務次官内務總務長官になつた、氏が郡制府縣制の盛返しをしたのは此時で、即ち今日施行されて居るものである、其他選擧法も改正せられ治安警察法行政執行法等重大なる幾多の法令制定せられ社會問題としては支那勞働者の入國を拒み娼妓の自由廢業を認め又改正條約實施に伴ふ各般の施設を全ふし北清事件に關しては内地の取締に大に力を致す等功勞の僻ふへきもの甚た多しと云ふ其官を辭するや大阪毎日新聞の主幹となり貴族院議員としては郡制案の通過に勉めたるも其志を果たさす郡制廢止案の出るや清浦大浦平田一木の諸氏と相共に極力之に反對せり而て反對に最も熱心なりしは小松原氏であつた、蓋し其主義其經歷に於て已むを得ぬことである、抑も地方自治政の本義たるや名譽職

を以て其機關を組織し政黨政派の影響を蒙らず道義に由り舊慣を重じ興保相助け郷黨相扶け能く親和せる鞏固なる團体を作りて國家より分任せられたる一地方に限局せる公共事務を共同處理するに在り而て法人の資格を有して財產を有し行く〳〵は其收益より口費を虛辨せしむるの方針を取るものである是に於て町村を餘り大にすることは自治政の施行には不便なのである何となれは舊慣の異なれる數町村を合併すれば和合一致が六ツ數くなり財產は各部落別々に之を所有し統一か付かぬ公共事務の大部分は各部落之を處理して公費は協議費を以て之を支辨し收入役の責任なく又法律上監督の道なく財政紊亂の端此に啓かるべし且隣佑相扶くるの精神は變して選擧に競爭し役員を爭奪するの風となり公民の義務たる名譽職は自然に人の好まさる所となり必す有給の委員を置くの必要を生じ遂に政黨派の渦中に捲込まれて弊害百出手の付け樣か無くなるのである、これは町村が大になれはなるに從つて起るべき現象である、此等から考へると壓力を加へて地方の團體に合併を行ふ事は宜しくない、又地方の團體の事務は國家より委任せらるゝのではあるが餘り負擔重きは自治政の健全を害するか故に隨て合併まで行ふて無理に資力の强大を謀る必要はないと思ふ寧ろ郡制を存して町村の力に堪えさる事業は郡の事業と爲す方が得策である又經濟である道路の維持上級なる學校の經理勸業の實行其他各種の施設に於て深く此感かある此の知き傾向を有するは獨逸は素よりだが、英吉利等でも近來は此ゝる趨勢が見える、郡制の必要は此ゝる大體の意味から來て居たのだから、小松原さんがその廢止に反對を唱へたのは、決して行掛上のみの議論ではない、實に氏が外務書記官として獨逸に留學して當時の研究の結果、多年一日の如くに確信して來たのである。貴族院に於ける同じ反對者の中には、心事を分析して見たら色々の人も居ろう、が小松原さんのは二十有余年の昔からズーツと一貫して來て居る牢乎不拔の意見なのである。

その精神が今文部大臣となられても矢張り現れて居る、即ち學校の事でも同じ理屈だ、質素を旨とせよ、浮華と虛飾とを避けよ、外形上の煩瑣ある設備を完ふするよりも寧ろ內容の改善に重きを置けよとは小松原文部大臣が地方官會議に訓示したる所にして自治體の事業として成功せしむるには自ら此の方針に出てさるを得ぬてはないか

其風を淳樸にし其心を誠實にし精神を薫陶して眞正なる勇氣を作興せしたるは治民の要道にして自治政の發達亦此に基いするのである隨て浮華淫靡の風は勉めて之を矯めればならぬ子女の教育に最も意を用ゆるの必要がある近來小說流行し就中世道人心に害ある文字か少なくない而て子女を惑はすの弊は實に大である小松原さんか文士招待會なるものを開くに至つたのも其意畧ぼ推知することが出來る

地方自治には舊慣を重んずるといふ事が大切である、地方自治と舊慣とは離るべからざる緣がある、英國あたりを見ても左樣である、自治を唱へる人には如何しても舊慣を重んずる精神がある、小松原さんなども矢張りそれである、で今文部省の椅子に凭つても、朝令暮改人を惑はすよりは、十分研究に研究を重れて、その結果で如何ともするがよいとい

ふ考を持つに至ろ、て先頃國語問題に關する斷行をも敢てしたのだ。即ち小松原氏の施政は何もかも地方自治を重んずるの精神から割出して居るのだと思ふ。抑も自治體の事業として小學校を設けしめ强制的普通敎育を行ふは社會生活に欠くべからざる必要なる科目を授くるのである讀書習字數學は其主要の科目である然るに國語として授くる者が世間普通のものと異なり政府の出だし法令新聞に書く記事と其語樣文體を同くせず電文を認れば受信人に理解か出來ぬ樣なことでは普通敎育の主旨が立たぬ國語の改正を爲さんと欲せば能く調査し能く研究し之を法令新聞紙電報文等に實行すると同時に之を小學校生徒に授くることでなければならぬ國語調査は決して之を廢しないが調査の中途に屬して未だ世間に行はれざるものは早計に小學校の敎科書に用ゐることは出來ぬ

憲法を施行して兩院を設けたが、その實質は如何であるか、坂垣さんは此樣な事を話して居た、私は舊物を破壞して改革を行つた、が彼れも一時。是非當時には爾せざるを得ぬのであつた、けれども今考へると憲法政治の基礎といふものが大に薄弱であつた、基礎とは外では無い各地方團體である、之が薄弱では國家は不完全である、だから私は之から地方自治に大に力を用いる積てあると。內務行政は重きを地方自治に置く、地方自治か發達せれば敎育も勸業も、駄目た從つて國家も發達はせぬ、選擧法を幾度改めたからとてそれで選擧の弊か改まるのでない、それで議院政治が理想通りに行はれるものでない、選擧權を重ずるの精神に國家の爲といふ觀念が、間違なく明瞭に、銘々の胸に意識されればならぬてはないか。軍事亦然りてある地方團體に鞏固なる結合がなかつたならば、出征軍人の家族を扶助し軍人をして後顧の憂を去りて戰場に奮鬪せしむることは出來ぬ又在鄕軍人團體を組織し互に鼓舞作興せしむるは獨逸之か例を開き我國亦近來之に倣へるが是れも自治の精神に基かざれは全きを望めない社會政策から說いても左樣である。貧富の懸隔の起るのは已むを得ぬ勢てあるが、之には中產以下のものが貯蓄をする、產業組合をも組織する、斯くして互に相助け合ふ事にならればならぬ、その他地主と小作人等種々な關係も有ろうが、此間の諸問題の解決も是非とも完全なる意味を有する地方自治から割り出さればならぬ敎育、政治、道德、參政權の發達等社會のことは總て自治の精神を基とせなければ皆駄目である、國家が盛になれば大貿易大工業も起ろうけれど、その國家の盛なるといふ根底には地方自治といふ事が如何しても必要である。警察などのことも追々發達するに從つては地方警察といふ事も行はるべきだと思ふ、地方警察の事はモーセッ氏が曾て立案したこともあるのだが、時期まだ早しとして行はれはせなかつた、實際左樣である、今之を行つたとしては諸種の弊害が百出することは見易い道理たが、後になつたら行つても宜かろうと思ふ、成るべく地方に權利を持たして圓滿なる自治政を施行して見たいのである。而して此希望は直に小松原さんの希望てあろうと想ふ。(座談筆記校閱濟)

△男色の辯解

巖谷小波

小松原文相の事を云へと云つたつて、僕は此間官邸へ招かれて、その國務大臣としての、フロツク姿に初めて會つた斗りで、前後に何等の交際も無いから、隨て何等の云ふ事をも知らない。

然しその招待會の事で、世間に誤り傳へられた事があるから、この機會を利用して只その一事だけを、文相の爲めに辯解しておかう。それは他でも無い、例の男色問題だ。

當時多くの新聞は、さも〳〵文相が男色家であり、乃至は之を奬勵する者であるやうに傳へ、それをまた輕信して、直ちに文相の人格を論じた者もあつたが、これは大きな間違で、文相の爲めにはお氣の毒でならない。

と、云ふのは、當夜此問題の出た時、傍から口を出したのは斯く云ふ僕で。それに付いては、先年ある獨逸人から、武士道と男色の關係を質問され、一寸當惑した話から、更に進んでは、男色は兎も角も男子らしい、これと海老茶の尻をつけまはす、昨今の輕薄な青年に比して、むしろ恕すべきだと云ふ論者もあると斯う云ふ事を云つたらば、文相も大いに笑つて居られた。話は只それ丈である。

それが何う間ちがつたか、この様の論者の言が、直ちに文相の言として傳へられ、またそれが信じられるに至つては、全く御迷惑お察し入る。

依て僕は、當時の係り合たる一人として、敢て頼まれた譯では無いが、一言辯解する事にした。

小松原文相に就ての事は、これ以外に何も知らぬ。

△小松原文相に就て

大町桂月

小松原文相の人物材能に就いては、われ一も知れる所なし。その文相となりてよりも、まだ半年たつかたゝざる程なるが、就職するや間もなく、假名遣を舊に復したるは、余の大に痛快に感ずる所也。人或は之を蠻勇と嘲りたれど、決して蠻勇にはあらず。前の假名遣改正が蠻勇也。小松原文相は、その蠻勇を引きもどしたる也。人或は之を教育の退歩と罵りたれど、決して退歩に非ず。前の假名遣改正が退歩也。小松原文相は、その退歩をひきあげたる也。

前の假名遣改正は、一部の學者教育家の理想に過ぎず。元來、普通教育は、社會に適應するやうに、國民を教育すべき筈のもの也。然るに、一部の學者教育家の理想を直に普通教育に應用して、社會に適應するや否やを顧みざるは、大なる蠻勇と云はざるべからず。前の假名遣改正、これ也。前の假名遣改正は、社會の實用とは風馬牛にて、兒童は小學校

にて改正の假名遣を學ぶも、實際には役立たず。實際に役立たむには、更にまた學び直さゞるべからず。普通敎育の本旨を誤れるものと云ふべし。辯解する者は曰く、前の假名遣改正は、文字の如き空なる知識に兒童の頭腦を勞せしめずして、之を他の實なる知識の方に働かしめむとするものにて、敎育上の進歩なりと。これ學者の理想としては、よし。されど、その爲めに、國語を紊亂し、殊に社會に適應するに由なければ、進歩にあらずして、却つて退歩也。學者の理想は、往々突飛に過ぐ。甚しきは、國語を全廢して、英語を用ゐむと言ふものあり。羅馬字を用ゐむと思ふものあり、漢字を全廢せむと思ふものあり。之を直に普通敎育に行はれては、たまつたものに非ず。文部省は、學者の理想に追ひたてられて、いろ〳〵突飛な事をしたれど、假名遣改正ほど突飛なるもの無し。時の文相樺山伯が薩摩隼人の豪傑なるに乘じ、盲判をなさしめて之を斷行したりとは、さても〳〵亂暴きはまる話哉。今の文相、之をもとに戻したるによりて、それて、やつと、文部省は、突飛亂暴の嘲を免れたるもの也。

文部省は、先年國語調査會を設けたり。其設くるや、よし。されど、唯國語調査會をして、國語を調査せしめよ。其調査せる事を早く何かに應用せむとするは、餘りにこせつくといふもの也。その調査によりて、國語を改正せむなどゝは、以ての外の話也。調査は調査、百年たゝうが千年たとうが、たゞ、のんきに學者に任かせおくべし、國語の改正は、たゞ自然の發展に任かすべき也。結果をいそぐは、日本國民の短處也。

世の識者が何と言はうとも、直に國語調査會の結果を世に示さうとあせらずんば可也。とにかくに、小松原文相が、假名遣をもとへ戻したるは、うつかと學者の空想などには動かされぬ態度堂々として、人の意を强うせしむるに足る也。

この頃、小松原文相は、數名の文士を招待せり。大臣の資格として、文士を招きたるは、之を以て始めとなす。これ畢竟するに、文藝を重くずるより出てたる事にして、文藝の爲めには、大に慶すべき事也。世傳ふ。文相は、文藝院とやらを設立せむとの志ありて、文士の意見を問ふ爲に、かく、文士を招待したるなりと。われ、その果して然るや否やを知らず。また、文藝院とやらの如何なるものなるやをも知らず。文藝を重んずるは、嘉すべし。されど、妄りに手を出して、世話やきすぐれば、好意が却つて仇になるべし。國語が自然の發展に任かすべきが如く、文藝も亦自然の發展に任かすべき也。文藝の趣味を解するものは、たゞ個人として文藝を賞玩批判せよ。公人として、文藝の發展指導者などゝは、餘りに世話をやきすぐる也。それも、風俗粗野にして、文藝が振はぬといふやうな時代ならば、文藝の尻押して景氣をつけるもよけれど、今や、文藝は世にもてはやされ居る也。今更、文部省が文藝の發展をはかるべき必要は無し。さりとて、餘弊を氣にしすぎて、角を矯めて牛を殺すは、國務大臣たるものゝ度量とは云ふべからざる也。

なほ、少し立ち入りて、先般招待せられたる文士の人選に就いて一言せむに、小松原文相が、單に個人として文士を呼ぶなら、何も、かれこ

れ他より云ふべきに非ず。文相として呼ぶ以上は、他より容喙すべき餘地あるべし。呼ばれて行きたるもの九人、上田博士、芳賀博士、これ東京大學の先生也。上田敏、幸田露伴、これ京都大學の先生也。島村抱月、これ早稲田大學の先生也。なほ早稲田の老先生、坪内逍遙も案内は受けたる由也。かく三大學の權衡をたもちたる裏面には、一種の官臭あるを覺ゆ。人は傳ふ、逍遙は、はじめの人選には洩れ居りたりと。外に、獨逸通の森鷗外、もとは東京大學の英文學の先生にして、猫で賣り出して、今は新聞の小說家となれる夏目漱石、唯一の歷史小說家塚原澁柿、唯一の少年文學者嚴谷小波、いづれも品のよき人也。されど、今の文壇には、革新の氣横逸す。自然派の名の下に總括せらるれど、一々作品を檢すれば、いろ〱さま〲也。その一部には、肉慾に囚はるゝものもあれど、島崎藤村、德田秋聲、正宗白鳥の如きは、毫も肉慾に囚はれたる所あらず。十年一日、主義を有して、寫實の壘を守れる小杉天外も、よそにすべき人に非ず。自然派に對して怒號せる後藤宙外も、一種文壇の雄也。神韻縹渺たる泉鏡花、豈にまたよそに見るべけむや。自然派の爲めに、積極的に主張をのべて一方に雄視し、而かも近く文藝院の設立を唱へたる長谷川天溪まで、よそにせるは、文部省は、餘りに今の文壇を馬鹿にせる也。招きたる人に就いては、一々批評せず。唯一言すれば、いづれも今の新氣運の渦中に立てる人には非ず。譬ふれば、殘照を空にとゞめて、早巳に西山に沒したる太陽也。もしくば、天の一方にかゞやける星辰也。中には肉眼には見えざる星辰もあるべし。或はまた月もあるべし。されど、に東天に輝ける太新陽はあらず。學士會院は、今や、あれども、無きが如し。文部省は、今更、文壇に一種の學士會院をつくらむとする乎。それとも、文部省は、文藝院の名の下に、毒にはならぬ連中を集めて、今の新氣運の横逸を取締らむとする乎。單に人選のみに就いて、判斷せられて、文部省は、自然派の名の下に勃興せる新文學を鎭壓せむとするなりと言はれても、それは、邪推なりとすましても居られざるべし。

△小松原文相の人物

田中穗積

小松原文相にはまだ一面の識も無い、從つてその性格の如何等を委しく知ろう筈は無い、が小松原氏は極めて微賤より身を起して、格別擁護をも取らず、先づ人目には餘り立たずに營々として歩武を進め、遂に大臣にまで成り上つたのである、その經歷やら外部に現はれた遣口やらから綜合して人物に考へ至ると、極眞面目な、常識に富んだ、そして勉強家であつて執着力の強い人と思はれる、文部の椅子に着いてから假名遣復舊やら文士招待やらで大分人氣を騷がしては居るが、要するに小松原氏は循吏であつて、大した事を成し得樣とは思はれぬ、差當り學制の上に大改良を加へて衆目を新にするといふ樣な事は出來相にもない、といつても必ずしも文相として不適任といふのではない、從來の諸氏に比較

して劣るとも言はぬ、否、前文相の牧野氏等よりは優つて居ろうと思ふ、小松原氏は眞面目である勉强家であるだけに、常に何處に居ても何事かを爲さんと心掛けて居る、それ故何事かはやる、決して無爲にして終るの人ではない、只此處に言はんとするのは、故の森有禮氏の如き卓勵風發的の目覺ましい經綸が行はれ相にもないと言ふだけの點だ、小松原氏の材能は只文部に適するものではない、その眞面目で常識に富み、勉强家にして執着力が强いといふ處からして、如何なる椅子にも凭ろことが出來る、外務とか大藏とかは特別の技能を要するから除くとして、その以外であれば、內務でも遞信でも農商務でも、遣つて遣れぬことは無かろうと思ふ。が何處へ向つてもその才は最上等ではない、同時に最下等でもない、只中等には遣れる人並には遣れるといふ處が氏の天分らしい。先づ私の許し得る範圍はこれ位の處です（談話筆記校閲濟）

△小松原文相

文學博士　建部遯吾

△私はあの人の事をよくは知らぬが、時々の會合から得た印象、あの人の友人などから聞いた事實を綜合して考へて見るに、經歷あり、氣局あり、常識あり、而して機略あり、最もよき意味に於ける政治的材幹を以て敎政のことに當る人物てありはせぬかと想像する。

△あの人が文相の位置に立てからの施設を見るに、其やり方の功拙は論ぜぬとして、大局に通じて居ると云ふ事を感ぜすに居られない。文部省多年の宿題て、何時の文相にも癪の種、病の源とした假名遣問題、あれを第一に片附けて夫れから帝國の敎政に關する問題を着々として實行せんと擬せられたのは實に大局に通じたやり方といはればならぬ。あの人のする事は大抵帝國敎政の要に中つてゐる。例へば議會の始まる前に關係を從へて北國近畿地方を巡視して、いろ／＼觀察もし、又施設もされた事等も甚だよい。之れから先きも種々計畫さるゝ事があらうが、若し万一にも頑固にして狹隘なる新聞記者ありて、其偏見的批評が出るものとするならば、之までの建設的方面のみを見て、文部の事業は稍々事の大なるものに向て、又事の極めて組織的、體系的なる方面に向で未だ命を聽くを得ずなどと焦せるかも知れないが、所謂事の大なるもの、事の組織的、體系的なるものゝ如きは、議會を前に控へての五六ヶ月にはなか／＼出來るものではないから、今にしてかゝる事をいふは全く其の急なる偏見より出づるものといはざるを得ぬ。

△嘗て「內外敎育評論」記者が現文相の職に就かれた時に、文部に對する吾輩の注文を聞きに來たが、要するに適材を適所に置くにありと答へて置いた、適材問題は是れ敎員の養成及待遇の問題にして、適所問題は是れ敎育制度問題に歸着することを述べたが、今記者足下の問に應ずるに當つても其デテールに亘らずして、以上の要旨丈けを申上げておく。此事たるや其關する所極めて廣大に、法制上に於ては政府の全局に亘り、

而して政策上に於ては啻に學校教育のみならず、實に風俗、宗教、美術等一切の敎化事項に亘り、啻に敎化事項のみならず又實に政治、經濟、軍事、外交等にも關聯せる問題であつて、極めて組織的なる、極めて建設的なる、極めて意匠的なる、卓抜なる頭腦を有するにあらずんば能はざる事である。我機略ある、常識ある、材幹ある、而して大局に通ぜらるゝ現文相閣下は此雌伏の時機に於て、一面從來の屬僚を此事業を翼賛し得べく訓練しつゝあらるゝと全時に、又よく此大業を擔當すべき人物を登用すべく、天下の諸方面に向て探索しつゝあらるゝ事であらうと想像する。

△文士招待會とか文藝院問題とかがあるのに「雌伏の時機」といふは變だといふのですか、左様、あればまア、一寸机元の煙草盆を引寄せて一服吸ふた位の處でせうよ。

△小松原文相論

三宅雪嶺

山縣系とて一概に言へぬが、先づ比較的話の種の少い方である。物事に巧者で、惡く言へば老猾で、中々隙を見せぬ、華やかでなく面白くなくても、自分の位置を作り之を守るに長じて居る。小松原氏は其中でも餘り目立たぬのである。牢に這入つて早く名は聞えたが、別段是ぞといふ事がない、低い處から起り、次第に昇進し、遂に大臣になつたのは、所謂成功者の一に數へらるべきであるけれども、此類のものは隨分他にもある。更に好き位置を占め更に勢力を振つたのもある。經歷の順を推せば色々言ふべきことのないでも無いが、その話頭に上るに至つたのは、文部大臣として假名遣を復舊し、又近頃文士を招待したといふが如きことである。假名遣の復舊は、一時人の耳目を惹き、又惹くだけの價値があつたが、これでその問題が決定したので無い、此先如何になるかは文部省中何人も明言し得ぬであらう、只前に文部の方針となつて居たところのものを一變したと言ふので八釜しいのである。八釜しい丈で先きの事は一向分からぬ、數年の後どうなるか知れるものでない。文士招待會は、文士仲間で話となり居る丈で、格別言ふほどの事でない、他に何程かの仕事もあり、學制改正の樣な難問題もあるけれど、今日迄のところ取り出てゝ言ふべきことがない。假名遣問題を始とし、種々斷行する所ありながら、別段敎育家の反抗を招かぬのは巧なりと言はるゝが、其實敎育界に對しては、殆んど何人が局に當つても之を御するの甚だ容易なのである。今の敎育界から反抗を受くるなど、決してあるべきでない、反抗するものがあつても之を抑え付けるに何の困難もない、其一例として敎育評論に揭げられた前文部次官木場氏の言を引かう、「有爲の人が自然に敎育界の爲に盡力するを好まぬ風があるのは事實である」「敎育界が人物の缺乏を感ずるは餘儀なき次第である」「社會の事に迂遠であつて、常識を缺くが如き感を一般の人に與へて居る事も否定が出來ぬ、即ち社會の大部分は敎育者をば腐儒の如く村學究の如く見て居るから、社會に

勢力を占めることが自から六かしい譯である」。「教育界の人は學問の方に隨分勉めて居り、博識多才と言へるだらうが、人間を研究するといふ事に至つては、他の社會の人に比して數等劣れりと言へる」。「世の中を押し切つて渉り、人間を取扱ふて社會に勢力を得んとするには、遺憾の點少からざる樣である」と言つて居るし、前高等師範學校長伊澤氏の談にも、「鐵口訓令を廢した、が情勢といふものは恐ろしいもので、不相變恐圖々々して居つて、其間には文部省のすることなら何でも從ふとなつた、此ういふ風に教育社會の不振はその原因が遠い所にある」、「師範生は大抵卑怯で生氣が無いものになる。それは教授法とか訓練法とか八釜しく、殊に近年は形式上の事ばかりで教育の精神の事は一向に言はない、根本に立ち入らない、斯かる人から選んで高師生が振はないのは理がある、形式的の事ばかり教はつた此等の人から議論の有り樣がない、そんな事を文部省から訓令しても駄目である」とある。此樣な調子で教育界が靜であるとも、大臣の遣り方が巧だとか巧でないとか言ひ樣が無いではないか、靜だからそれで宜いとして過ぎ行けばそれで事が濟むものであるか、却つて斯ゝる情風を刷新するが如きことあつて然るべきであるまいか、何處の學校でも情弊の無い所はない、擧げ來れば數へ切れぬのであるがそれに對してこれ迄何一つ着手したといふ事を聞かぬ、宮内省管轄の學習院では、乃木大將を院長として刷新に從事した、下田氏をして辭職するの已むなきに至らしめた。元より輕々しく職員を變更し一般に不安の念を抱かしめるは宜しくない、安心して職務に從事するやうにせればならぬ、さりとて無能のもの非行のものを何時迄も置かなければならぬといふこともない。然るに情弊の明かなるにも拘らず少しも手を下す所なく、只平穩なるが故に可なりと見るのは結構な事とは言はれぬ、岡田氏は乃木大將の下に下田氏を放逐したもの、文部次官として曾て斯かる事を敢てし得ぬのは何によるとするか、略ぼ推察し得るで無いか、小松原氏は新聞の經驗もあり、文筆の事は自ら任じて居るとの噂であるが、新聞の手心を知りながら、教科書編纂委員、而かも修身の委員で家庭の紊亂の明かに知れ亘つて居るものに氣付かぬことがあるか、他にもまだ頗る如何はしいものがある、或は一々洗ひ立てすれば際限なく、普通の官吏にも免がれぬといふものあらうが、教育に關しては今少し心すべきでは無からうか、小松原氏は文部大臣となつて、假名遣復舊といふが如きで世の注意を惹いたが、實は大臣として是ぞと敬服すべきことを認ぬのである。併し尚ほ待つことあるので、此先大に爲すの意があるか知れぬ、が今後の事は今後の事實に徴するの外ない、しかし小松原氏の文部大臣となつたのは、偶ま役割に振り當てられたので、必ずしも文部に適任だからといふので無からう、尤も以前にも色々の文部大臣があつて、小松原氏はその中で劣等とはいへぬ、吏務に老練で下らぬ事に揚足を取られぬといふことは確にいへる。とはいへ文部大臣が適任か、他省の大臣たるが適任か、若し氏をして一層力を養ふ所あらしめたならば、内務大臣といふ所に材能が發揮せられさうである、それが氏の生涯における絕頂で、カルミネーチング・ポイントであるかも知れぬ、今の地で頗

當に進めば、先づその邊に到るべきものだとする、けれども果して然るを得るか、文部大臣でも奮發次第で尙ほ大に爲すあるに足り、以て明治史を輝かすことを得べきであるが、之を敢てするの念ありとも見えぬのは聊か慊むべき事でなからうか。文部大臣として別段價値あることもなく、轉じて他省に大臣として亦別段價値あることが無ければ、いくら大臣となつても遠からず忘れられて仕舞ふに極つて居る、大臣の名ありて今現に忘れられて居るもの幾人といふことを知らぬ、氏も動もすれば其の中に入るの恐れがある。忘れられても何でもないと言へば其れ迄だが、さすれば位階も勳等も何でもない譯である、氏は之を構はぬ程の仙人とも思はれぬ、けれども事は只奮發次第である、思ひ切つてさへすれば必ず大に効果の見るべきものがあらう。假名遣さへ斷行が賞められるから、もつと立派なる事なら尙更らである。或は他の省に轉じ遂に內務大臣となる樣な事も有らうが、これは豫め必すべきでない、事によれば大臣職が今回で終りと爲らうとも限らぬ、すれば愈よ奮發して事に當るべきである、如何に山縣系はナミを旨とするにしても、眞逆小松原氏は只文部大臣といふ肩書を得て、それで一生の能事了るとすべきもので無からう、此先如何なるかを見たいと思つて居る。(談話筆記校閲濟)

△小松原文相に對する希望

男爵 辻新次

小松原文相は偏頗のない、公平な人で、文部省にとつては惡るい方でなからうと思ふ。只教育事務即ち學政といふ事について經驗があるかといへば、さういふ方には餘り　らない人であるから、よく從來からの關係等も取調べてやつて貰はねばならぬ。教育の上についてはずつと前から唱導せられてゐた學政の改革、これはまだ解決せられて居らぬから、之に向て充分愼密なる考慮を拂はれんことを希望するが、差當つて私の希望する所は、普通教育基金の塡補を是非斷行して貰ひたい事である。即ち二十七八年の日清戰役の時の償金の中から一千萬圓を普通教育の基金として、其利子の五十萬圓を府縣教育の補助獎勵として分配されてゐた。これは獨り教育者のみならず、一般國民の長い間の希望を容れた結果であつた。處が三十七八年の日露戰役の時に此基金を他に融通された。國家多難の時であるから之れは止むを得ぬ事である。がもう今日となつては之を元へ戾すことを政府が勸めなければならぬ。然るにそれが今日まではまだやつて居らぬ。今日は此教育基金の塡補案が貴衆兩院にも出て居る。若し今急に塡補することが出來なければ五十萬の利子丈けを來年度から出して貰ふ。といふ事になつて居る。これは一般國民の希望としても最な事と思ふ、これは文相が一つ大奮發をして是非共通過させる

又今一つの希望は一昨年も貴衆兩院に出た問題であるが、商業教育に關する大學の機關を備へればならぬといふ事である。これは一口いへば分ることである。今日の歐米諸國が商業教育に力を入れて居ることは非常なものである。日本は昔から商業の方は他國に劣つてゐる。だから日本こそ最も商業教育に向て力を入れなければならぬ譯である。然るに工科大學あり、農科大學あつて、而して商業大學なし。これは教育の大缺點と思ふ。これは一つ是非共文相の盡力を以て商業教育に對する大學の設立をやつて貰はればならぬ。此二つとも恐らくは文相の取調べ中のものて必ず實行される事だらうとは思ふが、兎に角私の希望丈けを述べて置く。

今の大臣はなか／＼よく人の說を聽き、人の說を容れる人て、又公平な人であるし、又學問も廣く亘て偏頗のない人て、文相としては決してわるくない人と信じて居る。先づこんなお話て御免を蒙る。

向軍次氏の「小松原文相論」は原稿延着の爲め止むを得ず次號に掲ぐることゝなせり

頁數超過の爲め本號には「海內」の一欄を省けり讀者之を諒せよ

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文字が上手に書ける程愉快なものはあるまい

悪筆と能書の人

とは其身一生に及ぼす損徳は如何程大なりや本會獨特の特許速成通信教授方法にて練習すれば短日にて頗る上達することは全く機械的なることは今日迄の成績に依て証明して居る

顧問 伯爵東久世通禧閣下 ◎楷行草三體及書簡文（細字とも）六ケ月卒業

書者 文部省習字検定試験委員 高等商業學校習字教授 稲川雲谿先生及玉木愛石先生外講師大家數名

◎女子部書者 小野鵞堂先生 草行假名 書簡文及 和歌等 六ケ月卒業

見本 詳細會則無料進呈

東京本郷森川町一 電話下谷三〇一壹

帝國習字速成學會

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

上人がとうでられてては證如上人（光教）の自筆にかゝる座右日記なり、見ずや、といはるゝまゝに、まづそが中なる一卷をうけて、ひらきみしに、そのはじめの程に、ふと目にとまりたるは、左の一條なり。

天文十八年正月

二十日従二禁裏一以二女房奉書一三十六人家集令二拜領一、門跡繼乘へ以二御書一被二仰越一候、僧正事來二日以前御申沙汰有度之由被二仰一候。

天文は、後奈良天皇の御代なり、これなり〳〵、此の時拜領の御品こそ、この三十六人家集なりけれ、六十餘卷の日記かたはしより見もてゆかば、數日を費すべきを、たま〳〵何心なくひらきみつるその一卷の初にしも、この事を見いでたるは、まづ不思議の緣なるに、明如上人が、その事ともなしに、見せたまひし日記の中に、この事のまさしく記されてありしは、全く本書の世に出づる時到來せるにて、證如上人のみたまの、暗に示したまへるわざにこそ、とかしこくおぼえたりき（中略）やがて上人より本書を借受けて、東京にたづさへかへり、ひろくその道の博士等にも見せて、その說をもとめしに、誰も未だ見聞せざる珍書なり、貴物なりとて、ひたすらおどろきたふとむばかりなりけり、（中略）本書はかくの如く、後奈良天皇恩賜の由緒貴き平安朝の舊物にて、世に傳へたる三十六人家集中の最古最良の證本たるのみならず、その筆者は前に記せる如く、**本朝三蹟**とたゝへられたる能書たちの筆もまじり、その料紙はた世にたぐひを見ざる結構にて、**藤原氏全盛時代の美術**の粹を鍾めたる物なれば、美術家の參考品としても、無比の**重寶**たるものなり（本書中の一片にして、たま〳〵世に傳はれるは、千金の價値あり、然るに、後西院天皇の返させたまひしより後、二百餘年の間塵埃のそこに埋もれて、しかも蠹蝕のうれひなく、今日に至れりとは、おもへども〳〵不思議の至ならずや、おのれはからずも、これを發見して、広く世に紹介することを得しは、實におのれが一生のさいはひにて、うれしともうれしきことのきはみになん。本書一たび世にあらはれて、古筆家の從來の鑑定を一變せしめたること、又本書の料紙の下繪その切り繼、破り繼、重ね繼などの製によりて、美術家の意匠を啓發せしめたる力の頗る大なることなどは、既に洽く世に知られたれば、今又いはず。又おもふに、本書のかくの如く貴重なること、もしはやく世に知られてありしならんには、かの戰亂の時代などに、よからぬものどもありて、いかにもてはふらかしけんも、はかられざるを、なか〳〵に絶えて知るものなかりしは、今日まで滿足に傳はれるもとゐなりけんかし、とにもかくにも**天下の至寶**なれば、**神佛の加護**ありしなるべし（中略）又本書は、もと御堂關白道長公の意匠になりて、上東門院の御遺物ならん、と紫式部の日記によりて、おのれが思ひよれることゞもは、坂ぬしの序文にもいはれたれば、もらしつ、さてこの**寫眞版**は、故明如上人世にいまそかりしころ、本書を見ることあたはざる人にも、ひろく見せ、又おのれらが**手習**の本にもせまほしとて、おのれせちに上人にこひきこえて、一帖毎のうちより、一葉二葉あるは五六葉までづゝをえりいでて寫しとり、かくはものしつるなりけり。

發賣所　婦人社

東京市本郷區西片町十番地はノ十四

電話下谷九百十九番

振替口座東京卅四番

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新着案内

AUS NATUR UND GEISTESWELT. Je .63 sen

Agrens, W.—Mathematische Spiel..

Blau, K.—Das Automobil..

Fried, A. H.—Die moderne Friedensbewegung..

Giservius, P.—Werden und Vergehen d. Pflanzen..

Kreibig, J. K.—Die fühf Sinne des Menschen ....

Kuypers, F.—Volksschule und Lehrerbildung ....

Maier, G.—Soziale Bewegungen ....

Möller, K.—Deutsches Ringen nach Kraft und Schönheit ......

Schirmacher, Dr. K.—Die moderne Frauenbewegung ....

Schubring, Dr. P.—Rembrandt ....

Tews, J.—Modern Erziehung in Haus und Schule. ....

Thiess, K.—Deutsche Schiffahrt und Schiffahrtspolitik der Gegenwart. ....

Thurn, H.—Die Funkentelegraphie ....

Hensel, P.—Rousseau. ....

Janson, O.—Meeresforschung und Meeresleben..

Heilborn, A.—Die deutschen Kolonien (Land und Leute) ......

Knabe, K.—Geschichte des deutschen Schulwesens ....

Kautzsch, R.—Die deutsche Illustration..

Flügel, O.—Herbarts. Lehren und Leben..

Haushofer, M.—Bevölkerungslehre..

Eckstein, K.—Der Kampf zwischen Mensch und Tier..

Kohler, J.—Moderne Rechtsprobleme..

Franz, J.—Der Mond. ....

Goldschmidt, R.—Die Tierwelt des Mikroskops (die Urtiere)...

Focke, R., H. Hermelink und andern.—Buchgewerbe und die Kultur ....

Pabst, A.—Die Knabenhandarbeit..

Verworn, M.—Die Mechanik des Geisteslebens. ....

Wahrmund, L.—Ehe und Eherecht..

Weise, O.—Sie deutschen Bolksstämme und Landschaften.......

Crantz, P.—Arithmetik und Algebra. Bd. I. ....

Wieler, A.—Kaffee, Tee, Kakao ....

Voges, E.—Der Obstbau ....

Rietsch, H.—Die Grundlagen der Tonkunst..

京都支店 郵便振替貯金口座 大阪一七三番

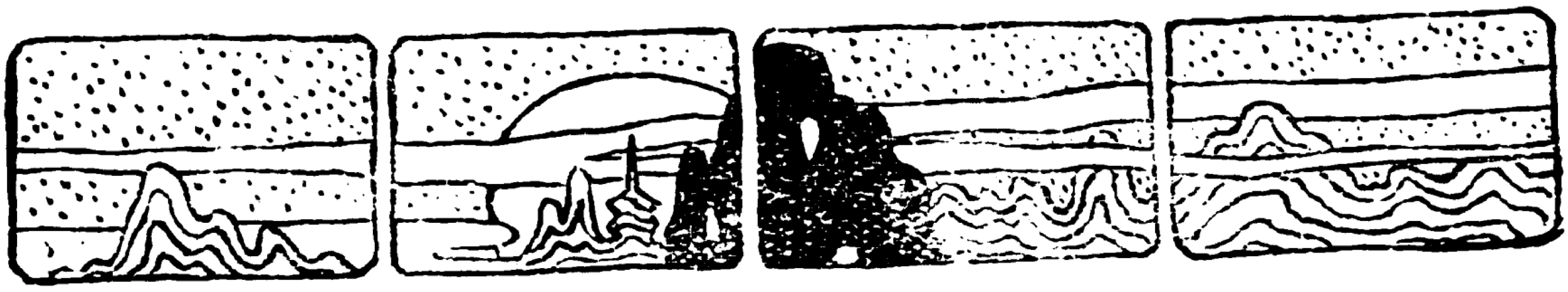
東京●大阪●京都

丸善株式會社

東京本社貯金口座東京五番

大阪支店 郵便振替貯金口座 大阪七四番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



ある女の手紙

水野葉舟

第一

お別れ申候てより、日々淋しく過し居り候ところ、只今は、はからずも御手紙いたゞき、誠に面白く、御なつかしく拝見致し候。又、御兄上様を初め皆様御無事の由御目出度く存じ候。私方にても母の外皆事なく過し居り候まゝ、他事ながら御安心下され度く候。

さて、御兄上様にはこの夏は、目黒の御別荘において遊され候由にて、お庭も廣く、さま〴〵の美しき花咲きみだれ候由、いろ〳〵想像いたしさぞお樂しみの事と思ひ候。又、その花を下され候よし有難くお待ち申し居り候。又姉上には御手紙の中の、英文にて御書きなされしを讀みかねて困り居り、誠に笑止の事に御座候。

此頃は御兄上様おいて遊されぬ故、日々いぢめられ居り、今更こひしく思ひ候。庭の大

梔山も、姉上の秘藏のダリヤもよく咲き居り候間、御送り申し度く候へども、一輪折り候とも、お小言を受け候間、おゆし下され度く候。

あまり長き文にて、實に下手に御座候へば、誰れにも御見せ下さるまじく候やう、くれぐれも願ひ上げ候。何とぞ幾度も御たよりあらん事を願ひ上げ候かしこ

七月一日夜　　　　澪子

おなつかしき

御兄上様御許に

二白

私は日記は書き次第差上げます。姉さまもおしげさんも、明日物理と外國地理の試驗がありますから、御返事を上げやうと思ひましたが、試驗の方が心配ですからやめまして、すみ次第必ず差上げると申して居りました。さよなら。

これをきつと誰にも見せてはいけませんよ。その爲めにチャント書いてありますよ。

私達は明日から試驗です。今二人て兄さんは早くから遊へて羨しいと、話し合つて居ます。

澪ちやんたらね、兄さんに上げる手紙を、如何しても私達に見せてくれないのよ。憎らしいわ。だから私、おしげさんと相談して今に澪ちやんをいぢめてやらうって言ってますの。兄さんも、あんまり澪ちやんばっかり可愛がると承知しなくってよ。さよなら

七月一日　　しげ子

秋子

澪ちやんの大好きな

兄上さま

この手　、急いだから鉛筆て書いてごめんなさいね。私達も澪ちやんに、この手紙を見せてやらなかつたのですから、澪ちやんは自分の惡口を書かれて居ても、知らないんですの。

二

只今は、七月十五日朝七時十五分過ぎと言ふ時に候。今日も空が曇り、雨らしくうつとしき日に候。昨日は、御こまやかなお手紙有難く存じ候。兄さんには平生の御勉強のおしるしにて、お立派なる御成績にて大學に進み遊ばされ、尚これよりは華々しき御生涯に入らせたまふ御よし、實に御目出度く御祝ひ申し上げ候。

御兩親樣の御喜びいかばかりか推し上げ候。伯父樣を始め、この下村の伯母樣、祖母樣、皆樣して、

昨夜も兄上樣の事のみお噂申し上げ候。私も陰ながら、世の譽を一身に荷ひたまへるやうにて、我身の事のやうに存ぜられ、實に嬉しく存じ候。

夫につけても思ひ出され候は、亡せたる兄の事に候。もしこの世に生き永らへ居り候はんには、一生の中にはこのやうの喜ばしき事もある事と、兄の事を思ひ出され候。

また瀨川の貞夫樣とか仰せらるゝ御方も、此度永き眠りにつかせ給ひしよし、兄さんとは御同年に居らせられ候ひしとか。これより面白の世に出で給はんとする時に至りて、はかなくならせ給ひしよし。實に人の命程はかなきは無しと深く思ひ申し候。それにつけても兄さんお獨りが、お幸福の御身の上に候へば御身體をお大切に遊ばされ度く、日頃御病身の事故、尙更祈りまゐらせ候。

もはや、かゝる事はやめに致し候。これよりは面白い事を書かばやと存じ候。

兄さんは大學に入つた故、この夏は旅行をすると仰せあり候が、御羨しく存じ上げ候。私も休暇になりてからは、何もする事も無く茫然と暮し居り候。今年始めて兩親の膝元を離れ來りし故かとも思ひ候へど、離れ島に居るやうにも思はれ候。實に呑氣に何もする事は無く暮し居り候へども、何處か悲しいやうな心持も致され候。

雨が降りさうだと書いて居るはじから、もう降り出し候。實にいやな天氣に候。眞白な大輪の山梔の花が美しく雨に打たれ居り候。今其一ひらをこの手紙に入れて差し上げ候。捨てしまはずに何かの書の中にでもお入れ置き下され度く候。

左樣なれば、これにて筆を止め申し候。あとは、又お目にかゝりて。毎日毎日ぶら〳〵致し居り候間、何卒お遊びにおいて下され度く候。

うちの伯母樣はもう大概よろしく成り遊ばされ候。此兩三日は吐きも遊ばされず候。

今日は、お話とも文章ともつかぬ手紙を書き候、何卒御笑ひ下さるまじくやう願ひ上げ候。この手紙着きましたらば、御返事下され度く候。かしこ

七月十日　しげ子

御兄上樣御許

この手紙を人には見せたまふな。

一寸返事まで申します。私は文を作るのが下手ですから、お話で書きますよ。

昨夜は久しぶりでお手紙を戴きまして、誠に有難う御坐います。兄さんは平常の御成績があらはれて、非常な好成績で大學に御入學がお出來になつて、私の家で皆でお祝ひして居ります。

これに反して瀬川の貞雄樣は御永眠なされましたよし、誠にお氣の毒の事と存じます。「智も恃む可からず、勇も務る可らず」って全くてすのね。

私が休暇になりまして幸福（しやわせ）たらうと、あなたは仰られましたが、幸福（しやわせ）も〳〵、大幸福（おほしやわせ）には違ひありま

せんが、何だかあんまりのん氣になつて、懶惰になつてしまひます。

さうしてね、私まだ字引を買ひませんのよ。だから休暇になってから一度も、英語の書を開きませんおしげさんも、お部屋の椽側に横坐りをして始終大岡政談ばかり讀んで居て、何一つ學校の書は開きません。これこそ本當になまけものの隊長だわね。

あゝ、さう／＼あなたの處の御伯母樣は御病氣のよし、實に驚き御案じ申ます。祖母からも、母からも、くれ／＼よろしくと申しました。母の病氣も別に病氣と言ふのでも無いので、たゞ吐氣がするだけだったさうです。御安心下さい。　匆々。

七月十日　あき

清之助樣御許に

もう／＼／＼／＼きっと、皆さんに見せては、いやあよ。あなた一人よ。願ひます。

それから澪ちゃんが、お手紙の來るのを待って居てよ。さよなら。又今度ね。遊びにいらっしゃいな。

それから初めの方、おしげさんが私のを見て方々をとって書いたのよ。同じやうでせう。だから私がおしげさんのを見たと思つてはいやよ。

三

兄さん、これからは言文一致て書きますから其つもりて見て下さい。

兄さん昨晩はお手紙を誠に有難うお座いました。丁度、私が何處からか手紙が來て居ないかと思つて郵便箱を開けに行ったらば入つて居ました。すぐ伯父樣にお目に懸けて渡して戴いたのよ。其時はもう秋さんも澪ちやんも寢てしまって居て、私獨りだったので、尙更なつかしく幾度も繰り返して拜見しました。丁度その時は十時頃でありました。

兄さんが宅にお歸りになつてからは非常に寂しくつまらなくなりました。私が兩親の處を離れて、この下村に來てから、考へて見るともう四月になるわね。早いものね。私はこの間を夢のやうにして過して來てしまひました。

今兄さんのお手紙を讀んで居ますと、急に夢のやうに暮したと、思はれ出して來ました。何だかこの家は薄暗い陰氣な家だわね。私には別に何と言ふ事があるんでは無いけれど、何だか皆が陰氣な人達のやうに思へるわ。兄さんはさうは思はなくって。そしていやに窮屈な處があるわね。私、何處か田舍に行きたいわ。そして時々した田舍に歸つて行つて自由自在に遊んで見たいわ。

兄さんが此間の日曜の時にも來るって言ふから待って居たのよ。一日待ちぼうけしてしまつたわ。そうして、あんまり夜になって淋しかったから、私達のお部屋に兄さんのテーブルを持つて來て、秋さんと二人でドミノをして遊んだの。兄さんが居たらば嘸面白かったらうと思ってよ。殘念でたまらなかつたの。この次の日曜日にはきっと來らつしやいね。

それから、兄さんがこの下村さんに居た時は實に面白かったわね。それだから兄さんが居なくなって

から、淋しくって堪らないの。

私、もう東京が嫌になりました。又兩親の家に歸り度くつてたまらないの。お手紙こんだ下さる時には皆に別々に下さいね。

兄さんは私を妹と思つて下さるつて、いつか言つたわね。私それだから、何もかも思ふ事を書いたのです。私には兄があったのですけれども、もう死んでしまったから、誰にだつて自分の心の中を話す人が無いのです。秋さんにでも話せないのよ。秋さんは何だか人の心を汲んではくれない人のやうですもの。私あの大きな目と、鼻の先が尖つて居るやうな處が嫌ひよ。何だか自分が獨りでエラがって居るやうで、そして、ここの家の兒は皆言葉つきが伯母さんに似て居るのね。ヅケヾヾと早口で何でも言ってしまふのね。

私、今夜はほんとに一人っきりで居るやうです。兄さんは休暇になったらば遊びに行くって約束して置いてちつとも來てくれないのね。

さよなら

七月廿日　　しげ子

兄上様　お許に

この手紙、誰れにも見せてはいやよ。秋さんには倘ほ。話してはいやよ。

兄さん、姉さまもお話て書くって言ひますから私もお話にします。

私、この頃は毎日樂しく遊んて居ます。今日は新ちやんと、靜枝ちやんと三人てお庭にお池をこさいました。それに水を一杯ためて、昨夜お緣日て買って來ためだかを入れやりましたら、水が濁って居たのて、だん〳〵弱つてしまひました。新ちやんたら、兄さんの口眞似をして、仕方が無いよつて言ふんてすのよ。

この頃私は、姉さまとはあんまり遊びませんの。兄さんいらっしいな……

七月廿六日　澪子

御兄上樣へ

今日はね。お手紙が來たてせう。それて三人して御返事を上るんだってね。私も書きましたさよなら

清之助さん、私はね、此頃おしげさんと二人て、お父さんにジャーマン、コースを習ふ事にしました毎日夕方の御膳をしまつてから敎へて戴く事にしてあります。獨乙語の字は何だか妙な恰好て、なかなか覺えられないで困ります。それて、おしげさんもこぼして居ます。だけれども、私は如何かして學問をして、立派な女史つて言はれる人にならうと思ふのです。一生懸命に苦學する積りです。

學問は獨乙が一番進步して居ると言ふ事ですから、私は樂しみてす。おしげさんはそれ程學問には熱心では無い人てすよ。毎日大低は小說を讀む事をばかり考へて居るやうてす。

私の家では、今年は避暑に行きません。母樣が汽車になんぞ乘って、あんまり身體を動かしては惡いとか言ふ事ですから、誰も行かないのです。お父樣はその代りに、勉强をするとおつしやつて、それで私達も獨乙語を敎はる事になつたのです。私はおしげさんがもっと學問に熱心な人だと、非常に嬉しいのですけれど、しかし、學問は凡ての人にとつて一番大切なものですから、おしげさんにももっと熱心になるやうに、勸めやうと思って居ます。さうすると、私は大變いゝ友達が出來てどの位爲めになるか分りません。

私は理科を學び度いと思つて居ます。日本の女子には理學を學ぶ人などは殆んど無いと言ふ事を聞きましたが、歎かはしい事です。それて、私は如何かして理學を學んて名を擧げ度いと思ひます。

私は淸之助さんを心底から信じて居ますから、思つて居る事をお話するのです。これは私の秘密てすから、如何か誰にも話さずに下さい。

英文もだん／＼讀めるやうに成つて來て、私は嬉しくってたまりません。さよなら

七月廿六日　　秋子

淸之助樣御許に

兄さん、ちつとも遊びに來ないのね。私達皆して待つて居るのよ。

此間から伯父さんに獨乙語を敎へて戴く事になつたの、秋さんはそれは熱心よ。

この頃は愈々暑くなつたのですが、私達は一層うつとしい樣な氣がして暮して居るの。兄さんは避暑に行く用意をして居るなんて羨ましいわ。羨しいより憎らしいわ、つて、今も秋さんと二人て話したの。

伯母樣は何かなしに、ぶら〱してらつしやるのよ。それに祖母樣(おばあさま)も此頃は腰が痛いつて、一寸外にも出られないのですから、私達も大低家に居て、小說でも讀む位なの。伯父樣は伯母樣の加減が惡いから、この夏は家に籠つて勉强するんだつて、毎日朝からお書齋に籠つて、書ばかり讀んでらつしやるの。先月頃から腮にも髯を生すのだつて、だから顏ぢう、ぼう〱させて、來てごらんなさいな。それは驚いてよ。

それに、此頃は雨ばかり降るので、何だか、家の中までもじめ〱して、私、何にもするのが嫌(いや)になつてしまふわ。

それから、兄さん何にか雜誌でもいゝから送つて下さいな。小說なら尙ほいゝけれど。

それからね。今日の秋さんの手紙には大變な事が書いてあるでせう。あれは昨晩、私と種々な話をして居ると、私にもつと勉强をしろつて言ふの、私、それよりか小說を讀んだ方が面白いわつて言ふと、秋さんは私はこれから勉强して、何々女史つて言はれるやうな人になるんだつて言ふのです。それに私

が學者になんぞなつてもつまらないと言つたので、怒つて、ぢや清之助さんに出す手紙に書くつて言ふて居たわ。秋さんは夫をきつと書いたでせう。

兄さんの目黒の御別莊つてそんなにいゝ處？……私、行つて見たいわ。伯母樣がお加減がいゝと、澪ちやんと三人して行くんだけどつてね。これも話し合つたの。

兄さん手紙だけでなく、遊びにいらつしやいよ。ね、皆で待つて居るのよ。

ほんとにこの頃のお天氣はうつとしいのね。さよなら。

七月廿六日　　しけ子

御兄上樣　お許に

五

清之助さん、私が自分の名を隱して、人の名を借りて、この手紙を出したと言ふのは外でもありません。清之助さんに出すと言ふと家でいろ〱の事を言つてうるさいから、失禮ですが名を改へたのですよ。それで私が手紙を上げた事を、決してあなたの伯母樣にも、伯父樣にも、御兄弟の方にも見せてはいけませんよ。夫のみは堅くお約束を致します。けれどあなたは約束を破るやうな事はなさらない方と、私は堅く信じて居ります。これから、お話を致しませう。

さて、此頃は大變に時候が惡いから、蛇度御病氣で家にいらつしやらない事と、家では皆信じて居ま

す。如何なさいましたのですか。

私嬉しい事がありますの。それを貴方(あなた)に話してエバらうと思つて、樂しみにして日々待つて居るのにいらつしやらないのですもの。

私、ジャーマン、コースを随分覺えてよ。だけど、なさけ無いもので、此頃目が惡くなつてしまひました。折角この暑中休暇にすつかり獨乙語と英語を覺えて置く積りだつたのが、何にも出來ないのよ。何もかも禁じられて、たつた習字だけを許されて居るの。だから、憐でせう?。

清之助さん、宅(うち)にはちつとも來ないのね。私、病氣と思つて居るのよ。今もこの手紙も書くのを見つかると大變叱られるから、清之助さんのお部屋に隱れて、目を洗ふ積りて、清之助さんの書棚(しよだな)の上で書いたのよ。だからその積りて分(わか)りにくい處は察して讀んで頂戴。

今、讀むと言ふ字の半分を書いてたら澪(みを)ちやんが來たから、急に隱すやら大騷ぎしたのよ。

だから、病氣て無かつたらば、すぐ返事を下さい。そうしてその返事はおしげさんののやうにして頂戴ね。私が此樣(こんな)になつたのを憐れだと思つてね。

それから私、黑眼鏡をかけて居るのよ。すると、清之助さんの二代目のハイカラだの何だのつて、皆てからかふのよ。もう、これて止(よ)します、めつかるから。

てはさよなら。この手紙はもう〳〵きつと人に見せてはいやよ。讀んだらすぐ破いて頂戴。これは心の底から願てすよ。きつとよ。

八月五日　　秋子

清之助様

兄さん、此手紙は何にも見せてはいやよ。これは秋さんと二人で誰にも知らせずに、秘に書いたのですから、人に見せてはいやですよ。

そして、秋さんはトラホームで、何にも讀む事も書く事も禁じられて居るのだけれど、兄さんが來もしないし、手紙も下さらないから、御病氣では無いかと思ふて、それで、書いては叱られるから、隠れて書いたのです。昨夜も、祖母さんと、伯母さんとて、清之助さんは如何おしだつたらう、病氣では無いのかなんて言つてらしつてよ。それで、昨晩秋さんと寢床の中で、ほんとに兄さんは如何したのだらうつて話したの。

秋さんが目が悪いのを誰にも言はずにね。いゝ事?。言ふと兄さんに手紙を上げた事がわかると叱られるから。

この手紙は澪ちやんにも知らせないで、ほんとに昨晩寢てから秋さんと約束して、秋さんは手紙なんか書いてはいけないんでせう?。それて今朝起ると、兄さんのお部屋にこつそりと入つて書いたのですその心持を察して必ず手紙を下さい。何時も秋さんと兄さんは如何したのでせうと言つてるのよ。こん

な嫌な時候だから、又眞青な顔をして病氣なのでは無いかつて言つてるのよ。
兄さん、いつかの手紙にあつた、小田原への避暑は何時から往らつしやるの。それまでには必ず一度遊びに來て頂戴。私、待つて居てよ。

しげ子

六

清之助さん。あのね、私今日程嬉しかつた事はありません。それ故すぐに御返事を出します。
私は今日はね、夕方平生のやうにお湯に入つてから、お坐敷の椽側で新ちやんと二人でお庭を見て居ますとね、千代やがお嬢さんお手紙つて持つて來ました。見ると兄さんので、中に美しい書が澤山入つて居ました。私嬉しくつて、新ちやんに見せたらば、僕に一枚くれつて言ひ出して、如何しても聞かないのです。二人であんまりやかましく言つて居たので終に二人とも母様に叱られてしまひました。
兄さんはもう小田原の方へお出になりましたさうで、嘸、お樂しみの事でせう。海は波が高いのですつて?、その代りに景色が廣々として居るでせう。私もそんな處に行つて見たいと思ひます。
私は毎日雜誌を讀んで樂んで居ます。ですが毎日あんまり家にばかり居るのでつまりません。おしげさんなどは大きな身體をお部屋の椽側にどたりと倦るさうに横にして小説ばかり讀んで居ます。おしげさんつて人は何だか私だん／＼嫌ひになります。私達には何にもして呉ないで、獨て自分の遊ぶ事ばかり

して居るのです。我儘でいやな人です。母様にさう言つたらば、母様は獨娘だからだつて仰いました。

母様の御病氣は大層よくなりました。けれど今年は皆で禁慾をして、家で勉強をするのだつてお父様が仰やるので、私達は何處にも行きません。

この頃は暑いので庭になんか出ず、椅子に腰を掛けたり。又椽側に出て遊んで居ます。私は何時か「少女」に作文を出します。その爲めに毎日稽古をして居るのです。私は學問の中で作文と習字とが一番好きです。いつも朝は習字をして居ます。

兄さんは其處で繪かきさんと一所に居らつしやるんですつてね。今日の繪はその方がお書きになつたのですか。何て奇麗なのでせう。又書いて貰つて下さいな。

それから、先日新ちやんがお友達の家から、小鳥を貰つて來たので、毎日大切にして居ましたらば、ついこの間、よその猫に傷をつけられて死にましたから、可愛さうでたまりません。

あまり長くなるから、これで御免なさい。さよなら。何卒、清之助さんと一所にお居の繪かきさんによろしくつて言つて下さい。アラマア、私とした事がオホヽヽヽヽ

八月十四日　浴子

兄さんへまゐる

七

兄さん度々お手紙を有難う。今度の手紙は不足を取られてよ。祖母さんがまあいやだね。と言つていらしつたわ。

祖母さんが、この暑いのに老人が東京に居るのに、お留守番をして居て、嘸淋しいでせうと言つても來ないで、娘達にばかり、何だかつまらない事を面白さうに書いてよこすつて、清之助さんも余程いゝ氣なもんだつて言つてらしつてよ。

兄さんは朝から晩まで、海岸で遊ぶのでせう。私達も此度一日伯父樣に連れられて鎌倉に行つたけれど、このお手紙を讀むと、又兄さんが羨しくなつたわ。來年は父樣か伯父樣かに連れて行つて載くわ。それが今からの樂しみよ。兄さんは今現在に、その私の來年の樂しみを實行して居るのね。

私、兄さんの手紙が來る度びに、羨しくつてこんなに暑いのに、こんな薄暗い家で汗を出して居るのが嫌になつてしまふの。此頃は余計にこの家の天井が低くなつたやうだわ。それに秋さんでも濡ちやんでも、何だか妙に淋しいやうな、沈んだ人ね。私こんなでは無いと思つて居たわ。この家の人達は皆痩せて靑白い顏をして居るわね。何故でせう。それに、種々な事をこせ〳〵言ふのですもの……

此間の鎌倉に行つた時にね。それは面白かつてよ。私兄さんの仰せの通り、隨分お轉婆をしてよ。秋さんも、新ちやんも、濡ちやんも水を被つたのよ。新ちやんは泣き出してしまつたわ。

私その兄さんの手紙にある、小田原の桃が食べたいわ。送つて下さいな。待つてるから。

この手紙ね。人に見せるなつて書いてあるけれど、祖母さんに見せてよ。でないと、何だか變だから、

ごめんなさい。

何時歸つて來て？。歸つて來たら又この下村に宿つて學校に行くのでせう。私、その時を待つて居るのよ。さよなら

八月廿日　　しげ子

御兄上様御許に

歸へつて來る時には、如何かお土産をどつさり持つて來て頂戴。

八

一筆申上げ候。度々お手紙を有難く存じ奉り候。返書をとの仰せには候へども、母が度々手紙を差上ぐる事を許しくれず候故、何卒御ゆるし下され度く候。

本日は據なき用事の候まゝ一筆差出し候。そは先月、御許様に差し出し候處の手紙は、母にも妹にも言はずに書きたるものに候間、その事を誰方様にもお話下されぬやう、御許様の御胸に深く秘め置き下され候やう偏に願上げ候。でないと、それがもし母に知れ候ては、私が何か怪しき事にても致し居り候やうにて困り候故、何卒、人にお話下され候はぬやう御願ひ申し上げ候。右取り急ぎ御願ひ申上げ候。

かしこ

八月二十二日　　秋子

清之助様御許に

第二

一

兄さん、久しく手紙を差上げる折がありませんでしたわね。

昨日は久しぶりで遊びにいらしつて、夏からこつちに、初めてお目にかゝつたわね。兄さん昨日は如何思つて?。兄さんは何にも知らないのだから、私、皆敎へてあげるわ。

昨日は變でしたでせう。秋さんでも、澪ちやんまでが、兄さんがお部屋に入つて來ると、つつと立つて外の處に行くのですもの、私、兄さんに氣の毒だつたわ。

本當はね、前に夏中よく兄さんからお手紙が來たわね。あの時にも、祖母様や伯母様が、清之助さんはあんまり馴れ々々しいつて、秋さんに、そんなに返事を出してはいけないと仰つてでした。私もよくさう言はれたけれど、私は干はなかつたの。

するとね、此間よ、何時だつたか忘れたけれど、晩にね、あのお茶の間で晩の御膳がすんだ跡で、皆が話して居ると、祖母様が、此頃清之助さんが來ないねつて、言ひ出したの、すると、伯母様がいゝ案

配だつて仰るのよ。

私嫌だと思つて聞いて居ると、伯母様が、男の癖に舞踏會に行つたりするやうな人はとても見込が無いつて、その話を聞いた時に、私は又家に寄宿されると嫌だと思つて居たのに、先方から他の家に移つてくれたのでほつとしたと仰るの。今度は伯父様が私は初めから清之助さんは嫌だつた。何だか調子が好すぎてね。そして女の子を可愛がりすぎる。私も内々娘達に何かの事が無ければいゝがと思つて居たと言つて、ぢつとあの大きい目で眼鏡越しに私や秋さんの顔を御覧になるの。

私、それでね、其何か起るつて如何な事つて聞くと、すると伯母様が妙な笑ひ方をして、伯父様の顔を一寸見て、おしげさんのやうに親密になる事さつて仰るのよ。私、兄さんと親密にしては惡くつてと聞くと、伯父様が急に此方を向き直つて、私や、秋さんや、澪ちやんに迄、お前達は、これから清之助さんが來ても、成るべく口をきかないやうにしろと仰るでせう。そして、祖母様に私は清之助さんの一體が氣に入らないが、何しろ正木の家には以前、世話になつたのであゝして置いたのですつて、仰つてね、あとは口の中で、如何も思はくが違つた、だから信者で無い人は信用が出來ないと言ひながらお書齋に入つていらしたの。

何故そんな事をおつしやるのでせう。そうして兄さんは舞踏會なんぞに行くの。まあハイカラね。

私には何が何だか、ちつとも分らなくつてよ。そうしてその晩にね、秋さんまでが、私に、もう清之助さんが大嫌になつたつて言ふの。私、何故？、だつて秋さんは此間まで、あんなに清之助さんを大騒

ぎして居たてはないのつて言ふとね、秋さんは、むきになつて、何時私が清之助さんなんぞを大騒ぎして。汚らはしいわつて言ふたわ。すると憎らしいの、落ちやんが傍に居て、子供の癖に、おしげさんは清之助（だつて、呼び捨てにして）が好きなのよ。あれは墮落書生だつて母樣が言つてらしつたわ。その墮落書生の清之助が好きだから、おしげさんも墮落してるのだつて、言ふのですもの。

それから、秋さんは妙に私に他々しくして今迄そんなに仲のよくも無かつた落ちやんとばかり話して居るの。私、何だかつくづく厭になつてよ。この家の人は男の兒まで、小さな眼を光らして、人の爲て居る事をそつと見て居るやうな人ばかりね。

それでね、兄さんが來ても、前のやうにお話が出來ないの。昨日の時に私、兄さんが何も知らないで前のやうに話しやうとするのですもの困つてしまつてよ。

それだから、私、何もかも書いて、兄さんに知らせて上げるわ。ね、だからこの手紙を秋さんなんかに知られないやうにして頂戴よ。でないと大變が起つてよ。

それから、ね兄さん、返事を頂戴な。私、一生懸命で郵便を氣を付けて居るから、表書を少し變へて書いてあれば、大丈夫、氣が付きはしないから。ね、きつとよ、待つて居てよ。さよなら

十月二日　しげ子

兄上樣御許。

兄さんは手紙も下さらないし、來てもくれないのね。來ないのは分つて居るけれど、手紙もくれないのですもの、あんまりだわ。

二

此頃は私は獨ぽつちよ。學校から歸つて來ても何だかぽつねんと机の前に坐つて見るの。だつて、誰れとも話をする事も無いのですもの。話す事が無いよりか、秋さんは、此頃妙に他々しくするの、いやだから私の方でも默つて居てやるんだわ。

この家の人は、如何して斯うなんでせう。何だか人の隱す處を覗つて見てしまはなければ承知が出來ないつて言つた人ばかり集つて居るのね。そして他人を見ると、まるで敵のやうだわ。一寸人が來ても跡はすぐ集つて惡口の評判が初まるの。何しに來たのだらうかとか、如何な着物を着て居たとか、お金も無いくせに始終贅澤な事をして居るから今に困るだらうとか、それが、祖母樣初めだからたまら無いわ。時には伯父樣まで交つて始めるのですもの。それだから、子供達まで、こせ〳〵して皮肉なのだわね。

今日もね、學校の歸り道に、秋さんたら斯うなの。さも何氣無いと言つた調子でね、おしげさんこの頃は清之助さんは如何して居て？、だつて、私、腹が立つたわ。だから知らないわ。家にちつとも來らつしやらないんですもの、知りやうが無いわと言ふと、妙に鼻の先で笑ふの。さうして、おしげさんも清之助さんなんぞと交際するのは止なさいつて言つたわ。私、ちつとも交際なんかしては居ないつて

言ふと、ならいゝけれどだつて、妙に人を馬鹿にして居る言ひ方なんですもの、これがこの家の人の調子だわ。ほんとに伯母さんそつくりよ。

兄さん、だから、私もうこんなこせ／＼した家に居るのが嫌になつてしまつたわ。本當にもう厭き飽きしてよ。こゝの伯母様達は、此頃は物價が高くなつたつて、何だか一寸した事にまで、やかましく言つて居るの。それに子供が多いでせう。一寸した物品があつても五つにも六つにも分けるのですから、皆がけちになつてしまふのよ。新ちやんなんぞも男のくせによく氣が付くのよ。だから、私が一寸した物を買つて來てさへ、それをすぐ皆て、何とかかんとか言ふんですもの。あゝ、もうこんな家、厭き飽きしちまつたわ。

此間だつて斯うなのよ。一體に世の中が世智辛くなると、こんなに細々した事までが目に付いて、けちになるのかしらと思ふのよ。此間の朝ね、學校に出かけに簪にする積りて、庭の隅から菊の花を一輪折つて來てね、お部屋に上つて來ると、其處に秋さんと、澪ちやんとがお荷物を拵へて居たのが、私を見ると、澪ちやんたらいきなりアラ、花盜賊つて斯うなの。私戲言だと思つて居たらば、本氣なのよ。すると、秋さん迄がぶつ／＼言ふのでせう。私、腹が立つたから、その花をいきなりむしつてそこに捨てちやつたわ。一層の事、お庭に咲いて居るのも皆むしり取つてめちや／＼にしてやらうかと思つたの。腹が立つて堪らなかつたの。ほんとにこの家の人は花一つ取つても、大變なのよ。

それから、學校に行く途中も、一言も口をきかないで、ずん／＼歩いて行つたのよ。學校に行つてか

らまで腹が立つて仕樣が無いから、皆に當り散らしたので、皆變な顏をして居たわ。

其くせ私が來た初めには、秋さんなんぞは、おしげさん〳〵つて大騷ぎをして居たのよ。澪ちやんなんかそつち除けて、何ても二人て一所にして居たのに、此頃ては陰に廻つて、二人て、私が我儘育だとか、無遠慮だとか、手前勝手だとか言つて居るんですよ。そうして、二人て始終ひそ〳〵話をして、私は獨り除け者よ。私、だから何時ても人の話して居る處に、何を話してるのつて入つて行つてやるの、すると、澪ちんなんぞが、子供のくせに人を馬鹿にしたやうな目付をして、何だか、私を戲ふやうな、冷すやうな事を言ふの。本當に嫌な人達だわ。

だから、私淋しいわ。兄さん、たまには來てくれたつてよいと思つてよ。一寸でいゝから來て下さいな。私ほんとに獨りぼつちよ。學校の人だつて、心の底から話し合ふ友達はないんだし。

私、つくづく兩親が戀しいわ。來年の夏あたりは兩親とも名古屋に移つて來るらしいから、そうしたらもう、私は早速逃げ出すわ。其に付けても兄さんが羨しい。一人て自由に居られるんですもの。

兄さん、私あんまり腹が立つたから、種々の事を書いてしまつて、如何か叱らずに下さい。そしてこれは誰にも話してはいやよ。さよなら

十月十九日　　　　　　しげ子

御兄上樣。

三

兄さん、お手紙を有難うございました。この手紙は大變運がよくつて、私が門の處に立つて居る時に丁度來たのよ。それで早速拜見しました。

兄さん有難う御座います。今迄幾度兄さんに手紙を上げて、チットモ返事も下さらないし、お目にかゝる事も出來なかつたのでしたが、このお手紙を見て胸が晴々しました。本當に、私を妹と思つて下さいね。ね、お願ひてす。もう、さうちやんと書いてあるわね。私、心でさう思つてよ。これからは何でも話すわ。兄さん、私、もつと我儘を言つてよ。夫はさうだわ。兄妹なのですもの。

私、今日のやうな嬉しい事は無い。

「しげさんは、僕、前から妹と思つて居る。だから、何でも思ふ事はそつくり言つておくれ。僕はしげさんのこの手紙を讀んで、しげさんの今の身の上を考へた。一人子で自由に育つて來たのが、その下村の薄暗い狹つ苦しい籠のやうな處に入れられて、その家の人達から冷めたく、目くぢらを立てゝ萬事に見て居られるのだ……それは本當に氣の毒だ……」つて、私、讀みながら、胸がどき／＼したわ。嬉しくつて、嬉しくつて、兄さん本當に私を妹と思つて下さいね……………

十月廿三日　　しげ子

私の眞の兄樣御許に

兄さん、私、兄さんにお目にかゝり度くなつたわ。………

四

昨晩は本當に不思議でしたわね。兄さんにお別れしてからもう全、三月以上になるんだわ。昨晩はからずお目に懸りました。私、本當に驚いてよ。

でも、秋さんが一所に居たもので、お話が出來なくつて、殘念だわ。私、此間から如何かして、兄さんにお目に懸り度いと思つて居たのよ。

兄さん、干はないわ。入らつしやいな。たまにはこの下村にも來て御覧なさいよ。昨晩もね、秋さんは、兄さんが、「や、秋さん達ぢや無いか。」と言ふたと言つて、此頃は、妙に調子までが變つてしまつたつて、惡く言ふて居てよ。

兄さん、本當にいらつしやいな。待つて居てよ。よくつて、さよなら

十一月二日　しげ子

兄上樣御許

昨晩は、本郷通りまで明日の學校の式に懸けて行くリボンを買ひに行つたの。

五

兄さん、又、ちつともお目に懸らないのね。それに手紙もくれないんですもの、あんまり冷淡だわ。

私、兄さんを本當の兄と信じて、この手紙を上げるのですから、今、私が伺ふ事を聞いてもね、怒つても、笑つてもいやよ。

今日ね、學校でね、作文の時間に此頃親しくなつた田村さんて方が、ノートの紙を破いて、それに斯う書いてよこしたの。「あなたのお話にいつか出た、正木清之助さんて方は、あの有名な木田子爵の嗣子とお友達だつて聞きましたが、それならば美しき戀人を澤山持つてお居での所謂流行兒ではありませんか。若し夫ならば、あなたも其美しい戀とかにやつれはなさりませんか。」だつて、私、何だか馬鹿にされたやうな、擽つたいやうな、悔しいやうな氣がしてよ。

私、何にも知らないのですが、こんな事を書いて兄さんが怒りはなさるまいかと思ふの。兄さん怒つてはいやよ。

だけど、私何だか一人で恥かしいやうな氣がしてよ。戀をするなんて……兄さん、ね、私、此節兄さんの事ばかり思つて居るけれど、そんな大變な事ぢや無いわね。それから歸りに其方に聞いて見たの、すると、田村さんも人から聞いたので（×××大學の人から聞いたのですつて）よくは知らないつて。

この田村さんて良い方よ。學校の成績も全校で一番だし、それに落付いた親切な人よ。私は、まだ交つて日が淺いけれど、もう姉さんのやうな氣がするわ。此間、天長節の日に、一所に歸りながら、上野の森を散歩して、二人で心底から姉妹にならうつて約束をしたの。そして、私、何もかも話してしまつ

たのよ。

兄さん、木田子爵の嗣子つて、如何な人。兄さんのお友達?。私にようくその譯(わけ)を聞かせて頂戴な。

ね、兄さん、すぐよ、すぐ返事を下さいよ。

十一月六日

しげ子

清之助様御許に

六

兄さんは、又ちつとも來てもくれなければ、お手紙もくれないわね。

今日木田子爵の嗣子の事、田村さんにすつかり聞いてよ。

兄さん、あの人達の中に入つてお居(いで)なさるの。私驚いたわ。小說ででもなければ無いやうな事だわね

木田子爵の嗣子つて如何な方。自由戀愛つて隨分大變な事だわね。男女の學生が自由に交際して、そして愛さへあれば、互に戀人になるし、愛が消えれば又戀人でなくなるんでなつてね。そんな團體が本當にあつて?……え?……兄さん。もつと詳しく敎へて頂戴な。

兄さん、ね、私如何かして、是非一度お目に懸り度いと思ふの。關(かま)はしないわ。ここに來て頂戴よ。

そしてせめて兄さんの顏だけでも見たいわ。それにね…………

十一月十日

しげ子

兄上樣

此間は珍らしくおいで下さいまして、誠に嬉しくありました。あのね、あの晩には何故か兄さんが、いらつしやりさうで堪まりませんてしたのよ。あゝ、本當に久し振りてお目に懸りまして、私、倚ほ兄さんがなつかしく思はれ出しました。

何故てせうね、兄さん、兄さんは御存知てせう。敎へて頂戴なね。

それから、昨日も、又思ひ懸けないのにお目に懸りました。兄さん音樂會に行つたの。皆さんて、あの中の人が、其自由戀愛の團體の人てすか。

私羨しかつたわ。私なんか始終籠の鳥て、外に出たくつても決して出してくれないんですもの。そうして、昨晩一所に居らつした中の女の方ね。何て言ふ方なの?、私にも敎へて頂戴な。

此頃は家の人は倚ほひどいのよ。新ちやんが病氣てせう。だからうるさくつて堪らない事よ。此間の晩、兄さんが來て居た時ね、あの時の伯父さんなんて、隨分ひどい事を言ふて居たてせう。伯母さんも新ちやんも、外に女の子も居る中て、あんな猥な事を平氣な顏して言ふのてすもの。あの時には、私自分が言ふたのては無いけれど、ほんとに羞かしかつたわ。

伯父さまは平常もよく、あんな事を言はれるのよ。せんなんか、隨分聞いて居られなかつたわ。私、此

方の自分の机の前で聞いて居たのですが、終にはぢつと聞いて居られなくなつたわ。そうして置いてね、私に教へに入れ入れつて言ふのよ。私は、どんな事をしたつて、決してこんな人の信じて居る教へになんか入らないわ。本當にこんな家いやだわ。

子供が生れると、まだ目もろくに見えない中に、洗禮を受けさせてしまふのでせう。そうして奉教人は、どんな人でも、惡い事はしない、いたづらはしないと言ふて居るの。私なんぞは外教人だつて言ふて居るの。私なんぞは外教人だつて言つて何をしても惡い事をするやうに言ふのよ。そうして、外教人は死んで後に、天國に入いれないつてなどと言ふの。死んだ後には天國も地獄もありはしないわ。それに、この家の人なんか、ちつとも立派な人達では無いんですもの。何處を押したつて、深切だの慈悲深いのと言ふ事は無いの。こんな人が天國に入れるなら、私だつて入れるわ。

本當に伯父さんて、近頃變よ。私の處にお友達が來ると、それを何時の間にか見て、縹緻が好いとか惡いとか、そんな評判ばかりするの。あの髯もぢやの、何にも氣の付きさうでない顏をして居て、如何して、何時の間に見て居るのでせう。私、後で嫌でたまら無いの。

兄さん、私もう、何もかも嫌になつちまつたの。兄さんに逢ひ度いわ。兄さん、私兄さんの家に行つては惡くつて?。

一度、行つてよく種々の事をお話したいわ。ね、兄さん…………

十二月三日

しげ子

御兄上樣御許

八

兄さん、一昨日はよく來て下さいました。一體、この頃、兄さんは如何してゐらつしやるの。私、何だかちつとも兄さんの御樣子が分らないのですが、如何かお聞せ下さいまし。

私、是非如何かして一度兄さんの處に伺はうと思つてるのですが、如何も思ふやうになりませんので困つて居ます。

あのね、兄さん、此間、祖母樣に妙な事を伺つてよ。兄さんがね、此頃始終、角田お靜さんて方と一所に步いてゐるつて、西片町では大變な評判てすつてさ。それと、此度、電車の停留處てよその奧さんと兄さんとが一所に居たつて、これも大變な評判てすとお祖母樣が何處かて聞いて來て話して居たのよ。すると、伯父樣が、何しろ暫く淸之助さんが來なくつて、いゝと思つて居たらば、此頃又時々來るやうだが、娘達は誰も相手になつてはいけないつて、嚴命が下りたの。それだから、一昨日の時にも兄さんが來たつて言つて、秋さんや、澪ちやんが陰てそれは惡口を言つて居た事よ。

ね、兄さん、角田お靜さんて、如何した方？本當に何時、兄さんはその方と御懇意になつたの？。私兄さんの妹だわ。何にも隱さずに、話して頂戴な。ね兄さん。手紙てね。いゝ事…………

十二月十五日

しげ子

御兄上樣御許

九

兄さん、今度のお手紙は大變激して居られるのね。「僕が何をして居やうと、下村の人達と何の干係がある……」なんて、まるで私が叱られて居るやうだつたわ。

その他の奧さんと電車の處に一所に居たつて話は、祖母樣が言はれたのよ。何だか大變、むづかしい手紙だわね。私にはちつとも意味が分らない事が多いわ。「下村の家はパリサイ人のやうだ。」とか、「宗教をふりかぶつて人を議する、」とか、如何言ふ事なの、しかし全くこの家の人達は、人を見るとすぐ罪人だと思ふ人達が揃つてるわね。

そんな事よりも、私聞き度いのは角田お靜さんの事だわ。如何言ふ方なの?、一所に歩くつて、兄さんは始終その方と往來して居るの「角田お靜さんと親しいのは事實だ。それは折があつたらば詳しく話さうが、たゞ僕は種々と世話をやいて居るだけだ。そして、其世話をやく事が僕には愉快だ。自由戀愛だなんて、此前にも言つてあつたが實に怪らん事だ。」つて書いてあるのですが、兄さんどんな世話をやくの?。

兄さんは角田お靜さんを意中の人として居られるのでは無くつて?、何だか今日のお手紙を讀んで居るとさう思へて來るわ。兄さんさうぢや無くつて?、さうなら打明けて下さいな。兄さん、私は兄さん

の妹だと思つて何ても打明けて話すてはありませんか。ね、兄さん。
それからね、私、如何しても、年が變つたらば早速兄さんにお目に懸りに行くわ。だつてね、私、あんまりだと思つてよ。伯母樣も、祖母樣も、だから兄さんに逢ひ度いわ。逢つてよく話したいわ。角田さんの事だつてあるし、
兄さん、昨晩斯うなの、私何故だか分らないのよ。もう寢やうと思つて、床に入つて種々の事を空想して居ると、隣のお茶の間の火鉢の前に、伯母樣と、祖母樣とが居らしつて、何かひそ〳〵話をして居るの。するとね、如何したのか、ひよつとおしげさんは清之助さんとくつついて居るんだよ、つて言ふ聲が聞えたわ。私カッとなつてしまつた。だつて兄さんあんまりだわ。伯母樣だつて祖母樣だつて、そんな事を言ふのはあんまりだと思つてよ。だから、私、今日にも夜が明けたらばすぐ、兄さんの處に行かうと思つたの。そうして兄さんに私すつかり話をしようと思つたのよ。
兄さん、私往くは。いゝ事?、年が變つたらすぐ兄さんの下宿に往つてよ。いけない事?
兄さん、私如何したのでせう。此頃はね、何だか兄さんとしんみりお話がし度くつて仕方が無いのよ。
それだのに兄さんは近頃ちつとも來て下さらないし。手紙だつて私の三本に一本の返事もくれないのだもの…………

十二月廿二日

しげ子

御兄上樣御許に

第三

一

今、歸り着きました。私は、歸ると自分の机の前に坐つて、ぢつとして居ます。身體中ががた〱慄えて仕樣が無いのよ。

兄さん、私もう處女では無いわね。私はもう人の妻になる資格が無くなつてしまつたのね。

兄さんは恐い人だわね。今日兄さんが言ふて居たやうに惡魔のやうな人だわね。

兄さん、私忘れ無い事よ。如何しても忘れない事よ。私の身體はもう斯うなつてしまつたのですもの。

だけど、兄さんは今日は如何したの。私、漸うの思ひて初めて伺つたらば、兄さんたら、上らない中から、何しに來たなんて、あんまりだわ、そして始めから終まで、物を言へば、人を茶かして居て、でなければ何か外の事でも考へて居るやうな顏をして居るのですもの。何處か目も凄いやうだつたわ。そうして遂々あんな事をしてしまつて…………

兄さん、今日は兄さんは何故あんな事を言つたの、あれは兄さんの本心？、私如何しても分らなくつてよ。兄さんはだつて、僕は惡魔だつて言つたり、しげさんなんぞは僕の犧牲だつて言つたり、私が傾

々な事を話さうとすると、兄さんは急に笑つて、そんな事は面白くも何とも無いつて一口に言つてしまふのですもの、そうして、角田お靜さんの事を聞くと、うむあれは僕の戀人だつて、まるで何もかも戯言にして居るのですもの、ほんとに平生の兄さんでは無かつたわ。今日は如何かして居たんでせう。

兄さん、私如何しませう？。もう取り返しの付かない身になつてしまつたわ。私の身體は汚れてしまつたのね。私、如何したらばいゝの？、え、兄さん如何か、私、如何したらいゝか敎へて下さいませ。私はもうだつて處女では無いのですもの。

だけど、兄さんこの事が世間に知れたら大變よ。ね、これは兄さんと私との一生の秘密だわ。私はこの事を一生誰れにも言はずに、如何な苦しい事があつても、自分一人の胸に收めて死ねんだわね。兄さん如何したらばいゝの敎へて頂戴よ、ね兄さん。

あゝ、私は……………………………………………………………………………………………………

一月廿三日　　　　しげ子

御兄上樣御許

二

兄樣、昨日はお手紙をありかたう、早速拜見しました

ですが、あのお手紙を初めて讀みました時は、實にあんまり薄情だと思ひました。けれど兄さんが心を靜かにして讀めと仰せられましたから、再三讀んで漸く分りました。

全く私が惡いのでありました。私はあの日歸つてから、何が何だか分らなかつたので、あんな手紙を上げたのですが、全く兄さん一人が惡いのでは無く、それに應じた私も惡いのですから、兄さん免して下さいませ。

兄さんの仰せられるやうに、私と兄さんとは愛し合つても、結婚する事は出來ないのですわね。ですが、私はまだ未練が殘つて居るのか知れないけれど、兄さんが戀しくつてたまりません。けども、兄さんの何時に無いきつい、お言葉によつて見ますと、兄さまのお心はもうちやんとお定りなさつたやうに思はれますから、私も、兄さんのお言葉に從つて、この事はない事と、諦めます。もうこの事が無い昔の時の人間に返ります。もう心の奧に秘密の無い人間となります。だから、もしこの僕の言ふ事を聞なければ、もう僕はしげさんを妹とは思はないなどゝ言ずに、何卒こんな不束な私ですけれど、妹と思つて、何時までも世話をして下さい。死ぬまでね、死ぬまで妹と思つて見捨ずに居て下さいよ。兄さまいゝ事？兄さん、何卒澤山世話を燒いて下さいよ。あゝ兄さん、嬉しくつてたまりません、今は兩親からは遠く離れて居て、こんな下村のやうな家に居るので、世話を燒いてくれる人はありませんから、兄さん何卒、澤山世話をして下さいませ。

あゝ今日は、心にはやましい事は無くつて、兄さまとは兄妹になつたし、私、實に嬉しくつて、嬉し

くつてたまりません。

兄さまにはお目にかゝつて、兄妹だとは契ひませんけれども、この手紙でちやんとお契ひ致します。兄さまよくつて？

しかし兄さまのお手紙に、「何もかも僕が惡い。僕は惡魔だ。惡魔のやうな心を持つて居る。しげさんが處女で無くなつたと、言つて悲しむのも尤もだ。だが、其處女でなくなつたのは、惡魔に犯されたと思つて、もうこんな事無い昔の心に返つてくれたまへ」と書いてあるのを讀むと、私悲しくなつてよ。兄さん、私にはまだ未練があるわ。

「けれど、しげさんにも缺點が澤山ある。それを直して立派な女に成らねばならない。第一にはしげさんにはのさばつた處がある。これは兼てから思つて居た……」つて、私は如何(どんな)にでも自分の惡い處は直します。それで私昨晩もよくそののさばつた處があるかと思つて考へたわ。でも分らないから、今日學校に行つて姉さん(田村さん)に聞いたの。さうしたらば、私もさうは思はないつて言つたわ。兄さん何處がさうなの？、もつと敎へて頂戴兄さまは、あの此間の事を怨むならば、それは何時までても受けると仰せられましたが、私は決して怨みません。それよりか私の惡い處を早く敎へて下さらなかつたのを怨みに思つてよ。覺えてゐらつしやいよ。

このお手紙などは家では全く、お友達から來ると思つて居るらしい事よ。けれどね、此間も四國に居た時分の、兄の友人から手紙が來たのよ。その人が春日井かげらふなんて妙な名を書いて、よこすもの

ですから、それを椽側で讀んで居ると、露ちやんが來て、誰方から？、見せて頂戴つて言ふの。私、いやつて言ふとね、怪しんてすてすとさ。子供のくせに本當に生意氣だわね。ですから、中々手紙を書いても大變なのよ………………………

一月廿六日　しげ子

三

今日面白い事があつたわ。此間兄さんの處に伺つた時にね、一寸お話したでせう。あの塚本さんて方ね、（外交官の細君になり度いつて人）あの話の時に兄さんが、ぢや僕の細君にしやうかつて言つたでせう。それを今日學校に行つてお友達の川崎さんに話したらね、塚本さんは大變陰では評判がいゝのね。しかし塚本さんなど結婚したらば强情で仕樣が無いだらうなんて噂して居て、それを姉さん（田村さん）に話したらばね。田村さんが、眞面目になつて、そんならば私がその方の細君にならうつて言ふたのよ。それから、私と川崎さんとで、それは丁度釣り合ふから早速結婚式をお擧げなさいと言つて、からかつたの、本當に丁度いゝわ。早く兄さんマレッヂなさいよ。さうすると、私が丁度眞中に居て都合がいゝから。それにつけても、角田さんの事は一體如何なの、兄さんはチットも話してくれないのね。

私この頃は學校が面白くなつてよ。その川崎さんて言ふ方や、田村さんと毎日面白く話しをするの。その中だけ、何だかお寺のやうな下村の家に居るいやな思ひが消えるの。

此間の日曜日には、川崎さんと植物園に遊びに行つたわ。此度は品川の妙華園に行かうつて約束したの。家もすぐ近所なのよ。面白い方で…………

……………………………………………………

しげ子

二月五日

御兄上様御許

三

兄さん、折角漸くの思ひをして來たらば、お留守。本當にもう嫌になつてしまひますわ。今日は晝御飯をしまつてから思ひ立つたのですから、時間が少ないので大急ぎで馳けて來たのよ。やつてくればお留守ですもの、本當にがつかりして、この置手紙を書くのにも張り合が無いわ。

今日は前から言つて置かなかつたのだから、仕方が無いと諦めて歸ります。伯母樣が早く歸へつて來いと言はれたから、早く歸らなければなりません。

今ね、こゝの主婦がお茶を持つて來てくれてね、あなたは正木さんと御兄弟ですかつて言ふから、イヽエ、私は兄さんと從妹ですつて言つたらね、ぢや正木さんのお妹御が西片町邊に來ていらつしやいますかつて言ひます。私、何だか分りませんから、私はこの頃來たので分りませんと言ふたの。そうして、その方は丁度あなた位の年頃の方ですね、と言ふて居たわ。察するに角田お靜さんを兄さんの妹と思ふ

て居るのでせう?。

本當にこのお部屋はいゝ事ね。こゝにお靜さんがよく來るのでせう?、如何な方?、私に會はせて下さいな。こゝまで書いて、もう兄さんが歸つて來てかと思つて、又待ちました。

本當にこの室はいゝわね。この家の離室になつてゐるのね。こゝにかうして坐つて居ると氣がしんみりして來るわね。

あゝ、こゝに來て種々の事を考へて居ると、あの兄さん忘れやうとして、忘れられない時の事が思ひ出されるわ。兄さんの顏が目について、あの事が思ひ出されて仕やうがありません。

あゝ、もう又暫く逢へないわね。兄さん、たまには來てくれてもいゝわ。もう歸ります。

二月十二日　　　　しげ子

四

兄さん、昨日はよく來て下さいました。此間のお手紙も拜見しました。

兄さん何だわね。靜子…がなんてもう隨分だわね。結婚は未來の事だから、今から何とも言へぬが、と仰るけれど、あのお手紙にあつたやうに、僕は靜子を愛して居る事を誇りとするつて言ふ程だから、兄さんの立派な戀人だわ。

兄さん早く結婚なさいよ。スヰート、ホームを作つて下さい。そうすれば、私は毎日のやうに遊びに

行くわ。

けれど、兄さんの御両親はこの結婚をおゆるしになるでせうか。如何でせうか。私それが心配よ。もし許されない時には、兄さん如何して?、

親に逆つて結婚して?……もし御両親が御承知なさつても、目出度く儀式を擧げても、其後が思ひやられるわ。もし兄さんが靜子さんと結婚なさつたらば。下村の人が惡く言ふでせうね。今だつて、兄さんの事は夫はひどく言つてるのだから……それでも兄さんが、平氣?しかし、私だけは贊成してよ。何しろ兄さんのお見立てすもの。

兄さん、私又逢ひ度くなつたわ。もうこの頃はその事を思ひ出すと、如何していゝか分らない程なの。兄さん、又近い中に伺ひますよ。そして、その時にね、兄さん、私又何もかもお話するわ。あゝ、兄さんの事を思ふと、いつかの事が思ひ出される…………さよなら

二月廿五日　　　　しげ子

兄上様

五

此間は珍らしくゐらしつてね。折角お話して居る處に伯母樣が來たので、殘念でしたわね。

あの時に私、あの手紙を見て?、と聞くと、兄さんはしげさんの手紙なんぞは見るもんかつて言ふの

ですもの。私そんならもう兄さんには手紙を上げまいと思つて居たの。だけど、又書いてよ。だつて、私、兄さんが忘れられ無い事よ。兄樣、今夜非常に氣が變なの。代數をやつても少しも分らないの、腦が如何かしてよ。

兄樣、逢ひ度いわね。如何かして逢ふ事出來ないでせうか。あゝ逢ひ度いわ。兄樣今、何をしてゐらつしやるの。もし私に翅があるか、若しくば魔法使なら早速この思ひをはらす事が出來るのにね。

こんなに雨のしと〳〵降る、淋しい晩には兄さんと二人限りで居たいわ。こんな晩に兄樣と一所に居て。共に樂しく語り、遊び又、私の思ひ通りになつたら、如何に樂しいでせう。私、この空想を如何かして消さうと思つても消す事が出來ないのです。

思ふて行くに連れて、だん〳〵奥深く進んで、種々と思ひ起されます。あゝ、あのお宅に初めて參りました日の、兄樣との事が如何したのか目の前にあり〳〵と表はれて來て、仕方がありません。夫を思ふと胸がわく〳〵して來て、身も世も無くなります。兄樣にはすみませんが、私は如何しても忘れる事は出來ません。その時が戀しくつてたまりません。

如何か私のこの心に滿足を與へて下さい。兄さん願ひますから。さよなら。

三月十八日　　　　しげ子

戀しき兄上樣御許

もう、大學のボート、レースもぢきですね。今年もチケットを、四五枚下さいよ。きつとよ。下村の

方のは兄さんが自分で持つて來て。私には郵便で、ね、きつとよ。

六

昨日は大變、兄さん面白かつてね。あゝも一度昨日に歸ればいゝ。何よりも法科が勝つてお目出たう。兄さんも嬉しかつたでせう。私も自分が勝つたやうに嬉しかつたわ。昨日あんまり旗を振つたので、今日は手が痛くつて……

それから靜子さんに逐々逢つたわ。兄さんいゝ方ね。大變はき〳〵した方だわ。ね兄さんが敎へてくれないのだけれど、秋さんが顏だけは知つて居たので、自然と話をしてしまつたわ。もう、すつかり仲がよくなつてしまつたわ。

秋さん達は、嫌な人だつて言つて居てよ。それに兄さんが見違へるやうに、此頃は髮も分けてるし、鬚なんか綺麗に生してしまつて、「君達も來たね。」なんて言つたつて、大變惡く言つてたわ。今日はがつかりしたから、これで止ます。さよなら。

四月十五日十一時

しげ子

兄上樣御許

靜子さんによろしく。

七

兄さん紙が無いから、今お室の中を捜しましたよ。御免なさい。兄さんひどいわね。昨日來いと言ふたから、やつとの思ひで來たら、昨日出たぎり歸らないなんて言ふのですもの。あんまりだわ。其代りに方々かき廻して、種々のものを見たわ。

兄さんの昨日の言葉なんかはうそね。忙しくつて靜さんの處へなんか行けないなんて言ふて置いて、今日はきつと靜さんの家に行つてるのだわ。ひどいわね。兄さん埃の中をせつせと田端くんだりまで來たのに、留守なんてですもの。

私、これから歸へつて、靜子さんの所に行くわ。あゝほんとに靜子さんが羨しいわ。日記も何もかも見てしまつてよ。

ほんとに早く樂しい家庭が出來るといゝわ。羨しいわね。早くさうなさいよ。

この日記の中にある、「別れ行きたる少女」といふのを三度も四度も繰り返して讀んでよ。私は兄さんが思つてるやうに決して伯父樣達に勸められてカソリック教の「あまのやうな女」には成らないわ。私この「別れ行きたる少女」のやうになつて、兄さんに「物を思はせる」事なんかしないわ。兄さん心配しなくつてもよくつてよ。……………………………………しげ子

四月廿一日

御兄上樣

八

今日はお手紙を有難う。兄さん、ひどいわ。「別れ行きたる少女」はしげさんてはないんだ。別の人だ。お氣の毒だつたね、なんてあんまりだわ。一體誰なの、何處の人なの?、敎へて頂戴なね。

そして自惚てるねだつて、い丶わ!。兄さんだから何と言はれたつて干はない事よ。私、全く自分だと思つたのよ。誰なの?。靜子さん?、さうでも無いやうだわね。

兄さんは此頃は隨分ひどい言葉を使ふのね。私何だか讀んでると苦しくなつて來るわ。「女は弄ぶ可し。女は人間と猿との間に位すべき動物なり。」と言ふ事を聞いたが、大にい丶ね。僕なんかこの說の實行者だ。しげさん用心しないと、玩具(おもちや)にされるよ。」だつて、隨分ひどいわね。

此間來た時だつて、何だか人を笑つて居るやうな顏をして、私が折角話すのを碌に聞いても居ないのですもの。そして「下村の人達は馬鹿だね。僕が斯うしてしげさんを遊びに來るのを如何する事も出來ないんだ」なんて、そんなら何しに來るのと言つたら、「お前を弄(からか)ひに來るのさ」だつて、私、本心だと思はないからい丶けれど、あんまりだわ。

角田さんに行つてもあんな事を言ふの?。およしなさいよ、靜子さんは怒るかもしれなくつてよ。……

四月廿九日　　しげ子

九

今ね、川崎さんと二人て、三河島の方まで往つた歸りに一寸寄つたの。お留守だつたけれど上つて、お部屋の中を檢査して上げたわ。

川崎さんもこのお部屋を頻りに感心して居たわ。全くいゝわね。四疊半て一寸緣側のある處から、書棚が二つも並んで居て、その上に花瓶や、時計やが置いてあつて、油繪が二枚も懸つて居て、靜かな處て、本當にいゝ書齊だわ。私だつてこゝに來て居ると、何とも言へなくつてよ。

兄さん、又日記を拜見してよ。私、机の引き出しを開けやうかと思つたけれど、それだけは止して上げてよ。

今日も、兄さんは靜子さんの家に行つたのでせう。昨日の朝、出たきりだつて家の人が言つたわ。それから、この上の机の上にある、毛糸の肱突きか、ラムプ敷かは、靜子さんがこさへたのでせう？、さうでせう？

五月六日　　　　しげ子

十

先程は、私、兄さんが來てらつしやると思つて、一寸塚本さんに伺つて見たのよ。如何したの。兄さんも靜子さんも此前とは大變違つて、變な樣子だつたわ。聞くのも何だか變だつたから、其儘歸りまし

たが、如何したの？、え、何か心配事でもあるの？、教へて下さいな。何だか心配だわ。その上に平生とは變つて、兄さんの言葉が荒くつて、怒つて居るやうだつたわ。私、今迄、今日のやうな言葉を聞いた事はなかつたわ。

汝なんぞ、何しに來るんだなんて、あんな事を言つて、二人して人には構はずに話して居るのですもの、私、何が惡いのだか少しも分らないのよ。もし何か私に惡い事があつたら、赦して下さいね。ほんとに赦して下さいね。これからきつと直すから、兄さん、私如何な事をでもするからね。私はたゞ兄さんに逢ひ度いと思つて行つたのだわ。

だけど、兄さんお二人の結婚は圓滿に行くでせうか。私はそれが心配だわ。…………

しげ子

十一

私、また兄さんには暫く逢は無いわ。兄さんは此頃はもう全く來てくれないのね。

そうしてね、兄さん此間の晩、塚本さんの家の前を通ると兄さんの笑ひ聲がしてたわ。私よつぽど入らうかと思つたけれど、家の下女と一所だつたから止したの。塚本さんに行く事が伯母樣に知れてもしやうなら大變ですもの。

あのね、靜子さんとは本當に結婚するの。え、本當にするの？、そうして靜子さんの母さんは其を承知して居るの？、兄さん、後生だから本當の處を詳しく話して下さいな。

靜子さんの母樣は本當に其を承知して居るの？、さうしてあなたの父樣母樣は如何なさるの？、それを快く承知して下さるでせうか？、お許しなさるでせうか？、あなたの心持をよく聞かして下さい。(今こゝには秋さんも澪さちやんも居て、‥‥さんと書く事が出來ないのよ。だからあなたと書きます。)

私二度しか伺はないのですが、一寸見受けた樣子では、塚本さんのお家は普通の家のやうでは無いわ。何だか恐い事のありさうな家に思へるのですが、そんな事をあなたは御存知なのですか。だから、あなたの御兩親がとてもお許しなさりますまいと思はれます。又あなたの良いと思ふて居る方だから、たやすく御承知なさるかも知れませんね。もし御承知なさらなかつたなら如何なさる積りですか。御承知なさらなくつてもあなたは實行なさる積てすか。御結婚なさる積りですか。この御返事にしつかりした處を聞かせて下さいませ。

もし御不承知でも、あなたは强いて、御兩親の御意に逆つてでも御結婚なさるのですか。二人一所にさへ居れば、親に逆らつても好いの？、親に見放されても、もう學校さへ卒業すれば自分で如何か出來ると思つて居らつしやるの？、それでは御兩親がお可愛さうです。今迄折角御心配なさつて、漸く御卒業なさる時が近づいて來ると言ふのに、子供に見捨てられるなんて、本當に御可愛さうです。とても、親の許したまはぬ結婚は仕方が無いでせう。さうすれば、しかし靜さんはそれはお可愛さうです。折角自分の一生の夫と定めた方に捨てられては‥‥あなたも心地惡いでせう。だから、もしそんな事が無く御兩親が御承知なさつて、靜子さんと目出度結婚なさつたとしても、こんな事を言つては失禮ですが、靜子さんに一家を圓滿に修めて行けるでせうか。

其は靜子さんと、あなたとの間はよいでせうが、御兩親と靜子さんとが合ふでせうか。それから、靜子さんの母樣は如何言ふお心でせう。母一人、娘一人であゝやつて貧しく暮して居られるのですが、その心に何か外の事を思つて居られるのでは無いでせうか。この事を是非、御返事に知らせて下さい。

これは、私が一生懸命になつて考へた事ですから、如何か妹の言ふた事として怒らずに聞いて下さいませ。そして、その中に是非お目に掛り度く思ひます。あのね、この次の日か、その次頃に私、伺ひますから、如何か成るべく家に居て下さい。さよなら

五月廿一日　　しげ子

御兄上樣。

十二

先程はお手紙嬉しく、あの前の兄さんのお部屋の處で、早速拜見しました。今日のお手紙は如何して、こんなに改つた他人に使ふやうな言葉で書いてあるの。私、何だか變な氣がしてよ。兄さんと私とは他人では無いではないの。兄妹だわ。それだのにこんな手紙をくれるのですもの。もう前に約束した事を忘れてしまつて?、隨分ひどいわ。

そうして「僕の結婚はまだ幾年後にする事か、誰れにも相談をした事もありませんし、自分の心にも相談したことがなかつたのですから、折角御親切な御忠告ですが、僕には不必要な事です……」なんて、あんまりだわ。私、ほんとに兄さんの事を思つて言つたのよ。だから、もつと本氣に聞いて下さら

なくつちや困るわ。

靜子さんは兄さんが仰せのやうに、兄さんを愛して居るでせうが、靜子さんの母樣は如何でせう。何か兄さんに靜子さんを押し付けやうと思つて居るのでは無いでせうか。私は其が心配なのよ。

兄さん、心美しき靜子なんて、振つてるわね。兄さん、兄さん、私ね。又此頃は兄さんに逢ひ度いわ。この次の日曜に伺ふ事よ。兄さん待つて居てね……………………………………

五月廿五日　　しげ子

御兄上樣御許

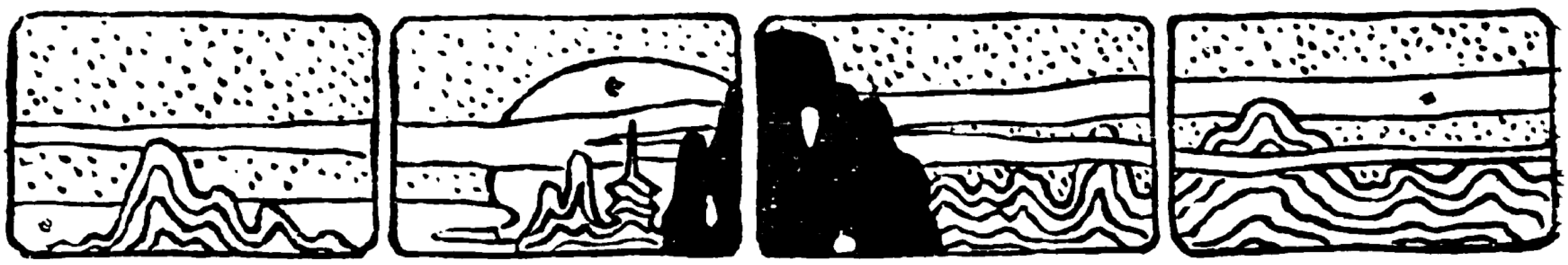
十三

この頃はもう雨ばかり降つて、じと〳〵してうつとしいわね。今夜のやうな晩には、私、思ひ出すまいと思つてもつい、兄さんと前の時の事を思ひ出してよ。

兄さん、もう〳〵身體が如何かなつてしまひさうよ。氣が茫つとしてしまつて、兄さんのお顏が目の前に見えるわ。あゝ兄さん逢ひ度いわね。

兄さん、此間は伺つたのに又お留守ね。私あんなに前から約束しといたのに、何處に行つたの。又靜子さんの處？

兄さん、私もこの家に居るのはつく〴〵嫌になつたわ。何處にか行つてしまひ度いわ。あゝ、私は兩親が戀しい……………………………………………………（完）



老獸醫

伊藤左千夫

（一）

糟谷獸醫は、去年の暮押詰つてから、此外手町へ越して來た、入口は黑板屏の一部を切明け、形許りといふ門構だ、引違に立てた格子戸二枚は、新しいけれど、如何にも、出來の安物らしく立附が甚だ惡い、向つて右手の門柱に看板が懸けてある、板も手拵であらふ、字も勿論自分で書いたものらしい、素人臭い幼稚な字だ。

「家畜診察所」

とある大字の傍に少さく「病畜入院の求めに應じ候」と書いてある、板の新いだけ、猶更安ッぽく、尾羽打枯した、糟谷の心の荒みがあり／＼と讀まれる、上り口の淺い土間にある下駄箱が、門外の往來から見えてる、家は隨分古いけれど、根繼ぎをした許りである

から、兎も角も域居鴨居の狂ひは無ささうだ。

入口の障子を明けると、二坪程な板の間がある、そこが病畜診察所兼薬局らしい、更に入院家畜の病室でもあらふ、犬の箱猫の箱などが三つ四つ、隅に重ね上げてある。

外に六疊の間が二間と臺所附二疊が一間ある、是で家賃が十圓とは、驚く程家賃も高くなつたものだ、それでも他區に比べると、未だ大變安いと云つて、糟谷は悦んで越して來たのである。

糟谷は二男芳輔三女禮の親子四人の家族であるが、其四人の生活が、今の糟谷の働きては、なか〳〵骨が折れるのてあつた。

平顔な眼の小さい唇の厚い、見た通りの好人物、人と話をするに必ず、にこ〳〵と笑つてゐる人だ、何程心配な事があつても、心配といふことを知つてゐさうな風のない人てある。

細君はそれと正反對に、色の青白い、細面な淋しい顏て、用談の外は餘り口はきかぬ、聲を立てゝ笑ふ樣な事は滅多にない、さうかと云つて、ツンと濟してると云ふてもない。

それは、前途に多くの希望を持つた、若い時代には、随分厭に濟した人だと云はれた事もあつた、實際氣位高く振舞つて居た事もあつた、併乍今の此の人には、そんな内心に幾分自負して居ると云ふ樣な氣力は影も留めては居ない、氣取つて默つて居た、昔の俤が只其形許りに殘つてるのた。

天性陰氣な此の人は、人の目に立つ程、愚痴も悔みも云はなかつたものゝ、内心には實に長い間の、苦悶と悔恨とを續けて來たのである、今は苦悶の力も盡き果てゝ、眼に氣張りの色も消えて終つた。

生れが生れたけに何處となし、人柄なところがあつて、淋しい面ざしが一層あはれに見える、もう吾が世は駄目だと深く乘らめて、成るまゝに身をも心をお任せて終つたといふ風である、それでもさすがに、玆へ移つて來た夜は、誰に云ふとはなく、「引越度に家が小さくなる」と獨言を繰返して居つた。

糟谷は明ければ五十七歳になる、細君はそれより十一の年下とか云つた、糟谷は本所へ越して來て、生活の道が確立したかと云ふに、未ださうはいかぬらしい。

糟谷が上京以來絶えず同情を寄せて、懇ろに交つて來た、當區の畜產家西田と云ふ人が、糟谷の現狀を見るに忍びないで、遂に自分の手近かに越さしたのであるが、糟谷が十年住んで居つた、新小川町の兎に角中流の住宅を出てゝ、家賃十圓といふ今の家に移つて來たに就ては、一場の悲劇があつた結果である。

（二）

糟谷は明治十五年頃から、足掛十二年の間、下總種畜場の技師であつた、其頃種畜場は農商務省の所管であつた、糟谷は三十になつた許り若手の高等官として、周圍から多大の希望を寄せられてゐた、新しい學問をした獸醫は未だ少ない時代であるから、糟谷は獸醫としても當時の秀才であつた、快濶で情愛があつて、少しも官吏風をせぬ處から、場中の氣受も近鄕の評判も頗る宜しかつた、近鄕の農民は庇意氣の欲目から、糟谷は遠からず乾度場長になると信じて居つた。

糟谷は西洋葉卷を口から離さないのと、下手の横好に碁を打位が道樂であるから、老人側にも若い人

の側にも褒められる、時間の許す限り、糟谷は近郷の人の依頼に應じて家畜の疾病を見てやつて居た、職務に忠實な考から許りではないのだ、無邪氣な農民から、糟谷さん糟谷さんと持て囃されるのが、單調子な人好しの糟谷には嬉しかつたからである。

梅の花菜の花の長閑な村々を、栗毛に額白の馬を乘廻した糟谷は、當時若い男女の注視の燒點であつた、糟谷は種畜場に居つて、公務をとるよりは、村落へ出て農民を相手に働くのが、何時も愉快に思はれてきた、さうしてからういふ事が、自己の天職から見ても却つて尊いのぢやないかなど考へながら、益氣に爲つて農民に親む事を勉めた。

糟谷は出る度に行く先々て、村の青年等を集め、農耕改良は必ず畜産の發達に伴ふべき理由などを説き、文明の農業は耕牧兼行でなければならぬといふ事などを頻りに説き聞かせ、養雞をやれ、養豚をやれ、牛は必ず洋牛を飼へと勸めた、人望のあつた糟谷の話であるから、近郷の農民は競ふて家畜を飼ふた。

糟谷は此間に、三里塚の一富農の長女と結婚した、今の細君がそれである、細君の里方では糟谷を傑い人と思ひ込み、猶出世する人と信じて、此結婚を名譽と感じて娘を嫁し、糟谷の方でも只良家の女といふ事が難有くて、無雜作に此結婚は成立した、それて男も女も戀愛に關する趣味には何等の自覺もなかつた、精神上から見ると、誠に無意味な淺薄な結婚であつたけれど、世間の眼からは羨望の中心となり、一時近郷の話題の花てあつた、そして糟谷夫婦もたわいいもない夢に醉ふて居つた。

（三）

過渡期の時代は餘り長くはなかつた、糟谷が眼前咫尺の光景に現を拔かして居る間に、背後の時代は容赦なく推移して居つた。

札幌農學校や駒場農學あたりから、續々として農學上獸醫學上の新秀才が出てくる、勝島獸醫博士が駒場場農學校の將に卒業せんとする數十名の生徒を率て種畜場參觀に來られた時は、敎師は勿論生徒に至るまで糟谷の如き殆ど眼中になかつた。

糟谷が自分の周圍の寂寥に心附いた時は最早晚かつた、糟谷は遙かに時代の推移から取殘されて居つた、場長の位置を望むなど實に思ひもよらぬ事と思はれてきた、今の現在の位置すらも、そろ〳〵搖れ出した樣な氣がする、物に屈托するなど云ふ事はとんと知らなかつた糟谷も、俄かに悔恨の念禁じ難く屢寢られない夜もあつた、糟谷は或夜又例の如く、心細い思案に責められて寢られない。

成程自分は迂濶であつた、國家の爲めといふことを考へて働いた、畜產界の爲めと云ふ事も考へて働いた人民の爲めと云ふことも考へて働いた、けれども只自分の爲めと云ふことは、殆ど胸中になく働いて居つた、何と云ふ迂濶であつたらふ、もう間に合はない、何もかも間に合はない。

糟谷はかう考ながら、自分には兒供が二人あるといふことを强く感じて、心持よく睡つて居る妻子を顧みた、長男義一は肥太つて艶々しき赤い顏を、蒲團から落してすや〳〵眠つて居る、妻は三つになる次男を、さも可愛らしさうに胸に抱きよせ兒供のもぢや〳〵した髮の毛に、白くふつくらした髮をひつけて何の苦のない面持に眠つて居る、糟谷は愈淋しくて溜らなくなつた。

自分に何等の惡氣は無かつたものゝ、妻が自分に嫁くに就いては自分に多大な望を屬して來たことは承知してゐたのだ、さう詞の穗に出た時にも、自分は調子に乘つて氣休を云ふた事もあつたのだ、結婚當時からの事を種々廻想して見ると、妻に對しての氣の毒な心持、舅姑に對して面目ない心持、一々自分を苦めるのである、彼等が失望落膽すべき必然の時期は最早眼の前に廻つて居ると思ふと、腸が煮えて千切れる心持がする、自分は何等犯した罪はないと考へても、それが爲に苦痛の事實が輕くなるとは思へないのだ。

糟谷は又自分は結婚するに就ても其當時餘りに思慮の無かつた事を今更の如く悔いた、家とか位置とか云ふことを、互に目安にせず、云はゞ人と人との結婚であつたならば、自分の位置に失望的な變遷があつたにしろ、共に相憐んで、夫婦といふものの情合に依つて失望の苦も慰む處かあるに違いないだらふが、それが今の自分には殆ど望みか無い許りでなく、却て夫婦間に起るべき厭な云ふに云はれない苦痛の爲に、時代に捨てらるゝ淋しみが一層苦しいのである、それもこれも考へれば皆自分の迂濶から求めた事で免れやうのない所謂自ら作れる禍だ……

戀愛など云ふことと只々馬鹿氣てると許り思つて居たが、戀愛のとしい結婚は更に馬鹿氣て居つた、馬鹿氣て居ると云ふよりも、今は其淺墓な結婚の爲に、溜らない厭な苦みをせねばならぬ事になつた。

かう思つて糟谷は又妻や子の寢姿を見遣つた、何か重い物てしつかり抑えてゐられるやうに妻や子供は寢入つて居る。

愈自分も非職となり、出世の途が絕えたと極つたら、妻はどうするか、彼の兩親はどういふ態度をするか、かういふ時に夫婦の關係はどうなるものか知ら。いつその事別れて終へは却て氣は安いが、矢張り男の子二人の鎹が不本意に夫婦を繋いで置くのだらふ。

「仕樣がないから」「どうすることも出來ないから」「よんどころないから諦らめて居る」とか云ふ樣な心持て、如何にもつまらない冷かな家庭を作つてゐねばならないのか、呼嗚考へるのも厭だ……うつかりして過渡期の時代に居つたといふのが、つまり思慮が足らなかつたのだ……茲を止めたからとて、妻子を養つてゆく位に困りもせまいが、仕方がないどうなるものか益のない考はよさう、

考に勞れた糟谷は、我知らず呼嗚々々と嘆聲を洩らした、下女が起るなと思つてから、糟谷は僅に睡つた。

（四）

翌朝は漸く出勤時間に間に合ふ許りに起きた、餘程顏色が惡かつたか、「どうかなさいましたか」と細君が咎める、糟谷はうんにやと云つたまゝ井戸端へ出た、食事も急いで出勤の支度にかゝると、二人の兒供は右から左から父に纏はる、

「お父さんお父さん」

「とんちやんとんちやん」

糟谷は今日に限つて、それが五月蠅くて溜まらないけれど、子煩惱な自分が、毎朝必ず出勤の前に、

かうして兒供を寵愛して來たのであるから、無心な兒供は例の如く父に可愛がられやうとするのを、どうも叱り飛ばす事も出來ない。

『今日は遲いから急ぐだ』と少し六づかしい顏をしても兒供は聞入れさうもしない、糟谷は益々むしやくしやして、手を出す氣にもならない。

「ねいあなた一寸抱いてやつて下さいな、ほんの少しねいあなた一寸と」

細君から手移しに押付られて、糟谷はせうことなしに笑つて、せうごとなしに芳輔を抱いた、それで直ぐ又細君に返した、糟谷は此間にも細君の目をそらして、是等無心の母子を窃見たのである、さうして淋しいはかない苦痛が、胸に込み上げて來るのである、心臓の動氣が息の詰る程烈しく、自分で自分の身が支いて居られない様になつた、糟谷は「もう遲いヾ」と落附かない素振りを詞にまぎらかして外へ出た、外へ出るが否や糟谷は涙をほろ〳〵と落した、今少しの處で妻に涙を見られるところであつたと、糟谷は心で思つた。

糟谷は事務所の入口で小使を見た、小使は何時も叮嚀に挨拶するのだが、今朝は直ぐ側を通りながら挨拶もせずに行つて終つた、糟谷は厭な氣持がした、事務所へ這つて見ると、場長始め同僚までに一種の目で自分は見られてる樣な氣がする、いつもは、

「糟谷さんかうして下さい」とか、「これはこれ〳〵して置き……せうかね」とか、打解けて無造作に云ふところも、妙に改まつて命令的に事務の話をするのである、糟谷はもう落ついて事務がとれない、或は

非職の辭令が場長の手許まで來てとも居やせぬかとも考へる、まさかにそんなに早く止められるやうな事もあるまいと思ひ直して見る、糟谷は平氣で仕事をしてるやうな風を粧ふて、机に向つて居る時には解り切つてる事をわざ／＼立つて行つて同僚に聞いたりして居る、場長が同僚と話をして居るのに、聲が低くて能く聞きとれないと、をかしく胸騷ぎがする、其間にも昨夜考へた事を切れ／＼に思ひ出さずには居られない、人々が各默して仕事をしてるのを見ると、自分は除けものにされてるのぢやないかと云ふ考を禁ずることが出來ない。

場長が何か聲高に近くの人に話すのを聞くと、來月に入ると早々に、駒場農學校の卒業生が一人技手として當場へ來るとの話であつた、糟谷は覺えずひやりとする、それから千葉縣の某も埼玉縣の某も非職になつたと云ふ話をして居る、それは皆糟谷と同出身の獸醫で糟谷の知人であつた、糟谷は今の場長の話は遠廻しに自分に諷するのぢやないかと思つた。

糟谷はつく／＼と、自分が過渡期の中間に入用な材となつて、假小屋的任務に當つた事を悔んだ、涙いつの間か瞼を潤ふして居た。

糟谷がぼんやりしてゐると、場長始め多くの事務員は、皆書類を片つけて退場の用意をする、其譯が解らなかつたから、糟谷は狼狽へてきよろ／＼して居る、漸くのこと人々の口氣で今日の土曜日といふに氣ついた、糟谷は今が今まで今日の土曜日といふことを忘れて居つたのだ。

糟谷は土曜と知つて目が覺めたやうに起ちあがつた、成程さうであつたな、しつかり忘れてゐた、兎に

角都合がえい、それでは今日早速上京して、あの人に相談して見よう、時重先生が心配してくれ、吃度どうにかなる、東京に居ることになれば位置が低くても勉强が出來る、成べく非職などいふ辭令を受取らずに、轉任したいものだ、飯くつて直ぐと出掛けよう。

糟谷はかう考が定まると、よろめく足を踏みこたへた樣に、體のすはりが附たい、踏出す足にも力が這いて、大に元氣づいて家に歸つて來た、

「とんちやん、とんちやん」と云ふ聲も、いつもの如くに可愛ゆかつた、糟谷が芳輔を抱いて奥へ上ると、旂碁仲間の老人が坐りこんで居る。

「今日は先生、是非共先日の復讎をする積でやつて來ました、かう少しぽかく暖くなつて來ますと、どうも家に許り居られませんから、」

老人は糟谷の浮かない顏などには一向氣もつかず、勝手に自分の云ひたい事を云つて居る、糟谷は役所着の儘て東京へ行くつもりであるから、洋服を脫かうともせず、兒供を抱いたまゝ老人と對坐した。

「これは折角の御出陣ですが、實は其の一寸東京へ行つてくるつもりで……甚だ殘念だが……」

「いやそれや殘念ですな。日還りてすか、」

「今夜は歸れません」

「それぢや今日中に東京へ行けはえい、二三席勝負してから出掛けても遲くはない、うまく云つて逃げやうたつてさうはいかない、」

農家の樂隱居に、稍谷が今の腹の解る筈がない、稍谷は苦しく思ふけれど、平生心置きなく交つた老人であるから、さう嚴びしくも斷はれない、且つ又餘り俄に變つた態度をして、今の自分の不安心を氣取られやせまいかといふ樣な、淺墓な見えもあつた、とう〳〵二三盤打つことにした、人間も稍谷のやうな境遇に落つるとどつちへ向いても苦痛に許り出逢ふのである。

稍谷は其夕刻上京して、先輩時重博士を訪ねて希望を依賴した。

「うむ今少し勉强するにはそれや勿論東京へ來る方が得策だ、位置を望まないと云ふならば、どうとかなるだらふ、併し君達のやうに、間に合せの學問をした人は皆困つてるらしい、今少し勉强するのは最も必要だね、

稍谷は柄にないお上手を言つたり、自分ながら冷汗の出る樣な、輕薄な物言ひをしたりして、何分賴むを數十遍繰返して辭した、

「これでも高等官かい」稍谷は自分で自分を嘲つて、時重博士の門を顧みた、何に時重さん位と思つた時もあつたに、今は時重と自分との間に、餘程な距離があることを思はない譯にいかなかつた、妻子を振り捨てゝ、奮然學問の仕直しをやつて見やうか知ら、そんならば慥かに人を驚すに足るな、やつて見やうか、面白いな奮然やつて見やうか、二人の兒供を妻の奴が連れて三里塚へ行つてくれると都合がえいが、承知しないかな、獨身になつて今一度學問がやつて見たいなア、兒供は一人だけだなア、一人の方が妻が連れていくに極つてる、一番奮然としてやつて見やうかな。

稍谷は苦しまぎれに、そんな考を起して見たものゝ、それも長くは續かず、直ぐ又ぐつたりとなつて、時重博士が云つてくれた「どうとかなるだらふ」を便りに僅に安心する外はなかつた。

よく／＼稍谷は苦悶に疲れた、遠い先の事は兎に角、何か少しの慰籍を得て、僅かの間なりとも、此の疲れの苦みを忘れる娛樂を取らねば、迚ても堪えられなくなつた、酒好きならばこんな時には直ぐ酒に走る處だが、稍谷は酒は少しもいけない、稍谷はとう／＼神樂坂に親しい友人を訪ねた、さうして勉めて、自分が苦勞してる問題に離れた話に興を求め、殊更にたわいもない事を騷いて、一晚笊碁を樂んだ、翌日も笊碁を樂んだ。

稍谷は其後日曜度に必ず上京して居つた、格別用がなくても上京して居つた、種畜場近鄕の農家から、手が少し惡いから來てくれの、碁會をやるから來てくれのと頻りに云ふて來たけれど、一切村落へ出なかつた、土曜日日曜日を窺つて、遊びに來るものがあつても大抵は避けて逢はないやうにした、胸中に深刻な痛みを覺えてから、氣樂な悠長な農民を相手にして遊ぶに堪えられなくなくたのである、

稍谷は遂に東京に位置を得られない中に、四月上旬非職の辭令を受取つた。

（五）

農商務省にも出た、警視廳へも出た、何れも餘りに位置が低いので二年とは居られず止めて終つた、其内府下の牛乳搾取業者の一部が主となつて、畜產衞生會といふものが出來た、丁度稍谷が遊んで居つたを幸に、其主任獸醫となつた、稍谷はこれ以來榮達の望を絕ち碌々たる生活に安して終つた、愛想よく

いつもにこ〳〵して、葉卷の烟草を横にくはへ、碁を打つて不平も愚痴もなかつた。

只一度細君に對しては、最早自分は大きい望みのない事をさらけだし、今の自分に不足があるならばどうなりとお前の氣儘にしてくれと云ふた、其後は細君から不滿を訴へられても相手にならず、冷かな氣まづい素振をされても、平氣に見流して居つた、さうして新小川町に十餘年居つた、

稍谷は愈平凡な一獸醫と估劵が定まつて見ると、どうしても胸が治りかねたは細君であつた、どうしてもこんな筈てはなかつた、三里塚界隈ての富家の長女が、何だつて只の一獸醫の妻となつたか、從令へ種畜場は止めても、東京へ出たらば高等官の端くれ位にはなつて居れる事と思つて居つた、只の町獸醫の妻ては親類に合せる顏もないと思ふから、どう考へても明らめられない、それて明けても暮れても欝々樂まない、何かと云つては月の內に一度も二度も里方へ相談に行く、何程相談を繰返しても、三人の兒持となつた女は最早動きは取れない、いつも〳〵父母兄弟から相も變らぬ氣休を云はれて歸つてくる。運が惡いのだ間が惡いのだ、若くて死ぬ人もいくらもある世中だ、明らめねばなるまい、明らめるより外に道はない、から百度も千度も繰返して、我れと自分を諌めて見ても、なか〳〵其日が面白いといふ氣になれないのだ、

稍谷は細君がどういふ事を仕樣と厭な顏もしないから、さすがに細君も時には自分の我儘を氣づいて、「妾が何分性分が惡いものですから、妾も自分の性分惡いことは心得てゐますけれども、どうも其の今日を面白く暮すと云ふ氣になれませんて、始終あなたに失禮許りして居りますけれども」などゝ、遠廻しに詫

言も云ふこととさへあるのである。

種畜場以來此人を知つてる人の話を聞くと、稍谷の奥さんは、種畜場に居た時分とは、殆ど別人の樣に面ざしが變つて終つた、以前はあんな淋しい人ではなかつたと云ふて居る。

これ許りは親の力にも及ばないとは云ふもの丶、娘が苦悶の爲に面ざしまで變つたのを見ては、實の親として心配せぬ譯にはゆかない、結局兩親は自分達の隱居金を全部娘に與へて、二人の男の子を背一ぱい敎育しなさい、さうして吾が世を明めて二人の子の出世を樂め」と諭したのである、稍谷の妻もやつと前途に一道の光を認めて、僅に胸の治りがついた、長らくの曇りも漸く薄いて、稍谷の家庭に僅かな光と暖まりとが出來た、家畜衞生會の方も相當に收入がある、只近隣から「稍谷の奥さんは陰氣な人ねい」と云はれる位の事で六七年間は薄温い平穩な月日を經過した。

長男義一は十六歳になつて、愈學問は駄目だと極りがついた、北海道に走つて牧夫をして居る、三里塚の兩親も相次いで世を去つた、跡取りの弟は稍谷を馬鹿にして、東京へ來ても用でも無ければ寄らねといふことも解つた、細君の顔はより甚しく青くなつた。

（六）

十一月も末であつた。木枯が靜になつたと思ふと、鼠色した雲が低く空を閉て雪でも降るのか知らと思はれる不快な午後であつた、稍谷は机に向つたなり目を空にして茫然考へて居る、細君は斜に夫に對し、兩手を袖に入れたま丶それを胸に合せ、口を固く閉て、殆ど人形の樣に坐つて居る、此人をモデルにし

て不滿足といふ題の畫なり彫刻なり作つたちばと思はれる、二人は暫くの間口も聞かなかつた、
三女の禮子が歸つてきて、「お父さん只今お母さん只今」とにこ〳〵してお辭儀をしても、父と母もハイとも云はない、禮子は兩親の顏をちらと見たまゝ次の間」へ出て終つた、續いて芳輔が歸つて來た、兩親の所へは來ないで、臺所へ這いつて、何かくど〳〵下女にからかつてる。
「芳輔の奴歸つたな、芳輔……芳輔」
「今日はほんとに、生やさしい事てはあなたいけませんよ」
「こら芳輔……」
父の聲はいつになく荒かつた、芳輔は上目使に兩親の顏を窃み見しながら、體をもじ〳〵もじり坐敷の隅へ坐つた、坐つたかとするともう外見をしてる、母なる人は無言に起つて、芳輔の手を捕らへ父の近くへ引寄せた、
「芳輔……お前は今家へ來しなに小川さんに逢つたろ」
「知りません」
「さうか、小川さんはお前の保證人だぞ、學校からお前の事に就て、二度も三度も話があつたと云ふて、今日はお前の事に就て色々の話をして行かれた、今歸つた許りだが貴樣と行逢ふ筈だが、いやそりやどうでもよいが、」
「貴樣はいくつになる」

芳輔はかう云はれて少し父を侮るやうな冷笑を目に浮べる。
「自分の子の年を人に聞かねたつて‥‥」
「こら芳輔そりや何の事です、お父さんに對して失禮な」
「だつてお父さんはつまらねいことを聞くから‥‥」
「だまれ此の野郎‥‥」
兩親はもう手もふるへ唇もふるへて直ぐには次の詞が出ない、母は瞬もせず我子の顏を視つめて居る。
「芳輔貴樣は何もかも覺えがあるだらふ、今日小川さんの話を聞くと、小川さんはお前の爲に三度も學校へ呼はれたさうだぞ、昨日は校長まで出てきて、今一度芳輔の兩親にも話し、本人にも諭してくれ、今度不都合があれば直ぐ退校を命ずるからと云ふ話であつたさうな、どんな不都合を働いた、義一はあの通り物にならない、跡は貴樣一人を便りに思つてれば、此始末だ、警察からまで、貴樣の爲には注意を受けてる、夜遊と云へば何程云ふても止めない、朝は五遍も六遍も起される、學校の成績が惡るいのも當前の事だ、十五になつたら十六になつたらと思つて見てれは、年をとる程惡くなる、お母さんを見ろ貴樣の事を心配してあの通り瘦てるは、もうその位の歲になつたらは、兩親の苦心も少しは解りさうなものだ、」
「お母さんはもとから瘦てら‥‥」
母はこのぞんざいな芳輔の詞を聞くや否やひいと聲を立て泣伏した、父も顏靑さめて言句が出ない、

「お父さんわたし少し用がありますから館町まで行つて來ます」

さう云つて芳輔は立ちかける、何事にも思ひ切つた事の出來ない稙谷も、余りに無神經な芳輔の物言ひに赫とのぼせて終つた、

「此の野郎巫山戲た野郎だ。……」

猛然立ち上つた稙谷は我子を足もとへ引倒し、所嫌はず拳骨を打下した、芳輔は殆ど他人と喧嘩する如き語氣と態度で反抗した、手足をわな〳〵さして見て居つた彼の母は、力のこもつた決心のある聲を潜めてあなた殺して終ひなさい、殺して終ひなさい。罪はわたしがしよいます殺して終つて下さい。もう生き甲斐のない私あなたが殺されなけれや私が殺す……から叫んで母は奥坐敷へ飛び去つた……禮子と下女は泣聲上けて外へ出た。稙谷も殺すの一言を耳にして思はず手を緩める、芳輔は殺せ殺せと叫んで轉倒しながらも、眞に殺さんと覺悟した母の血相を見ては、忽ち色を變て逃け出して終つた、

禮子は外から飛び込みさまに母に泣き縋つた、一生懸命に泣縋つて離れない、稙谷も坐につきながら勵聲に妻を制した、隣家の夫婦も飛込できて漸く坐は治る。

稙谷は未だ手をぶる〳〵さしてる、禮子は只かた〳〵顫へて母を見守つてる、母は殆ど正氣を失つて物凄しく只ハアハアハア。ハアハアと息をはづませてる、判然と口を開く者もない。

漸くの事稙谷は、

「増山さん(隣の主人)いやはや誠に面目もない次第て、何とも申上げやうもありません、」

「ひやお察し申上ます、如何にもぞりやゝ誠にお氣の毒な、併し稍谷さん余り無分別なことをやつて終つては取返しがつきませんよ、奥さんは余程興奮して居らつしやるから、少時くお眠かし申たがよろしいでせう、」

「どうも面目ありません！」

殆ど人の見界もない様に見えた細君も、禮子や下女や増山の家内から、いろ〳〵慰められて云ふがまゝに床についた、やがて増山夫婦も歸つた、跡へ深川の牛乳や菓が來る、子宮脱が出來たからと云ふので車で迎ひに來たのである、家の有様には氣がつかず、さあ〳〵と急き立てるのである、稍谷はとつおいつ、挨拶の仕様にも究して居たり起つたりして居る。

子宮脱は彼是六時間以上になると云ふ、一番高い牛だから、氣が氣でないといふ、稍谷は行かれないとも云へず、危險な意味ある妻を下女と兒供とに任せて出るのは如何にも不安心だし、稍谷は途方に暮れて終つた、折よくもそこへ西田がひよつくり這入つて來た、深川の乳屋も知つてる人と見えヤアと挨拶して遠慮もなく上つて來た。

「家ですたな、えい難儀であつた、實は頃合の家が見つかつたもんですからな……」

西田の聲がして家の中の空氣は見る間に變つて終つた、陰欝な空氣が見る間に薄らぐ樣な氣がした、稍谷は手短に今日の出來事から目の前の究情を西田に語つた。

「うむ君も可哀想な人だな、成程奥さんも無理はない、嗚呼奥さんも可哀想だ、」

涙もろい西田は、もう目を潤ふした、禮子も出て來て默つてお辭儀をする、西田は起ちながら、
「子宮脫なら成丈け早い方がえいでせう、糟谷君職務は大事だ、僕が留守をして上げるから、直ぐと深川へ出掛け給へ、」
西田はかう云ひ捨てゝ細君の寐間へ這いつた、妻君も同情深い西田の聲を聞いてから、夢から覺めたやうに正氣ついた、さうして這いつて來た西田に起きて禮儀をした。
「今糟谷君から掻つまんで聞きましたが、さう一筋に思ひ詰めんがようございますよ、」
細君は「有難うございます」と細い聲で云つて潛め〳〵と泣くのである。
「それぢや西田さん一寸と行つて來るから頼む」
と糟谷は唐紙の外から聲をかけて出て終つた、西田は細君に對し、外手町に家のあつた事、本所へ越してからの業務の方法、其外玆の家賃の滯りまで辨濟して上げると云ふ事まで話して、細君を慰めた、兒供を立派にして自分が仕合せを仕樣と思ふても、それは當にならないから、何でも人間の仕合せと云ふことは、自分に出來る事の上に求めねばならぬ、兎角無理な希望を持つてると、自分のする事にも無理が出來るから、無理と苦みを求める樣になるなどゝ話されて、細君も只管西田の好意に感じて胸が開いた。
燈しのつく頃に糟谷は歸つてきた、西田は歸つて終ふに忍びないで、宿つて話すことにする、夜になつて禮子も知らぬ客の笑聲に浮れて、細君も起きて酒肴の用意に手傳つた。

稍谷は飲めない口で西田の相手をしながら、今行つて來た某氏の家の慘情を語つた。一人息に嫁をとつて、孫が一人出來たら嫁は死んだ、間もなく息も病氣になつた、丁度今日某博士といふのがきた、病氣は胃癌だと云はれて、家中泣きの涙て居た、牛の方は造作ないけれど、息は助かる見込がない、お袋が前掛けて涙を拭きながら茶を出したが、何處にもよい事許りはないと、しみ／＼稍谷は嘆息した。

西田は挨拶の仕様がなく

「僕のやうな友人があるのを仕合せと思つてるさ」と投げ出すやうに云ふ。

「ほんとにさうでございます」

と細君は如何にも胴に力を入れて云つた、芳輔は十時頃に臺所から上つてこつそり自分の部屋へ這つた、パチリパチリと碁の音は十二時過ぎまで聞えた、（完）

和歌 栄舟選

○ 近藤元

春は來ぬかく思ひつゝ仰ぎ見る日の光こそゆかしかりけれ

さびしくば泣け大海は洋々とたゞありぬべし日はしづかなり（根本にある若山牧水兄に）

たゞこがれたゞこがれつゝ我れはゆく白き鳥とぶ海なる君へ（一首、牧水兄の宿をたゝきて）

相見ては云ふこともなしのたまはずたゞ相抱き春の海見る

うすぐらき海ははてなし我か心すさびの中にかなしさを見る

ほう〱と櫓をおす聲のきこゆなり小ぐらき海の氣をゆるがして

海の聲はひまつはりぬ男の子二人さめてかたらぬ枕に近く

君をのこしこゝまで來れば夜はあけぬあゝいま月の空にすはるゝ

やすらかに春の午後の日てらすかな我が胸の内なにごともなし

汽笛の音電車の軋人の聲たゆたふ夕海なわすれそ

○ 梶原白花

日は雲にうごきてさむしかなしめる鳥の音をきく冬枯の森

白き日にうたれて寒し烈日のほのほがもゆるくちびるを戀ふ

初冬のさむき朝かぜわが唇を吹きからかしぬ君はあらじか

父の眼のつめたき色にうなだれぬあゝわが母は老いにけらしな

夜の鴨居うつるかゞみの裡に棲むものなど思ふひとり目覺めて

人界にわれすてられぬ魔よきたれ逢魔が時の二時はいま鳴る

かなしめる子は勇敢の子ににたり黑き夜坂も恐れずて行く

○　太田生麥

「この擬心なき人入るなかれ」この語のまへにためらひしかな

かの君の眸かくれよと日輪に背きて日毎あまたゝび泣く

いつはりかまことかあらず人心すべてをもちてわれは僞に生く

われ問へど君は答へず君問へどわれも答へずかゝる日ありき

悲しみの後に來ぬべきさびしさを君に語らばわがこゝろ足る

掌をひらき面の筋のいちじるく歪める見つゝ老をおぼゆる

晴れし日の廣き野よりの歸るさによき手段備りぬその手忘れず

虚ろこと學ぶは苦しおろかなる心なれどもかくはおもひぬ（米秀氏に）

「おれのみは會て若くべきものぞなき」かゝる淋しき誇りもつわれ

○　小川眞清

わが胸の磁石の針のさすところつねに君あり美しきかな

野の石にひとりゐよりて秋の日のおつるをながめさめ／＼と泣く

わが宿は妓樓に隣る俗聚の地にあり夜ごと管絃をきく

椽にいでてかず／＼着きし消息の中の一つをなつかしみ見る

菊咲きぬ高萱なびく夕月の丘うちこえて君か來まさむ

葦原や小舟つなぎて夕雨のそぼふる中を人のぼり來ぬ

牛ぞゆくうらがれはてし蓮田のすゑに夕の雲紆うして

君本きるとうしろの山にわけ入りぬうすき雪ふる年の一日

麥の芽の寸ほどのびしわが背戸の畑にふるなりむらさきの雨

○　小島ますこ

君まさぬ夜はまじものゝ類ともぞゝ走りする風の音かな

あきて我もうけたる鋭き白刄胸刺す折のなきに

しもあらず

さらば我君か心をうろくづの雲に棲むなる日迄たのまむ

胸しぼり泣けば心のはれむものつれなき事もたまさかれあれ

白きものちらちらすなり日を代へてゆけなわか脊子そのひまもがな

幾人の心あつめてつくられし性かとやうに我をあやしむ

○　山村龍子

我れ女いさゝか人にをとりたる衣きし日ほど悲しきはなし

七人の男の中を妻と云ふ冠をきておごそかに行く

いさゝかのいさかひありし其日より我等が戀は蘇生り來ぬ

春の日は人としみ/\語らふも出でて野風に吹かるゝもよし

若き國を君足疾くも過ぎますなふたゝび神のみちびかずてふ（梁村様への返し）

○　日下天香

青きうみふかさもわかぬ底にして玉こそ光れきみがみひとみ

強ひられて登りし樓の灯のもとにわなゝくふるふわが手よ足よ

暴風雨のあとかならずきたるよき日和わが胸にこずひとゝせをすぐ

胸の戸をかたく閉してたのしみもかなしみもなく一年過ぎぬ

くたびれてあゆむをいなむ牛のごととよめくくれの大路をゆきぬ

くれ近きどよみの街をくろがねの板負ふ心地うなだれてゆく

ふみよめば君をし思ひ筆とれば君がみ名かくさがとはなりぬ

ほうとなる汽笛はわれのはく吐息とかさなりあいぬ場末の夕べ

○　井淵みたま

あき足らぬ心の人の印象を消すべくつとめ尚ほ深うしぬ

行きなれしこゝ單調のきらひありされど危ふしふみて見ぬ道

悲しみを强ひていつはり得たれども君に逢ひては先づぞなかるゝ

まれに見し書のなかよりひろひたる悲しき人はみなわれにゝる

悲しさを訴ふる子もあらぬ身の一つをなげく海にむかひて

恐しき影をば見たり何故に死といふ海を世にはつくりし

○　松本白衣

背かれし後のかなしさ涙ともなりえて重ぅ胸をうつかな

故わかぬかなしみとして居けるものこの夜正眼に見出てつるかな

もの丶かげみなめづらかに眼にうつる二月となりぬ空の高きに

いづくにか少女泣くらむ戸をくれば白枯れし野に雪降り出てぬ

あはれ今日も昨日のまゝの天地か地は溶けながれ日は饐えもせよ

嘴つぐみえ啼かぬ鳥はうるみ眼に海に吸はるゝ日の色をみる

○　町田義雄

あゝよしなよしなき室に入りてけり斯く思ひつゝ悲しみもせず

血と血とはうづまきてあり僅かなる烟の白さに相へたてられ

あはれたゞ時計の如く來る人の看護(みとり)にも泣く日比となりぬ

聖人來ませ我れ未だ君がうれしみを學びつゝ居し昔語らん

○　關　孤帆

ゆゑしらずあだかも鳥ひたすらになつかしければ夜をのみぞまつ

日ぞ暮るゝ一鳥飛ばぬ夕空にたよりなげなる雲のゆくへよ

虛心秋立つ窓に日もすがらゆきゝの人のさまを見てゐぬ

○　眞々田薫

白日にわれは涙をそゝはかと寒き愁の追り來るに

冬の日や薄きがらす戸そを透ける女の顔青ざめしかな

何事か起らむとする冬の日も海は靜かに靑み笑へる

かへり見すわが歩み來し過去の路靑の色のみ多かりしかな

應募和歌は小石川區原町百卅三尾上柴舟宛の事

俳句 大谷繞石選

雀の子

朝庭の御微祿を鳴く雀の子　象外
堯舜の庇に安し雀の子　同
雀子の不意に鈴鳴るお宮かな　同
堂の繪馬見るや子雀鳴いてゐる　同
雀子や金澤文庫廢れけり　同
門臼の響に落ちぬ雀の子　同
觴を立てゝへこむ庇や雀の子　同
酒庫の窓に入りけり雀の子　梢南
子雀の飛んでは啼いて樋の上　賓水
竿の上の一羽危し雀の子　煙洲
山門に垂れし巣藁や雀の子　枯葉
雀の子つゝきに來るよ彼の子又　呼苦水
屋根つゞき末社十七雀の子　のぶる

張板にとまりて糞す雀の子　峽花
得のぼらで臼の下なり雀の子　耳山
子の泣くに忘れ置きし米や雀の子　恒女
子雀や米あげてある石地藏　雪丸
春の日を子雀馴らし遊びけり　瘦脚
捕られ子を訴へ鳴きの雀かな　大哲
籠に慣れ人に慣れけり雀の子　杣人
雀の子庭まで下りてなきにけり　北舟
子雀や馴れて米食ふ掌　人生
雀子の一飛小さき望かな　儺川
糞すれば放す童や雀の子　寒山老
軒にあたる紙鐵砲や雀の子　夢筆
雀子の餌つかで過てす二日かな　幽溪
子雀の日毎に馴れて餌飼哉　如是
子雀を放ちやる親の忌日かな　賢子
一羽落ちて裸なりけり雀の子　魔氣多
子雀に飯まいて居る流人かな　孤燈
子雀や親も來て居る裏の畑　春溪
禁獵の高札に雀の親子かな　血笠
八幡路は藁家がちなり雀の子　如水
雀子にパチンコ打つや里童　菜の花

雀子は餌をやる妹になれにけり　桃里
暮れぬれば籠に憂や雀の子　葛郎
はやらざる大弓店や雀の子　驟雨
　偕の言葉に雀子放ちけり　老杉居
雀子の何に追はれて座敷哉　枕橋
一寸の草に風あり雀の子　渓外
南吹く堂屋根の草や雀の子　丹羽郎
雀子や鷄の餌に椽の先　華泉
南天の屈く軒端や雀の子　白村
雀子や大佛殿の家根の上　患多
雀子や賽錢箱の中に鳴く　郊花
暮るゝ藪雀親子も旅寝哉　少雨太
雀子や舌切り雀遠き椽　紅葩
船に親の鳴けば子雀橋桁に　冬櫻
教會の塀にざれ繪や雀の子　狠子
雀子をうつくしきものに清女哉　不言
門入れば樹長き影や雀の子　暮雨
雀の子千社札はる鳥居かな　曳尾子
雀子や寄進瓦の蔭日南　星象
風に散る柳の花や雀の子　十八公
子雀や麥畑もある寶屋敷　茶童

雀居る塔の高さや親か子か　優和寺
子雀の籠を日向になほしけり　背雨
雀子や魚板の音に巣に歸る　月耕
人の子や雀の子とる肩車　方外
裏返し干しある下駄や雀の子　菊秀
屋根までは梯子短し雀の子　蓬雨
百までの踊も習ひ雀の子　雨圃
雀子や隣の屋根に日が當る　秋紅蓼
竹の間や朱塗の籠の雀の子　秀菜
雀子や町の繁華を鳴きかはす　尺水
畑守が子飼の雀呉れにけり　木蓮
雀子や焼けのこりたる寺の塔　茶青
雨垂るゝ檜の下枝や雀の子　木犀
雀子の高音高とぶ日數かな　彼岸堂
子雀や根岸の里の竹籬　魯斧
子雀や飛ぶも遊ぶも花の村　奇溪
雀子や正倉院の屋根庇　槐山
雀子や都訛りの人の軒　茅散史
子雀に君がこぼれの御菓子哉　同
雀の子大工が取つて呉れにけり　翠畝
飼ひの多き小籠や雀の子　同

雀の子屋根から落ちて飼はれけり　萍月
雀子や瓦に足のおぼつかな　同
籠の隅にふくれて居るよ雀の子　露々樓
雀子の如き君がとけなしけり　同
雀子や接木の人に慣れて啼く　風水
雀子や戸々種蒔に朝を留守　同
巣立せし雀こちむきあちら向く　鶯溪
雀子の糞して去りぬ庭の石　同
子雀や戸の閉てゝある橋番所　照楓
巣低きは野分の兆や雀の子　同
得飛ばじと寄れば雀子逃げにけり　楚雨
子雀の腹の和毛や東風が吹く　同
雀子や逡巡として塔の屋根　花影
無住寺の椽や軒端や雀の子　同
子雀や竹の嵐の詩仙堂　醉紅
雀子や歸順の民の村を成す　同
親が下り子が下り臼の雀かな　小々
山寺や魚板の上の雀の子　同
雀子の何の宿もみな人素朴　虚泡
雀子や晝説教の寺庇　同
雀子の鳴き居る枸杞の籬かな　春溪

雀子や一尺飛んで巣に戻る　同
神童が奉納の額や雀の子　春夢
二の丸は炎上したり雀の子　同
雀の子叩く桶屋に馴れそめし　五得
雀子と庇と映る盥かな　同
子雀に起き遊ぶる子の晨起かな　起堂
親程に肥えて雀の一番子　同
子雀の從の踊も習ひけり　總子
雀の子南圓堂を巣立ちけり　同
雀子やペン〱草の雨に鳴く　青城
子雀や黑木積みたる山の坊　同
三日飼ふて放ちやりけり雀の子　水竹
雀の子日當り草に遊びけり　同
雀子の囀りなれて昨日今日　同
ふところに雀子入れて戻りけり　隈川
糸つけて雀子放つ座敷かな　同
雀子の鳴く可愛さに放ちけり　同
雀子や飛泥干す竿の鞠袴　太郎
子雀や森の鐵吊る庇裏　同
雀子や竹馬捨てゝ兒等在らず　同
雀子の墓に花束げんげ哉　遊翁

製紙場の紙干す板や雀の子　同
海鳴りの響く寺椽や雀の子　同

本號應募者總て百三十二名、句數總て二千五百一句、殆んど空前の多數なり、しかして好句の甚だ尠なかりしは撰者の誠に遺憾とする所なり。

募集課題　木蓮花　三月十日締切
竹の子飯　四月十日締切

定め

應募句は加賀國金澤市櫻畠九番丁大谷正信宛の事
句數は一人十句以上三十句以下の事
締切當日までに當方へ届くやう郵送の事

○本號の課題に對して百句投稿の雪丸氏、八十句投稿の患多氏、六十句投稿の小々氏、三十九句投稿の秀栄氏に白す、今後は「定め」に從つて御投稿下されたし。

○本誌前號撰句中
名を繼いで姉に出代る妹かな
出代や犬遂ひ返す橋向ふ
は同一句と類句とを發見したるにつき抹殺す

○青可氏に御厚意を感謝す。



時言數則

樗陰生

▲お役所風を根絶すべし▼

文部のお役人をして小松原文相の執務の態度なり、屬僚に對する模樣なり、將た又其敎育方針なりを語らしめんものと、余一日車を文部省に驅る。時に午前九時なり。玄關に立ちて受附室を見やるゝ受附居らず、止むを得ず立往生すること二三分。年の頃二十六七と見ゆる所謂腰辨先生の來るを幸ひ、「濟みませんが受附を一寸呼んで呉れませんか」といふ。其先生僕に何等の挨拶もせずして行き過ぎしが、いくら待てども再び

來らず。僕は失敬な奴だと思ひながら、再び又立往生すること五六分。又一人の腰辨先生來る、此男にこ〳〵して人相よき故、又前言を繰返して依賴するに、「受附はまだ來ないんでせう」といふ。それから「田所さんか、赤司さんに逢ひたいのですが」といふ。其先生曰く「それならどなたもまだお出になりません。十時前なら誰も來ませんよ」といふ。仕樣事なしに引返し、翌日又十時に出直す。今度は受附が居る故、受附に向て「田所さんに逢ひたいが」というて名札を出す。「田所さんといふと文書課長の田所さんですね、まだお見えになりません」と答ふ。「そんなら赤司繁太郎さんに。」「赤司さんもまだお見えになりません。」「そんなら待つて居るから上草履を貸して呉れ。」「上草履はありません。」「そんなら誰か秘書課の方に逢ひたいが。」「秘書課の方なら正面の玄關の方に廻つて下さい」こんな押問答の末玄關の方に廻りしに玄關にも上草履はなく、こゝの受附も亦甚だ不親切にして一向に受附らしい所なし。東京市廳などに行けば受附親切にして用事も早く分り、氣持よし。屬僚の多くが下駄履で通ひ、上草履で歩るいて居る文部省に上草履なしといふは甚だしき不體裁といふべく、殊に受附が木で鼻を擤んだやうな應待をするに至ては沙汰の限りといふべし。又學生には勉學が足らぬとか何とかいふ訓令を出して居る文部省の高官等が十時前に役所に出ることないとあつては些か訓令の估劵に關はりはせずや。或は曰く、今は貴族院が開けて小松原文相貴族院の方に行て居る故、役人も怠けるの也と。それならば尙更ら以て不埒な譯也。長官が見ぬ故怠けるといふが如きは全く敎育の本旨に戻る最も卑むべき心事にして、敎政の任に當る資格なきものといはざるべからず。我等は我官署及び官吏社會が十年前に比してはお役所風、及びお役人根性を少からしめたるべきを信ず。されど未だ人民に對して不親切に、物事が兎角事務的に行かざる弊の殘れるを惜む。最近予の自ら接觸せる一小事を一例としてお役所風とお役人根性の根絕を論ず。是れ蓋し獨り文部の一省のみを尤むるが爲めにあらざる也。

▲時事に對する信用すべき議論の缺乏▼

知る者は言ふを得ず、言ふ者は知らず。是れ時事問題の眞相が弘く世間に知られざる所以也。吾人は能ふべくんばかゝる社會狀態を改造して、知る者は言ひ、知らざるものは默せざるべからざるに至らんことを希望す。然れどもこは今俄かに實現すべからざる理想なるやも知るべからず。容易に實現し得べき條件としては記者は其知れる範圍に於てのみ知つた事を正直に論議し、知らざることを知らずとして、其の儘に論議せずにおくにあり、一言にしていへば正直なるにあり。一寸の錦は百尺の襤褸切に優り、一言の眞實は百萬言の虛僞よりも價値あり、吾人は今日の時事評論を見る毎に、記者の見聞することの少きを憂へずして見聞したることを僞り傳ふるの弊に堪えざるを覺ゆ。褒むるも爲めにする所あり、貶する爲めにする所あり、主張するも眞に信ずるにあらず、反對するも眞に悋むにあらず、皆一種の利害關係、情實關係より、しか筆にし、しか論議するのみ。吾人は今日に於て實際界の情僞に通じたる人のいゝ加減の言説よりは、通ぜざる門外漢の眞摯熱誠なる聲に耳を傾けんことを望む。其點に於て吾人は好んで山路愛山氏の評論を讀み、又三宅博士の說を快とするもの也。若し夫れ二氏の如き見解を抱き、而かも二氏よりも深く實際界を知悉せるの士あつて評論の筆を取らば天下翕然として其下に集らん。求むる事切なれば必らず與へらる。吾人は我國民がかゝるものを求むるの念日一日よりも甚しくなりつゝあるを見、早晩かゝる記者の出現せんとを信ずるもの也。

▲よき作物を掲載せんが爲めのみ▼

近時「中央公論」に出る小說の顏觸の極つて居るを難ずる人あり。曰く何時も同じ人の作物のみでは鼻に附く。曰く今少し新進作家を紹介せよと。言甚だよし。吾人も能ふべくんば每號彩りを代へ、又新進作家をも紹介したし。されど見渡した處眞に價値ある作物をなしたる人幾人ありや。藤井白雲氏も先頃「讀賣」紙上に於て勝れたる作家の極めて少きを嘆じたるやうなるが、雜誌經營に從事するものは何れも同嘆せざる能はざる處。成程今日第二流と目せらるゝ人にして第一流の人の失敗の作よりよき作をなし得たる人もあるべく、又なし得る人もあるべし。されど第一流の人は腕

にどこかしつかりした所ありて、よし失敗に畢つても、全く見るに足らぬもの少し。之に反して第二流の人には甚しき出來不出來ありて、其よく出來たものに當れば幸ひなれども、不出來のものに當れば全く見るに足らず、讀者に對して申譯なきやうなものを載せざるべからざることあり、これ吾人の雜誌を愛し、讀者を愛するの情よりして忍びざる所にして、選擇が狹いといふ譏を甘受しつゝ、危險の少き方面を採りたる所以也。然し若し第二流のみならず、第三流にても或は全く無名の人にても自信ある作物を提供し、若し氣に入らぬ時は返稿しても差支なし、決してわるい顏をせずとならば吾人は双手を擧げて此等の作物を歡迎し、此等の作物中最も勝れたりと認むるものを載せて一面には單調を破り、一面には新進作家を紹介すべし。吾人が今日まで第二流及び新進の人を除り取らざりしは一面は誌面狹隘にしてかゝる余地なきにもよれども、一面は多少名のある人の作を返稿するのも禮にあらずと思ふ故、多く之に依賴せざりしのみ。要は雜誌によき作のみを載せたがりしが爲めのみ。出來のわるい時は戻されてもよしと思ふ人は何卒ドシ／＼寄稿せられよ。吾人は最も公平に其價値を判ずることを勉むべし。決して知名、無名、一流、二流の名のみに關はるにはあらざる也。



女義縱談

木堂

△昇之助隱れ、光龍去る。東都の女義界爲めに寂寥を極むと。蓋しその人氣ありしを云ふものなるべし。

△澁川玄耳氏、朝日に於て綾之助を評して曰く、其の藝取るに足らざれども、美貌の能く人目を惹くものありと、人氣の大部分は美貌の裡に存す。

△之を以て推すに、昇之助の人氣を以て彼一人の力となすは誤れり、其の七分迄は絃として、更らに美なる昇菊を有したるに依る。

△昇菊今は朝重の絃なり。朝重の藝昔日と異らずして

稍々重きを斯界に置かるゝが如き觀を呈し來りたるは、全く絃昇菊の餘慶のみ。

△朝重の師朝太夫は富士松某の別號を有するもの也。彼の藝風依つて以て察すべし。

△「朝重を聽く、宛然として女性的朝太夫に接するの感あり」と、如此にして彼を賞揚し得たりと信ずる者あり。頗ぶる反襯の妙味あるを覺ゆ。

△朝重は未だ藝の何んのと言ふべきにあらず。彼にして學ぶ所あらんとせば、其の叔母小土佐に就くも猶ほ餘師あるべきなり。

▲團昇の語り口は餘りに氣が利き過ぎたり、彼の絃亦餘裕に乏し。昇吉已に歿し、小團昇また看板の器にあらず、彼の老境や悲しむべし。

△女越路の團司大阪に歸へる。彼は林之助一流に比すべき者にあらざりき。彼にして初めて藝を云々する資格ありとも云ひつべし。

△彼の絃たる東六は、彼を彈くとして、其の力量に甚だ小ならざる差あるを見たり。知らず阪地猶ほ好絃を得る能はざるものか。

△三九二の絃は白痴威し的なり、無性に强く彈くのみ、三吉は流動の趣を缺けり。之を譬ふれば野邊を流るゝ小川の如し、淸けれどもその音や死せるに近し。三九二と三吉を搗き合はしたるものは昇菊の絃ならん。

△吉一の絃に至つては正にその堂に入れるもの、彼の技倆は東都の女義界を空うす。曲を追ひ、節に從ふ、往く所其の妙を恣にす。彼の絃には生々の活機あり。

△吉一、昇菊、優劣と云ふ如きは、恰も富士と筑波の高低を論ずるに似たり。苟も眼あるものは一望判明、八朶の雲頭に秀つるを拒むべからず。

△組幸は天分に於て羨むべきものを有し居るもの也。一二三と揃ひたる聲、之れ豈に無上の天惠にあらずや。

△然れども彼は未だ全く圓熟の域に達せず。彼の語り口には何んとなく後ろより追擊せられ居る如き思ひせらる。故に往々にして喧噪、一場の物語をして支離ならしむ。而も東猿の如きに至らず。彼はその失敗の時と雖も、猶ほ片鱗の雲間に輝くものあるを失はず。大い

なる將來のある所以也。

△東猿の急噪は、實に一曲の美を破壞し盡くす。途方もなき大聲より無理に下ろし來たる。如此して豈に何等の感興あるべけんや。

△『大阪登』風を臨んて比年相次ぐ。而して南昇は團司と共に異彩を此の間に放ちしもの也。

△彼は南部の門下なり。齡三五を出でずして早く浮ッ調子の域を脱出せり。薰、綾菊、相顧みて何等の顏色かあらんや。

車寄傍聽記

行々生

此處は京橋は南鍋町交詢社の車寄である。土間の爐には火が小山のやうに起(おこ)つて居る。別當の△○□の三人は面々の御大將の歸へるのを待つて居た。

△隨分長いぢやないか、大將何うしたろう。

○先刻ボーイに聞いたら何もないと言ふたッけ。

△ボーイが然う言ふならないだろうが、何にしても長いなあ。

□をや、尾崎が還つて來たぜ。ぢや乾度何かあるんだ。

○尾崎つて市長の尾崎か。

△彼家の女中に別嬪が居るよ。

□なに、ありやお孃さんさ。今度○○會社の專務取締に嫁くさうだ。

○不潔い家だなあ、廣い斗りて庭ても何んでも荒れ切つてらあ。

□十圓の家賃なんだ、そりや普通さ。何んと言ふても東京の市長は尾崎よ。潔白だから感心なものだ。家の大將見たいにコンミッションなんか取りやしない

所へ×が見える。

○×か來たぜ。

△鈴久のか?。

○鈴久つて何んだい。

□鈴木久五郎を知らんか。天下の相場師ぢやないか。

×揃つてるなあ。時に今度の靜岡の事件は非道いな。

△むう、あれか、百圓札から足が付いたと云ふぢやないか。ちやんと新聞に出て居らあ。

×百圓札ては解る筈さ。二万圓からの金高を百圓札斗りて銀行から取り替へたといふもの。

□何うしたのだ。

△百圓札ては己も馬鹿を見たとがあるよ。

△此方とらは百圓札など持つた事がないだろう。偶々銀行から取り替へ

て貰つた。此奴を一札僕に捻ち込んで洲崎に繰り込んだ。

×好い威勢だつたろう。

△處がそれからが大縺だ、『これで釣錢を與れ』と捻れくり廻はす一段となつたろう。すると直く其の方は何者だと來た。警視からお調べよ。

○おや／＼、それはて宛然で女郎買に調か受けるに行つたやうなものだ。

△全く然うよ。金はお前のものだろうから、それを消費ふのに彼是言ふのではない。規則だから一應は調べなけりやならぬ。邸の方に電話で聞合はせるが好いかと云ふ。甚面白くもれえ、少しも差支御座らんと威張つて云ふて遣つた。

×何にもそんな時威張なくても好さ相なものだ。

□蹈り自棄だのだらう。牛間な目に逢つて。

△牛間丈けは餘計だ。

□餘計なら負けて遣ろうよ。ハア…………

新刊批評

▲半生　中村星湖著並發行

著者の短篇十二を集めたるもの也。余は未だ全篇を精讀せざれども、其五六を一讀したる感想よりいへば何れも皆未製品也と斷言するを憚らず。從て再讀三讀して尙厭くを知らずといふ如き名篇なし。又佳作もなし。されども其何れの篇に於ても何となく新らしき、清き印象を與へ、又自ら見、自ら感じて必らずしも他人の跡を踐踏せざるが如き態度に於て此作者の將來は大いに囑目に値すべきことを思はざる能はざらしむ。予の讀める中にては卷頭の「親」最も傑れ、「病女」の如きは、作意餘りに露骨にして而も亦幼稚に、「嬰兒」の如きは芝居がかりの分子の多過ぎるを惜む。少壯にして前途ある著者にあつては、寧ろ前半生を抛ち去るべし。此書の如き恥つべき半世の未製品として焚き捨てんと欲するの日の速かに來らんことを祈る。（哲生）（定價五十錢）

▲英國殖民發展史　永井柳太郎譯述　早稻田大學出版部發行

早稻田叢書の一編として發行せられたるものにしてオックスフォード大學教授エジャートンの「オリジン、アンド、グロース、オブ、エングリシュ、コロニーズ」を飜譯したるもの也。譯者は原著者に就て親しく殖民學を專攻したるの人、最も信用すべき飜譯書の一といふべし。而して原著は獨り英國のみならず、上古以來の各國殖民事業の沿革を說きたるものなれば、當今の大問題、活問題たる殖民事業に冷淡なる能はざる人にとつて多大の參考となるべし。（定價一圓廿錢）

▲新刊批評廿餘項頁數超過の爲め組置となしたり

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝　神田裏神保町 上田屋
仝　京橋尾張町 東海堂
仝　日本橋呉服町 北隆館
仝　本郷本富士町 盛春堂
仝　京橋鎗屋町 良明堂
仝　日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町 盛文館
仝　京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の内より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵劵代用は必ず壹割増の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年二月廿四日印刷
明治四十二年三月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

